第二巻第拾六號

女子文壇

明治三十九年十二月一日發行（毎月回一日）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



籔柑子



高野はせを女史筆



寒月

鏑木清方筆

郵便はかき



CARTE POSTALE

女子文壇附錄繪葉書

新版

西田常男先生著

圖畫のけいこ

本書要目

▲瓢簞から駒▲花くらべさま〴〵▲おまるのけいこ▲これでも樹木▲獸のとり〴〵▲角ばつたもの▲虫のかず〴〵▲人のそれ〴〵▲圓い筒▲前の應用▲魚のいろ〴〵▲鳥の

洋裝全一册
定價金十錢
郵税金四錢

柿山蕃雄先生畫
日本の家庭社編纂

家庭娛樂 子供と圖畫

全壹册定價金六拾錢郵税八錢

この書は圖畫の簡易なものより、だん〴〵複雜なものに進んで、小供の日常目に觸るゝ動物や、植物や、人家山川の風景などの書き方を分りやすく説明したものです。子供のお手本としても父母や教師の參考書としても最も適當で面白からうと思ひます

裝釘の美麗なるは本書の特點!!!

佐々木敎授考案
及川泰次先生著

地理の讀本 郷土

本書要目

▲あてもの▲軍艦の縮▲天狗の鋸▲變な流行病▲棒の影法師▲一つの依頼▲天文家▲奇妙な此土產▲磁石の藝當(一)▲磁石の藝當(二)▲船の眼▲測量隊▲笹舟川▲夕立後の運動場▲水の身上▲大灰神樂▲燒いた餅▲怖いものの親玉

洋裝全一册
定價金拾八錢
郵税金四錢

發兌 東京神田 同文館　大賣捌 東京東京堂◎大阪寶文館

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムデスカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固な**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確認す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奏効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢　特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月閉止りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試驗あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**現はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

從來賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發又は他病に變ずる憂なき斯世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢最劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治三十四年十月創刊

壇友之優待

天下無敵青年筆戰雜誌

奬學大懸賞

毎月二回一日十五日發行

新年大附錄

◎牧場の朝………（大判上等用紙コロタイプ色刷）………佛人チャーレス、ジャックー氏筆

右は東都有數の稱ある東京印刷會社の印刷にして原書は巴里美術館に藏せらるゝ世界著名のものなり

◎雪のあした………（水彩密刷繪葉書石版十數色刷上製）………三宅克己先生筆

◎御題新年の松（寫眞銅版）其他數葉本誌寫眞班の苦心撮影せられしもの及び泰西名畫を掲げ以て新年號の色彩とす。

第七卷第壹號

（四十年一月一日發行）

秀才文壇

大判百三十頁

正價表

一冊金拾錢〇六冊金五十七錢〇十二冊金一圓八錢〇廿六冊金二圓八錢（郵税不要）

年二回定期増刊

内容と整備

毎號選評大家の分擔欄（詳細は本誌第廿四號以下にあり）

△叙事文……文學士 中内蝶二君

△抒情文………仝上

△新躰詩………馬場孤蝶君

△俳句………高濱虚子君

△新派和歌……文學士 尾上柴舟君

△和歌……帝國大學講師 佐々木信綱君

△漢詩………小笠原虚舟君

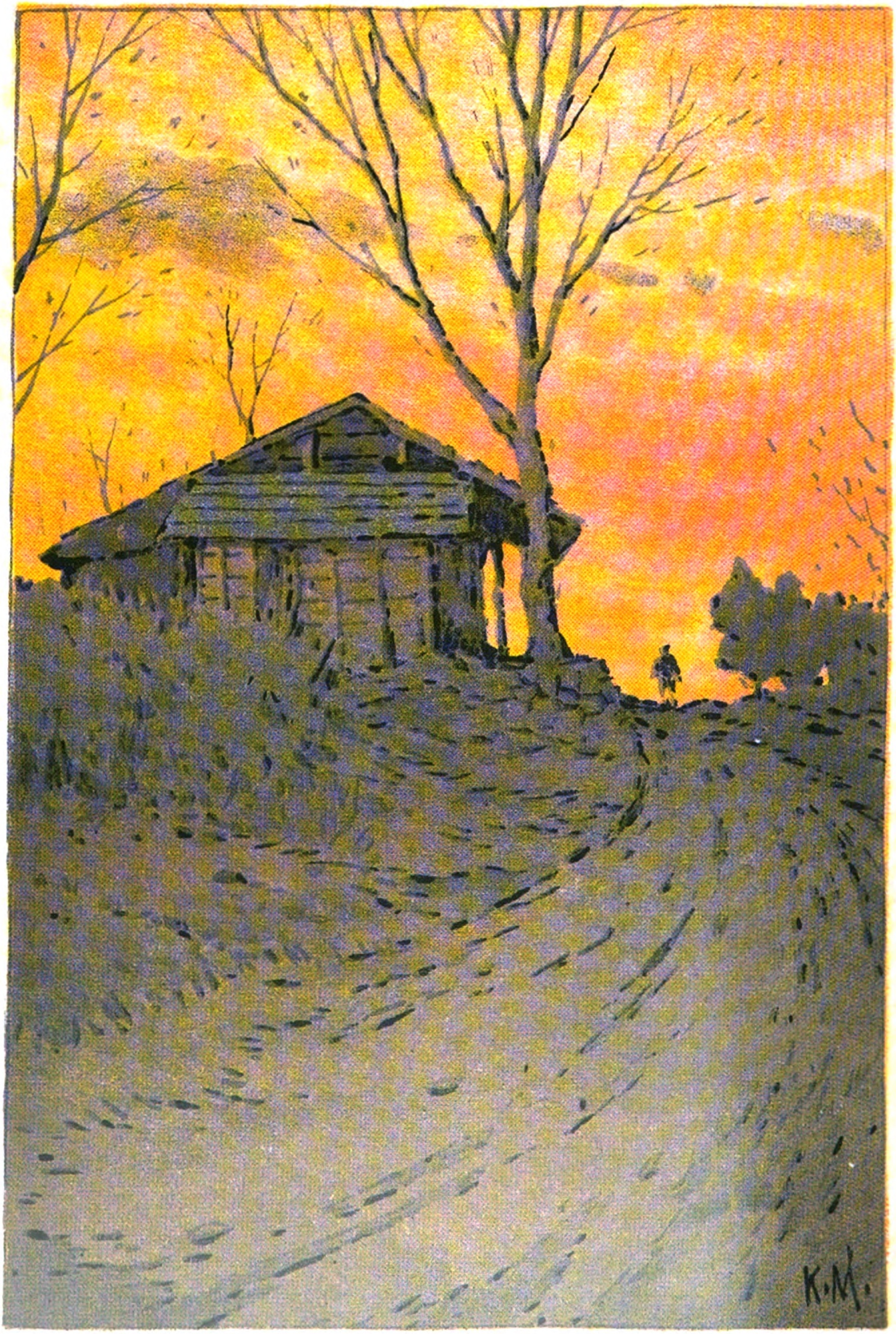
△評論文△短篇小説△日用文△五行文學△人物評論△文士會（以上編輯局選）

寄稿大家（文學士武島羽衣君〇文學士大町桂月君〇文學士沼波瓊音君〇文學士尾上紫舟君〇野口米次郎君〇河井醉茗君其他數名）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目（振替口座壹九五五番） 文光堂

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

冬枯の夕暮



三宅克己先生筆

女子文府の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

新學期を開き會員を募集す

大日本女學會

●本會は女子教育の普及發達を圖らんが爲に諸名家の講義に係る女子必須の諸學科を網羅せる女學の講義錄を發行して會員に配布す●小學より進みて高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會に入會して家庭に居ながら諸學科を講習し以て女の道を辨へ給へ●本會の基礎確實にして講義錄の有益多趣なるとは夙に世の定評あり昨年冬本會創立十週年に當り畏くも　皇后宮より御歌特賜の恩命を蒙れり●當月より第七回目の前期講習を開く此際とく入會申込あれ●詳細の會則希望者はハガキ又は電話にて請求あれ直に送呈すべし

○本會創立以來拾貳年會員四萬人に達す○月謝金貳拾五錢○入會金不要

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花、戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なてしこ

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●十一月二十日 初卷發行

東京市麴町區下二番町三七

大日本女學會

電話番町一三三〇

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

（乙の二）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第三回新學期開始

●會員大募集　目下入會の最も好機也

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに「女學講義錄」を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、講學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主として丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で優に全期を終る事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽になれば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

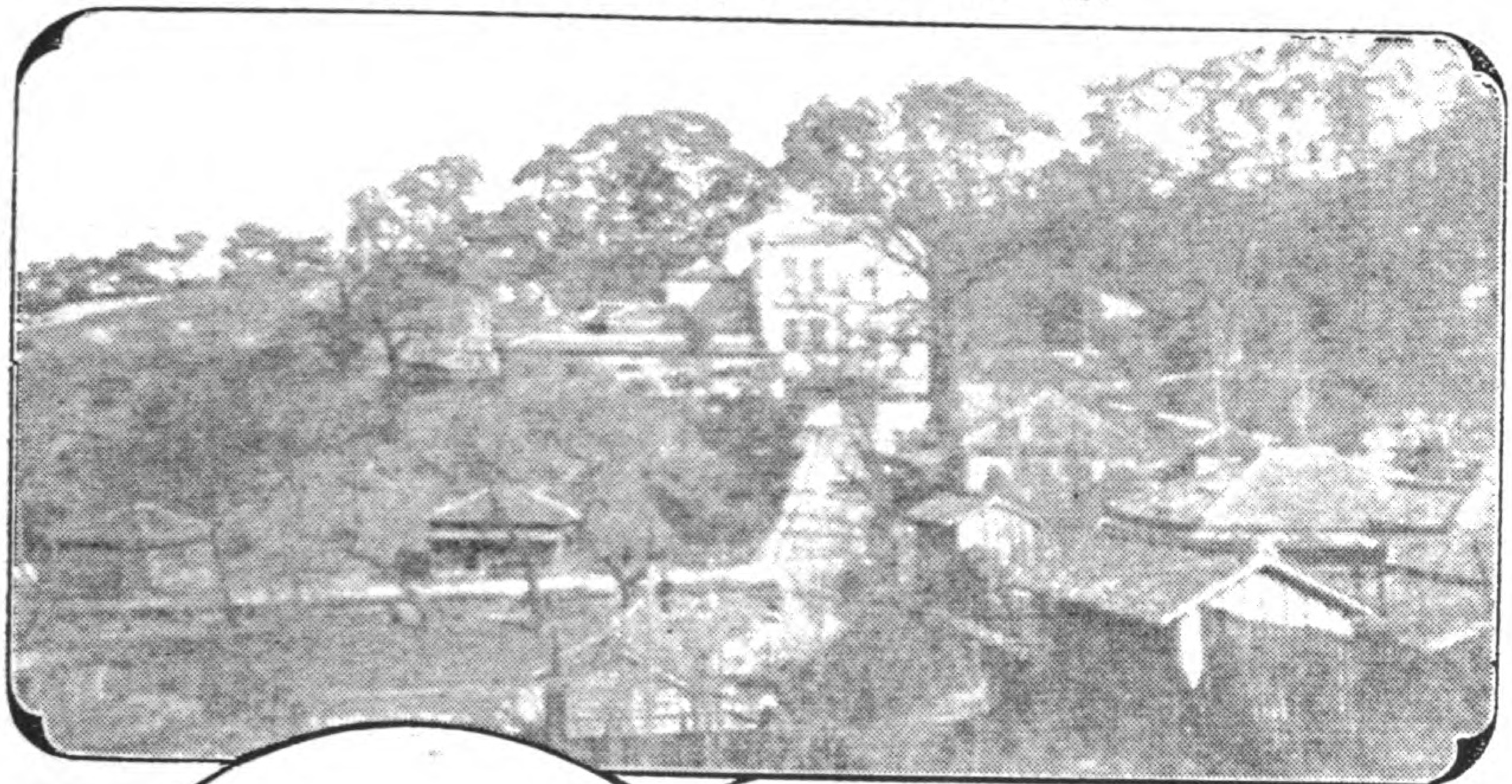
●東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）大日本淑女學會

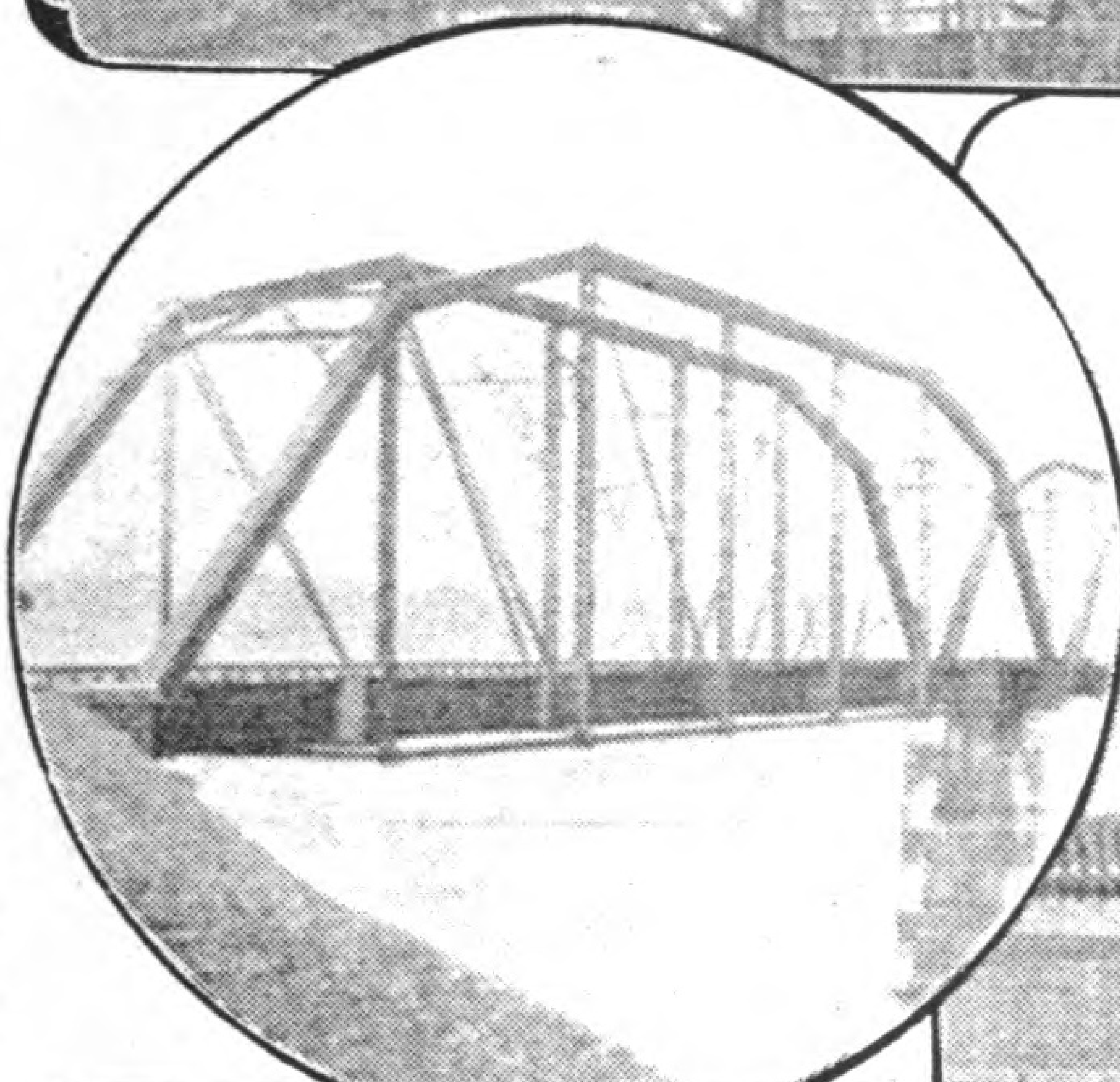
揷圖　ヘルバート、ドラツパー氏筆



アリアドネ姫　（說明は本誌廿三頁にあり）

京城公使館（韓國奧田恵以子寄）





漢江の鐵橋（手塚静子寄）



龜碑（韓國手塚静子寄）



韓國婦人風俗（長門小國敏子寄）



房州の海岸



下關市春帆樓
（長門國弘きく子寄）



榛名湖畔
（伊香保　殘月女寄）

誌友おもかげ



（磐城）高橋信子

（上野）鶴子





（阿波）鎌田寅枝子

（陸奥）林さだ子、定廣ぎん子、木津きぬ子





（渡島）三倉きく子

（越中）安田崎子、吉江孝子





（大坂）橋本賀壽尾子



（大和）小島始女子



（京都）佐藤植子

誌友諸孃の肖像を始め風勝の優秀なるものは歡迎しますから其寫眞を澤山
御寄贈下さい掲載は到着順により未載の分は順次號を逐つて御紹介します
（寫眞は御希望によりお返しいたします）

報知新聞記者中村木公君編（三十九年八月新刊）

實地精査

女子遊學便覽

全一冊洋裝　正價金參拾錢　郵稅四錢（郵券代用一割增）

萬朝報（八月十二日）評して曰く　都下各女學校の世評と、其校則の概要を揭ぐ、坊間幾多の遊學案內が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を揭げたるものに比すれば、調査は善く行届けり、尙ほ職業案內及學費の概算をも加へ殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

中央新聞（八月廿一日）評に曰く　實地精査と銘打つたるだけありてさすがに苦心の痕見ゆ、第一編に於て女子と學問の關係を說き次に東京遊學案內を示し其れより東京遊學の危險なるを警戒し最後に職業案內を述べ附錄として學費の統計を揭げたり此の種の書籍中一流のものなるべし。

發兌元　東京市京橋區大鋸町十一　郵便振替口座一七二九番　女子文壇社

女子文學全書　第一編第二編發賣＝好評

本居東宮侍講題詠　下田學習院女子部長題歌　小杉文學博士序文　小森松風君著（既刊發賣）

第壹編　美文作法

全一冊洋裝　二百卅頁　正價四拾錢　郵稅不要

中央新聞（八月十六日）の評に曰く　總論に於て美文の起原名稱種類を說明して抒事文抒情文抒景文に關する古今文士の文例を出し、次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文鑑評法、漢文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

坪井理學博士序文　山田美妙先生序文　小森松風君編（新刊發賣）

第二編　言文一致文範

全一冊洋裝　二百卅頁　正價四拾錢　郵稅不要

愛國婦人（十一月三日）の評に曰く　凡そ言語は吾人の思想を發表するの道具てある之を文に寫すことの難きは文に諸種の體あればなり著者此の弊を除かんが爲に之を著はすと總說に言文一致の起原、作法、書簡の書き方等を詳論し續いて其文例十章に分ちて大家の名文を採錄しあれば讀みても面白く又文を書く人には好伴侶なり

發兌元　東京市京橋區大鋸町　電話本局六百七番　女子文壇社

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

投稿期限を來春一月廿日迄延期し更に弘く現代才媛の傑作を募集す陸續投稿を賜へ（附錄として別に當代女流大家の雄篇傑作を添ふ）

女文選評

投稿募集懸賞

選評 宮崎三昧先生擔任

文題 投稿者の隨意たるべし

字數 長短隨意なれど冗長を忌む

發行 まで 來春三月一日

定價 菊判貳百頁以上 金參拾錢

注意 投稿には必ず宿所姓名を詳記し剽竊文の沒德を自ら戒められたし

特選
天 純金指環 壹人
地 ハンドオルガン 壹人
人 銀時計 壹人

秀逸
一等 言海 參人
二等 女文早まなび 十人
三等 文の手ならひ 卅人

懸賞當選は本書内に於て發表し別に當選の通知をなさゞる規定とする故に當選者は本書に挿入したる賞品請求紙を以て當選者たる申告をなすべし本會はこれを證とし賞品の贈附をなすべし

投稿所 東京市下谷區櫻木町貳番地 **女子國文學會**

發行所 東京市本鄕區西片町十番地 **衆星閣**

「十一月十五日發行」當日本社は忽ち賣切れの盛況なり、今や增刷成る

女子文壇定期增刊

菊花月

再版出來

▲大判百卅頁 **價金拾錢** 郵稅不要

發兌元 東京京橋區大鋸町 女子文壇社

賣捌（特約）東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂外取次各店

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥▲價は壹劑分壹圓、參劑分三圓、六劑分五圓、拾貳劑分拾圓、送料各拾錢宛、必ず添送の事郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女子家庭の新讀物

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小說美文　朝晴

【好評】

全一冊新式製本本綴洋裝密畫入頗優雅

（正價四拾五錢　郵稅四錢）

特別賣價四拾錢　郵稅不要

目次

彩色揷畫

薔薇　潮の音　詩集　大川端

（三版）女子懸賞文集

全上等紙　四百廿頁　賣價廿五錢　郵稅不要

目次

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文　玉蟲

【好評】

全一版新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅

（正價金六十錢、郵稅六錢）

特別賣價五拾錢　郵稅不要

目次

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社　郵便振替貯金口座番號は一七二九番

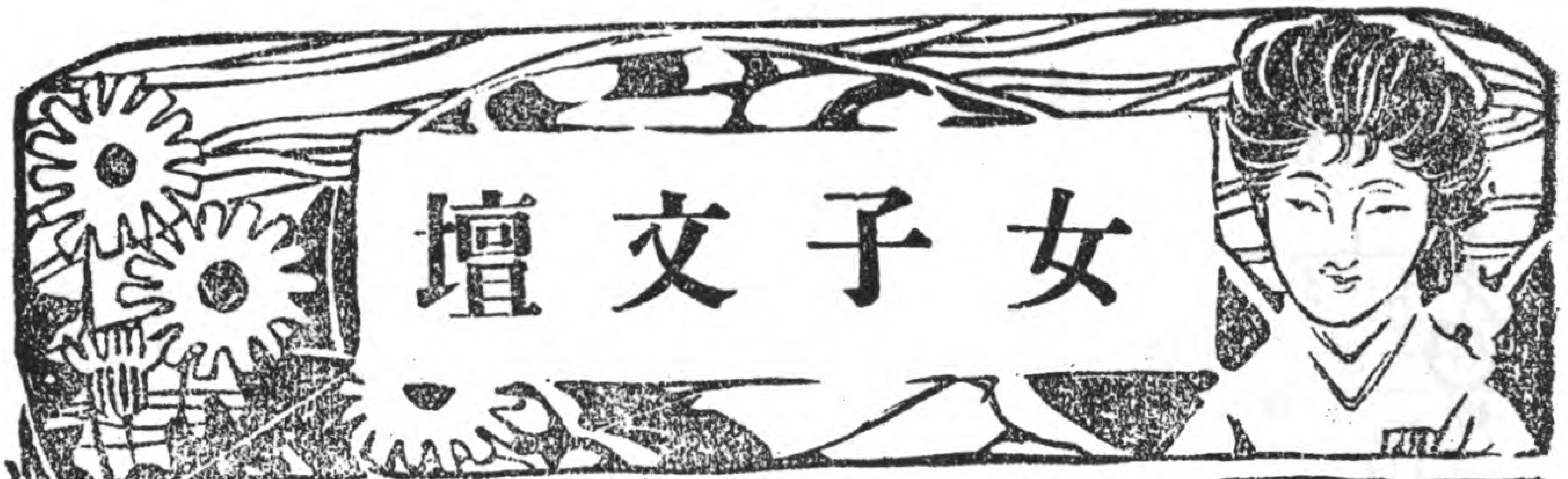
毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二卷 第拾六號目次

石版密刷 口繪—三宅克巳先生 水彩畫(冬枯の夕暮)◎鏑木清方先生 繪はがき(寒月)◎高野いは女史 繪手本(蜜柑子)

(丙の四)



第二巻第拾六號

十二月一日發行



發育の痛み

子供の時に能く病氣でもないのに突然熱が出て、其父母を心配させる事がありますが、直ぐ治つて、而かも熱の出る度に怜悧になる事があります。今の時代にも是に似た事がありまして、皆様の理想と、現在の社會とは何うしても一致しない、何うかして理想の通りに爲たいと煩悶苦痛の結果、或は自殺を企てやうとしたり、自棄になつたり、之れ皆子供が怜悧にならうとして熱の出るのと同じ道理です、斯う云ふ過渡の時代、即ち舊い物は何うしても氣に入らず、新しいものは未だ出來上つて居らぬと云ふやうな時には、あり得べき事で、皆様は能く此苦痛に堪へればなりません。社會にも不平がある、家庭にも不服がある、一身の將來も何うしてか分らぬ、戀愛も自由か不自由か分らぬ、文藝も必ずしも自分の周圍の人には貴ばれない、學問は爲よとも云はれ、爲るなとも云はれる、忠信孝悌、必ずしも有難くない斯うなると何を標準に自分の身を修めて宜か分らなくなり、全く現代が苦痛になる。此苦痛を感じる程の者でなければ、迚も將來、理想の人として立派な方にはなれない、苦痛は甘んじてお受けなさい、此苦痛に勝つてこそ、我等の理想の世が作れるのです。

弔古戰場

變ロ調　八分ノ六拍子　(短旋法)

感情をもつて



吊古戰場

小森松風作歌
高井鳳南作曲

○第一章

松のあらしに、軍旗ひるがへし、鬨こゑ高く、駒追ひ入れし、
野を訪ひ來れば、矢さけび絶えて、月影すごく、嘶く轡むし。

○第二章

落葉の塚に、建てるは誰が碑、風にさらされ、雨に打たれて、
苔生ひ茂り、名こそ讀めねど、忠魂義士の、榮譽は朽ちず。

反省を促す

文學士　沼波瓊音

余が諸孃の文章を選評するの任に當りてより既に一年を經たり。余は未だ文士ならず、文章家ならず、日なほ淺き修業中の者なり。故に諸孃の指導者たるには甚不適當なり。然れども余は文藝が好きなり、文章を見ることが好きなり。この好きの程度は諸孃に劣らざらむ。故に余は諸孃の上に立つにあらで、諸孃と諸共に文章の修業をするといふ風にてありたきなり。余は引續き諸孃の文を批評すべし、余も成るべく屢文を本誌に掲ぐべければ其際諸孃は遠慮なく批評し給ふべし余が選評に不當なりと認めらるゝ點あらば、諸孃は大に責鼓を鳴らして攻擊し給ふべし。これ余が愉快とする所なり、壇上に立つて諸孃の師と濟まし込み居ることは甚以て嫌ひなり。余がこの性情を十分諒察せられむことをこゝに諸孃に冀ひおく。

さて余は既往一年間に思ひ附きたる條々を次に記して諸孃の反省を希ふ。新年早々小言を云ふよりは年末に言うておく方が増しなるべければなり。

第一　漢字

假名遣の誤、文法の誤はまづ少き方なれど、漢字の誤字は隨分多し。漢字を正しく書くといふことは中々困難なり。常に通用する字のうちにも誤れるもの多し「躙る」は誤にて「躍る」が正し。「鎗」は誤、「槍」が正。「呌ぶ」は誤、「叫ぶ」が正。「滊車」誤、「汽車」正。「𠮟」誤、「叱」正。「羡む」誤、「羨む」正。これ等の類擧げ切れぬ程あり。これ等は余の氣付きたる時々に直しはすれど、これ等の文字をも必ず正しく書くべしと要求するには非ず、誤字ながらも通用する誤字なればなり。されど「誰」を「雖」と誤り、「彼」を「波」と誤り、「著」を

「箸」と誤り、「桂」を「挂」と誤り、「網」を「綱」と誤り、「折」を「打」と誤り、「屏」を「犀」と誤るの類は、讀む方にて餘程骨を折り推察せずば意味も聞えざるなれば、決して誤らざるやう十分注意せられたし、誤字は注意を怠らばいかに年を經ても直らぬものなり。先輩に聞きたる時、人に直されたる時、若くは自ら疑の起りたる時々に辭書を引きて正確なる字體を知り置くべし。

第二　戀愛

言語と文章とはたゞ舌を以て語ると筆を以て語るとの差のみ、言にて人に語るを耻づる事を文にて人に語るは耻ぢずとはいはれなきことなり。

西洋の風習がいかに浸み來るとも、一種の本能主義がいかに傳へらるゝとも、吾人はいつまでも日本人なり、日本風の感情、日本風の理性は牢として拔くべからず、又拔く必要もなし。妄りに西洋を摸倣するの愚なることは既に悟られたり、歐洲を觀來りし識者の、歸朝後彼に倣ふべしと說かずして、却て我の國風を發揮すべしと說く者多くなれり。斯る今日、諸嬢の應募文中、接吻、握手等の文字に滿ちたる、厭らしき戀愛の情を說きたるものゝ交るは余の、憾みとする所なり。されど戀愛を客觀的に描く、畫の如く詩の如く優美に描く類は絕對に文章より排すべきものには非ざるなりこの別をよく心得られたし。

第三　奇拔

趣向奇拔なれば選者の目を惹き易しとにや、時には奇を競ふやうなる現象あり、奇拔もとより面白けれど奇拔の出來損ひほど馬鹿々々しきものは無し、消息文中に、金星の人より地球の人にあてたる文、秋より春にあてたる文、蝶より人におくりたる文、の如き絕奇なるものあり、これ等もよくさへ出來て居ば諷刺の意等面白くも讀まるべけれど、この類にはたゞ題のみ奇にして內容一向につまらぬもの多し。突飛なる趣向のみ案ずるは、想を練る上に於て益少きことなり。

第四　下品なる語

「よくつてよ」「さうだわ」等の語は文章に成るべくのぼすべからず、母におくる文の中に斯る下品なる語の用ひられたるがありしには呆然たりき、折角文意妙にても、用語下品なる爲に愛想盡きて落選させし文章も折々あり。

女子文壇は濁れる潮流に捲き込まれず、氣高く優なる趣を具へむとするものなるを。

第五　抒情文

今までの余の經驗にては抒情文最も劣るやうなり、抒情といへば必ず悲みを述ぶるものと心得られたる向多きにや、亡母を思ふ、亡友を思ふ、墓を弔ふ等の類たゞ涙の文章のみ山をなすは殘念なり、快活なる積極的の情を抒べたるもの、續々と來らむこと切に望ましきことなり。

細きことはなほあれど、まづ余の氣附きたる大體の事は以上の如し。

諸孃は一方に構想を自由にし一方に注意を綿密にし年と與に益修業を積み天晴の文章家となり給ふべし。

音樂の修養

藤井環子夫人談

音樂のことを、と仰有られるのですか、何うも突然では……それに、音樂學校のお手傳を致して居るとは云へ、まだほんの……矢張生徒でして、只今一生懸命に勉强中で御座いますから、何にも是れと申上げる考へなどは御座いませんが……左樣ですね……困りましたね……まア、

▲資格

何事にも左樣ですが、殊に此の音樂を學るものは、身體が强健でなくては成りません、身體が丈夫でありませんと、充分な聲を發すことも出來ませんし、又長く繼けると云ふことが到底も出來かねます、殊に肺が强壯でありませんと、音聲を充分に貯へて、それを自由に操ることが出來ませんから、音樂を研究するもの、

第一の資格として、強健と云ふことが必要だらうと思ひます、それて、

▲用意

斯の道に心がけるものは、毎朝或は夕方なりても、極く靜かな、空氣の奇麗な處を撰んて、深呼吸をして、肺を强くし、肺を大きくすることを務めねばなりません、それから每朝缺かさずに含嗽をする、これは一つは、口中から咽喉部を清潔にすることゝ、一つは音聲を善くする上に於て、是非爲なければなりません、其上外部を冷水摩擦することも、これ等の外に、寒冒などに罹らぬ用心として必要です。それから、

▲發音

いよ／＼唱ふ段になりますと、發音に注意爲なくては成りません、音樂の高尙なる所以は、所詮情を直接に人に傳へ得られると云ふに在るのですから、悲しい時には尤も悲しく、樂しい時には尤も樂しいやうに、聽くものに感ぜさせなければなりません、其點に於て、發音には尤も注意しなければ成りません、例令ば、音の高低、音の表情……この表情が非常に必要てあつて且尤も六ケ敷いので、特別の注意を要します、音の出し工合は何うするかと申しますると、可成喉音を避けて、聲を腭の下から出すやうにするとか、舌の動かし方は、舌を平かに下顎に着けて、口を開くと喉の奥まて見えるやうにするとか、一々申上げれば、それは限りはありません、て、練習する場合には、發聲は二十分位宛て休憩を爲ないといけません、不堪續けるのは害があります、尤も彈奏の方は勞れない限りは、何程續けても宜敷う御座います、練習すれば練習する程上達するのてすから。なほ、

▲暗誦

之も練習の一要件として、樂譜を暗誦すると云ふことが必要です、さうして譜をよくお腹の中に呑込んて置いて、それを幾回となく反覆練習して居りまするると、何時とは無しに、知らぬ間に其趣味を解し、今迄自分の少しも氣の付かなんだ處も、自ら啓發するやうになります、譜は成る可く多く暗誦するのが必要てすが、一つに熟して漸次に次へ進むのが宜しう御座います。

▲進境

熱心てさへありますれば、性來が好きなものは、ある程度までは進達することが出來ますが、唯、自分で自分の調子外れを自覺し得ないものとか、耳には自分の不完全な處を知ることが出來ても、それを何うしても

自分に正すことの出來ないものなどは、何處かに缺けて居る處があるのですから、左樣いふものは、充分に上達することは出來ません、所詮音樂などは、一つの天性に俟つものでありますから、好くからと云つて、誰でも名人の域に立ち到ることが、出來ると云ふ譯にはまゐりません。ですから、

▲志望者

斯の道を專修しやうと思ふものは、少い時から志を立つることは必要ですが、今一つ、自分が將來をこの事業に捧げて成功する丈けの資格があるや否やを、確めて貰ふ爲めに、半年なり一年なり、親しく斯道の大家に就いて、この事業に對する自分の適不適を見定めて戴き、其上で自分の方針を定めると云ふことが、極めて肝腎でしやうと存じます。何を申しますにも、

▲希望

日本の音樂は、まだ〳〵西洋等に比べますと、非常に幼稚であると申すことでありますし、從て音樂の趣味を解するものも、至て少い譯で御座いますから、今後暫くのうちは、日本の爲めには、天才と云はれる二三の人を生ずるよりも、寧ろ一人たりとも多くの人が、音樂を學び、音樂の趣味を解して、音樂の思想が國民全般に行渡つて、音樂が尤も愉快なる娛樂の一つとなり、家庭を和樂する唯一の機關となるやうに、一般社會に向つて、音樂の趣味を解せしめなければ成りませんと思ひます。

（文責在記者）

詩につきて

横瀨夜雨

私はつい此間女子文壇の讀者と仰しやる二人の孃さんから、詩を作りたいが敎へてはくれまいかと手紙でたづねられた、女子文壇の詩を撰んでをる河井醉茗君には淺からぬ緣もあるので、雜誌の隅を借てお答し且つみなさんに申しておきたいことがある。

詩（こゝでは專新躰詩を指す）は必ず人に敎へられたからつて作れるものでは無い、またさうして作つたにしても決して上手にはなれない。俳句をやる用意で作らうとしたり、和歌をよむ量見でやらうとしても何にもなりはせぬ、さうかつて作詩にはまだ一定の法則といふものも出來てゐず、內容により作者によりていろいろの形式が試驗される—言はゞ混沌時代だから、かうしてはならぬのあゝしてはいけぬのといふわけも無

い。たゞ眞なれ、たゞ僞らざれ、眞なればおのづと新しく、僞らざればたしかに命あり、世の流行を逐うて摸倣を事とし、あまんじて人の排泄物を嘗めるやうなぶざまな事はしなさるな、人まねこまね猿の仲間入は眞平だ、見る所女子文壇に詩を寄せる御方は随分澤山ある、中には男のいたづらが有るとしても一箇月の投稿が五百枚に上ることもあると聞くと、われ〱十年以來詩に志して世の沒分曉漢（新躰詩をしんていしと言つたり、今様と同じ物と思つたり、漢詩の一躰と間違つたりする連中）と難戰苦闘を續けて來た者にはどれほど嬉しいか分らぬ。初めは幼稚だらうが蕪雜だらうが一足飛びに上手にはなれぬから致し方がない、作者の多くなるほど讀者も多くなる勘定で、つまり詩の領分が廣まるからだ、私共は作りてこそせね、和歌も俳句も漢詩だつてまんざらわからなくは無いのに、奇怪なのはそれらの作者の中には丸きり新躰詩の分らぬ人が有る、どうしたらそんなに頭が偏狭になるか、うたうて美しければ詩の目的を達したのだ、和歌の力でやることも俳句の眼で見ることも歸する所同じでは無いか、が黨同伐異は如何なる社界にも有る、人は何と言はうとおのれおのれを頼みて勝利を最後に期するより外は無い。曉の鐘はすでに鳴つた、詩にあこがるゝわれ等の友よ、髪柔かう風に吹かるゝ春の朝、行く雲のうすきを仰ぐ秋の夕、心に浮び胸にうつるおもひなからんや、見ずして見、きかずして聞くは詩の境なり、縷の如きおもひを辿りて、地底にひそめる鬼語を譯し、空を行く天馬に乘りて廣寒殿に奔るも心のまゝ、誰かわが肱を拉へ誰かわが路を遮らう、行け汝の前途に光明は近づいたのだ。

が、たつた一つ殘念なのは人の作つた詩をわが物顏に寄せて、忠實なる記者を欺き清き交りの友を欺き隱しても隱し切れぬ自の良心を欺き、たまゆらの間の名を賣らうとして、あたら處女の身にぬすびとの名を負ひ、永く顏を赧らめねばならぬ人が頻々として現はれることだ、情ないとも淺ましいとも私はそいつが自分の妹だつたら、美しい顏にいれずみをしてやりたいとまで思ふ、母より受たる膚は人に一指を觸れしめざる限り至高の美術品なり、天の賜へる操は自傷らぬうち至純のたからでは無からうか。人の財寶を掠むる者は獄に繋がる人の思想を盜むものは終に天に滅びるであらう、餓てぬすむはなほ容すべし、泡のやうな名譽を得やうとして神明を欺く彼の陋劣なる人の面が憎い。

さうせねば詩はできぬのならいつそ味噌でもすることだ、きつぱりと詩だの文だのとだいそれた考は止めなさい、これはひとり詩についてとのみ言はず遍く女子文壇の寄稿家に忠告するのである。今名は指さぬが霞が浦に沿へるなにがし町の〇〇〇子さんはお父上は名誉職に居られるし御自身はまだ花のやうな十九のお身なのに、やはり淺ましの罪を犯された、私は毎號女子文壇の卷尾に十數人づゝ破廉耻のお方の名が發表されるのを見て涙をこぼすのです、そんな不心得の人が有るためにミューズの神さんに詩を捧げるものまで一部の人の蔑視を受くるでは無からうか、去れ、文壇の賊！

文壇の賊に用は無い。私はこれから誠實に詩を作らうと思ふ人のお友達となり助言をしてまでも詩を發達さしたい。もと〳〵小學校すら卒業しなかつたし學問も何も無いからお稽古をして上げるとは言はぬ、が若い嬢さん達の作つたのが、珠か瓦か石か金か新しいか古いか位は分るだらうと思ふ。醉茗兄は記者として公に擇んで居らるゝ、私はお友だちとして陰ながら假名の違や文法の過りやを氣をつけて進ぜたい。

詩はむづかしいものでは無い、自分の心に浮んだ思想をそのまゝ歌うて巧みならばよい、太田秋津子さんの「若き耻らひ」のやうに、肩上の取れた着物を着て鏡の前をまぶしがつたゞけでさへ立派な詩になつてる。どなたゞつたか蔦這ひ纏へる五重の塔に黒き蝶々の舞上つたことを作つたでせう、あれなど誰に見せてもはづかしくは有りません。

専門家として後來日本の文壇に立たうと思召す方は格別、皆が皆何も大きな詩人にならんでも女は女らしくやさしく美しい詩をよんでいたゞきたい、必しも織巧なれとは言はぬ、たゞいつはらざれ飾らざれ。醉茗兄は想像力を養へと申されたが、私はそれよりも先諸嬢の胸に湧く情を有りのまゝに上手に歌ふことが出來てのち風雲月露天地の大景に眼を留めるやうすゝめる小さからうが短かからうがいやしくもその詩に眞生命やどらば名は千歳にのこるであらう。

醉茗兄には十年來面倒をかけてゐる私だ、その往く所に從ひ唱ふることに和したいとは平素の望なのだから、女子文壇にお手傳をしやうと申したところで誤解される氣支もあるまいと、こんなことも申すのです。

いづれ折があつたらと思うてゐる。今は行方定めぬさすらひの旅に出てゐるので、これで失禮する。

さらば、われ等の友よ。
秋十月　菊花ふゝめる山のふところにて

繪はがき交換

一記者

此繪はがきは兄さんに頂きました、皆て十二枚あるのです、東京名所の繪て、これは二重橋てす、此通りてすヨ。丸之内へは暫く參りませんけれど、あの美麗に草の生た土手や、松の木の影が映つて居る御堀の水や、東京でないと見られないてしやう。

雪子樣も繪はがきを下さいよ、何か書いて。繪はがきの取換をしましやう。

九月十二日　　あや子より

＊　＊　＊　＊　＊

二重橋の繪はがきをありがたう、あなたからは東京の名所を頂きますし、私からは大和の名所をあげますそれが面白いてしやう。

此れは三笠山てす、天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かもと云ふのが、歌がるたに有るてしやう、其山だつて阿母さんが仰いました。いつか私も上りましたが、下から見ると低いやうてすが、上ると大變あるの、家の屋根や、お寺の塔や、御堂や、遠い野を流れて行く川などが、皆眼下に見えてそれはそれは好い景色ですよ。

十五日　　大和にて　雪子より

＊　＊　＊　＊　＊

只今御はがきを拜見しました。

昨日小石川の植物園へ行つて見ました、豊野さんと新井さんと三人て參りました。あなたと參つたのは去年の秋てしたつけ、葉雞頭が美しかつたのを覺えてるてしやう。櫻井樣は今時分如何爲て居らつしやるだらう、田圃へ出て居らつしやるか、それとも毎も好きな編物を爲て居らつしやるか、田舍へ行つて見たいよなど〻、三人て語りました。あなたが大和へ行らつしつてから、もう半季になりますヨ。

おゝ忘れました、此繪は御存知の隅田川です、つまらない繪です。

十七日　　江戸川のほとりに住む　あや子より

＊　＊　＊　＊　＊

親類から鳩を五疋貰ひまして、飼つて居ます、晝の間は出して遣りますが、夕方巣に入れて遣らうとして

いくら呼んでも、土藏の屋根へ上つたり、庇の上へ飛んだりして、歸らないので困るんですよ。母樣と二人で逐ひますの、臼の側で粉米を取つて來て掌へ載せてやると喜んで食べてます、私とお友達のやうになつたのです。

稻を刈り初めました、今日は雨、此畫は春日神社。

二十日　櫻井ゆき

* * * * * * * * *

此繪はがきは九段、これも能く御存知でしやう。

神武天皇樣の事を今日學校で敎はりました、御陵は畝傍山に在るつて云ひますが、何んな山敎へて頂戴。

二十二日　丸岡あや子

* * * * * * * * *

大阪の親類へ行つてましたので、お返事が後れました。

畝傍山は畝傍の停車場から二十町程の道で、途中には新らしく出來た敎育館や、綏靖天皇の御陵があります、畝傍山の麓の御陵は立派ですよ、石の垣で周圍を圍んで、松の樹を植てあります、門を入ると白い砂が布つめてあつて塵一つも見えません、此繪は、其御陵と畝傍山です。

二十八日夜　ゆき

* * * * * * * * *

さきほど與野樣が入らつしやいまして、寫眞帖を見せて頂きました。雲ばかり撮した寫眞や、浪ばかり撮した寫眞がございました。私も其うち寫眞を撮りましやう、あなたもおとりなさいよ。

此繪は淺草の奥山です。

三十日午後四時　綾子

* * * * * * * * *

田舍には淺草や上野のやうな公園はありません、けれども裏へ出れば山も見えます、田圃も見えます、夕方畦道を散歩して居ますと、山の上に月が出て、涼しい風が吹いて來ます。遠くの方で何やら人聲も聞えますけれど、此處は極く靜かで、さら〳〵と水の流れる音ばかり、ふつと東京の事を思出したりしますけれど吾家へ歸ると、明るいランプの下で、母樣や弟と一しよに、送つて頂いた雜誌や、種々の書物などを見ますの、東京に居るのと些も變りはございません。

今日の繪はがきは月ケ瀨山、梅の名所です。下の方は笠置山、歷史は御承知でしやう。

十月三日　ゆき子

此繪は何處だか、あてゝ御覽、ちよつと分らないてしやう。

* * * * * * *

六日　あや子

* * * * * * *

分りません、上野の塔てすか、淺草の塔てすか、堂は見えないて、只、森があつて塔だけ見えるのは何處てしやうか、私には思出されません。

私の方のは法隆寺の塔です、古いお寺だと云ひます。

るいつか申上げた鳩は、一疋猫に捕られました。

八日　ゆき子

* * * * * * *

淺草ても上野てもありません、谷中の天王寺の塔てす、鳥渡分らなかつたてしやう。

彼の繪は何故あげたかと云ふのに由來があるのてす私等と一つ下の組に居られた松波國子さんと云ふ方を御存知てしやう、お亡くなりなすつたのですよ、何だか急の御病氣ださうて、私も後て聞いて喫驚しました。それて墓參に行つてあげたの、西洋の草花や秋草をお墓の前へ供へました。國子樣は温順い方てしたから、私等とは餘り物も云ひませんてしたが、おかわいさうてす子。

添えて申します、此繪は云ふ迄もなく御存知の、上野。

十一日　あや子

* * * * * * *

國子さんがお亡くなりなすつたさうですが、驚きました。母樣に申しますと、母樣もオヤ〳〵憫然にって喫驚して居らつしやいました。ね、あなたと私とは土地は隔つて居りますけれど、會ふと思つたら何時ても會へるてしやう。あの方の顏はもう見られないのてすもの、眞個に悲うございます。今迄お友達の中に死んだ人がありませんから、私は子供の中は死なゝいものだと思つて居ました。

此繪は猿澤の池です、繪の譚は次に。

十五日　ゆき子

* * * * * * *

此れは品川てす、此繪を見て居ますと浪の音が聞えるやうてす。

繪はがきの交換も一月からになりましたから、これて鳥渡休みましやう。

十六日　あや子

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

繪はがきの取りかへつこを休むと、何だか淋しいやうてすけれど、又お正月にてもやりましやう。
此前の繪は猿澤の池てしたが、此繪も其猿澤の池にある衣掛柳と云ふ柳樹てす、勿論此池は奈良にあるのてす。
昔、奈良に都のあつた時分、美人の采女（采女とは天皇陛下に仕へる女の官人てあつたさうてす）が仔細あつて、此池に身を投げたと云ふ話柄がありまして、其身を投げる時に着衣を掛たのが衣掛柳ださうてす。

十八日　ゆき子

ぬき穗

女子英學塾　辻村淑花

○或人の云ふ、なまじひに、拙き詩歌を、つくりいださむと、心を苦しめ、無益の時間を費し、人笑へなるものを、ものしたらむより、古人の、作り置ける詩歌の、其時其事に打ちあひたるを口吟みて心を遣るのまさりたるに、若かずと、云ふ、警句なり、まことに、云はれたり、浮きたる文學に、心を苦しめ可惜、時間を、費す人のためには、まことに、頂門の一針とか、云ふほどの、警句なるべし、然はあれど心無く、夫を修業盛りの、青年男女等に、聽かしめたらば、最初から、我を辱しめられしやうなる、故人には、かけても、及難しと、やうなる心を、生じて、筆のしりくはへて、苦吟することも、可厭になり、物學ぶことも、馬鹿らしくなるべし、下手なりと、自作らしめ、自考へしめねば、到底其道の、樂を味しむる事、能はず、趣味を感ぜねば、進歩はせぬなり、物云ひは慎むべきことゝなり。

○幼き童の、熱心に、歴史を、復習して、ありしに、側なる人の、さしのぞきて、さる時間潰しを、せんよりは、年代紀一覽を、みたる方、遙によしと、云ひしかば、童は、口惜げに、片なりながら、一應の、意見をも、陳べたりしが、げには、心にも、面倒なる歴史を、孜々と、修むるが、愚なりとや、思ひけん、其後は、歴史と云ふものに、趣味をもたずなりぬ、さても、小兒の心の、危うさよ、親たる身の、心づかひ、片時も、油斷の、ならぬ事ぞかし。

○同じごと、未だ世は如何なる物とも知らず、身をもてなすべき、道もたど〳〵しき、處女などに、己れが、嗜好めるまゝに、或る、宗教書、ある、哲學書の、あまりに、人

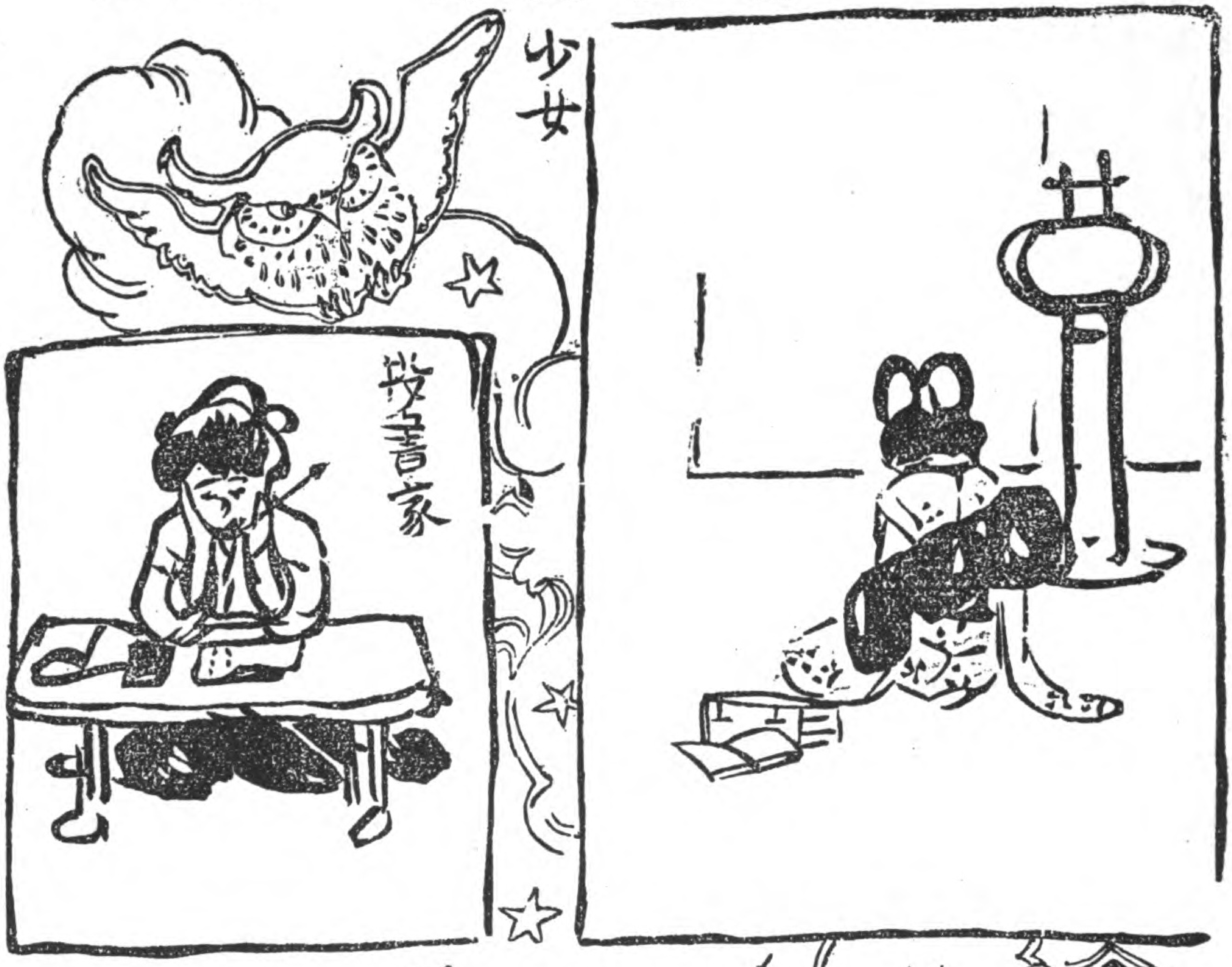
情に、遠きもの、悟りすましたるもの、直情徑行に、すぎたるもの等を、譲ましむるも、考へものなり、淫媚の、小説を、觀るよりは、遙にましなれど、偏狹なる冷酷なる、性質を、つくるも、面白からず、妙齢の身の、白粉の、傳けかたも、知らず、襟引き歪めて、着などしたる、よからぬ事なり。

すべて。女子は、普通に、わたり、圓滿に、行きたらひたるが、よし、さて、其上にて、特種の、發達も、研究も、すべきなり、あらゆる、學科、何ごとも、詳に辨へ、明に、理解せでは、ならぬは、勿論なれど、ことに、物云ひ過失りなく、道理きこへて、なよらかに、手を書けば文意よく達し、手跡美しきは、常の行より遙に、人に、見上げらるるなり、木地のまゝが、好しとは、餘りに、なつかしからぬ、言なり、よきが上にも、よからんやうに、衆人に、愛敬せられむやうにするも、女子の、居家處世の、要點にて、それが爲にこそ、髪の容も、工夫し、夫が爲に、きそ、鏡の前にも、いくそたび、立に、あらずや、實用適切の、學問ならずとも、手は、麗はしく、かき、文は、すら〱と、かき、物云ひとほるやうに、工夫すべし、猶花の、如く香の如く、其人物より、以上に、懷かしく、心にくゝ思はるべし。

○人に眞實に、質問せられしときは、其事、我身の熟知りたる事ならば、心美くしく、すら〱と、教ふべし、よし、不明瞭の事にて、ありとも、其由をつげて、知り得たる限、答ふべきなり、故に、謙るやうにして、敎へぬ人、物吝みして、告ぬ人、五月蠅がりて、顧みぬ人、いかに、もどかしく、卑しく、情無き事よ、側より見るも、しか思ふ、まして、問ふ人の、心の中、耻かしく、口惜しく、途方にくるゝ事、なるべし、知りたるは、知りたるなり、知らぬ人の、問ひに答ふる、何か、憚ることのある、知らぬは知らぬなり、其由を、明白に告ぐる、更に耻辱しからず、耻づべきは、似非謙遜と、物惜みと、人に、强情きなり竹を破りたる如き、氣象、女子にも、あらまほし、さりとて芥子許りの、才學をたのみて、問はれぬに、差いてゝ、物云ひ、人の物云ふを、冷笑せる、之は、又、沙汰の限なり。

歲の暮

▲暦の表に餘す處は三十一行、十二月は平素あまり用事の無いもの迄忙しく夢のやうに過ぎる、小說氣のある諸孃は細かに此の極月の人間の活動を觀察なさい、冬の自然はさびしく眠つて居るが人間は決して眠つて居らぬ、暮に迫れば迫るほど出來事は多くなる、西鶴に『胸算用』あり、一葉に『大つごもり』あり、魯庵に『暮の二十八日』あり、諸孃にも歲の暮のお作は出來る筈▲俳句の歲の暮は面白い、煤掃に、鉢叩に、年の市に、餅搗に、分類すれば澤山ある『すさまじや女の眼鏡歲の暮』は老女學生、『橋々や暮いそがしき暦うり』は市區改正の爲め灯して架換る橋の袂、『年の市梅さしあげて通りけり』は月給貰つた役人、『來年は來年はとて暮れにけり』は試驗に落ちたる學生、『旅寢して見しや浮世の煤掃』と澄まし込む詩人、『物かくに少しは高き炬燵かな』は陰暦で年を迎へやうと云ふ田舍の十二月であらう▲歌がるたも新年には流行さうて、世間を別にして居る學生の頃は暮から稽古に熱注する、併し是も餘り上手になると曲が無い、下手なものや、鈍な人が交つて居る方が却て面白い▲煤掃のお手傳ひは女の役て『はづかしき人にあひけり煤のかど』とも言つて居られない、春秋の淸潔法があるから、格別煤掃ひに大騷する家も少なくなるやうである、諸孃も自ら手函や本函のかたづけ位はなさるてせう▲暮の樂みは晴衣を縫ふ事てせう、記者之を察するに上は羽二重、縮緬の絹物より下は瓦斯織にせよ。綿物にせよ晴衣と名の附く物が此十二月に新調される數は少くないてせう、日は短し、用事は多し、それても縫はねばならぬので冬の夜遲く、森々と更けるまで一生懸命に針の運びを急がせる、ランプの石油の減りに驚いて氷のやうな衾をかづき、忙しい夢を見るのも少女時代の歲の暮であらう▲毎年同じやうな言ひぐさを繰返して居るので歲暮の感も舊くなつた、我々は何事にも舊い感想を繰返したくない、昔の人の言つたやうな譬はもう聞きたくない子供にはクリスマスに來ると云ふサンタクラスのお話のやうな事が新しくも思はれるてあらう、大人には歲の暮にも希望を抱けと云ふ外はない▲さらば諸孃よ、記者は是を以て本年最後の御挨拶として、次には來るべき新しき歲の始にお目にかゝりませう、健全なる歲をお迎へなさい、樂しき歲をお迎へなさい、文藝の爲に善き歲をお迎へなさい。







○少女（特別三賞）
京都市萬壽寺通高倉一四、奥村方　林　きよ子

○投書家（天賞）
下谷區坂本町二ノ一九、　岡野　さかえ

○もみぢ狩（地賞）
京都市西陣紋屋町　濱部　郭公女

○磯の小春（人賞）
東京府下南多摩郡恩方村　中島　縫子

文學士　沼波瓊音先生選

論文

天

○所思行篇

千葉縣山武郡千代田村　林　楓江

○大學に曰く、若有二一个臣一、斷々兮無二他技一、其心休休焉、其如レ有レ容焉、人之有レ技、若二已有一レ之、人之彥聖、其心好レ之、不三啻若二自二其口一出上、寔能容レ之、以能保二我子孫黎民一、尙亦有レ利哉、と人、一の善事なしと雖も中心他の善を愛好す、既に善人たるを失はず、人總べての善事ありと雖も中心他の善を猜嫉するもの、遂に大人の心境に達するを得ず、その大人たり小人たるの分岐、實に此の一點に存す。

○能者自ら用ゐ智者自ら行ふ、自ら用ゐるものは他の用ゐるを懌ばず、自ら行ふものは他の行ふを喜ばず、我等茲に於て智者能者の道に進む頗ぶる難きを思ふ。

誰か鮑叔を以て管仲より大ならずといふ、誰か魯肅を以て周瑜より小なりといふ、我實に雅量の高德たるを信じ、而して愛善の心の實に雅量の動機たるを信ず。

○夏原吉曰く、吾少遇二犯者一、必怒、始忍二於色一、中忍二於心一、久レ之自熟、殊無二相校意一、是知二量可一レ學也、と是又一種の實踐の功夫也、然れども是れ畢竟雅量の小乘敎たるに過ぎず、若し一歩を踏み外せば、僞善矯飾を柔面に粧ひ、陰險狠賊を笑容に包むに到らん、寧ろ如かんや、其心善を好むが爲めに人の才を愛し、其心才を愛するが爲めに人の才を愛し、自ら過ちあるを知るが爲めに人の過ちを恕し、而して自ら其安心立命の地を識るが爲めに敢て人と較する意なきに。

○頼山陽曰く、余語二從學二詩文一者上、曰有二一字訣一、曰眞、又有二四字訣一、曰唯眞故新、文姑置レ諸、詩自二漢魏六朝一至レ唐、其詞金玉華藻、其意嘆レ老嗟レ卑、爭レ新競レ奇、愈出愈奇、唯陶與レ杜、顧二就日用父子君臣門一、直敍二情景一、語々有二生色一、化二家常茶飯一、爲二金齏玉膾一、回二視從前珠璣堆積一、皆覺レ不レ可レ食矣。と嗟呼誰か父母に孝なるを陳腐といふ、誰か夫婦相愛するを陳腐といふ、誰か交友相信ずるを陳腐といふ。宜なる哉、イリヤッド萬葉六經聖書の千載を經るも、尙ほ諷誦欽讀を禁ずる能はざる所以のもの、唯其の眞を捉へたるが爲めならずや。

○夫れ宇宙に新物無し、然れ共其の眞物に到りては萬古を經るも決して陳腐ならず、誰か天外の芙蓉峰を目して陳腐といふ、誰か芳野の櫻花を目して陳腐といふ造化は終古依然たり、而して終古清新なり、人間も亦造化の一部たるを知らば、その終古依然たるに係はらず、苟も其眞を保たば終古清新なる亦知るべきのみ。

○昔は陳子昂謠うて曰く、前不見古人、後不見來者、念天地之悠々、獨愴然而涕下、と嗟呼我れ天地の過客として浮世に幻住す前に古人を見ず後に來者を見ず今や我れ獨々乎として俯仰介立す、拔山蓋世の英雄も思うて玆に到る、豈愴然として涕下らざるを得んや。

○然りと雖も我れ宇宙と無極を競はんと欲す、而して我も亦宇宙の一要素なるを知らずや、我れ乾坤と壽を均うせんと欲す、而して我も亦乾坤の一片たるを知らずや、我れ古人を見ざるも古人の因は我によりて現はる、我れ來者を見ざるも我の果は來者によりて現はる、始めなきの始めより終りなきの終りに至るまで人生は無極無端の圓環にして我れ其の一部たるを知り、我が一身は古今來に貫通し、天地に合躰し宇宙に包容するを知らば我も亦天地の悠々たるが如く悠々たるべし。

（評）諸論皆着實にして意深し殊に陳腐も清新の論、無限と我論面白し、但し無限の論は天人論に同旨のもあり覺ゆ

地



朝（賞外）　深川　海法佐世子

○闇夜

東京　しらまと女

雞聲幾度か曉を呼びて東天漸く白らみぬ、噫旭日の光はこれ墮落の相也床しき夜の色去りて人間の醜態これより露はれむとす、亂雲强ひて狂へど遂に浮世を蔽ふこと能はず、惡魔早くも荒れ初めて冷たされど曉靄なほ人間の夢を封じ朝き風草葉にそよぐ、板橋霜白き處そこに遠征の客あり、桔槔鳴る處そこに白粉を洗ひ落す少女あり、暫らくして家々の門開き戸開き、炊煙上り器具相觸るゝの高き音は、人間今正に口腹の慾を滿たしつゝある也。かくて旭日三竿に上れり、止んぬる哉。浮世の女よ再び汝の

臭骸に綾羅をつけ、汝の面に白粉を施し出てて媚を賣り愛を求めよ、浮世の紳士よ汝の胸に金時計をさげ、汝の頭に高帽子を戴き出てゝ腰を折りて榮譽を求めよ、蛩音蹀躚、馬聲車聲相和し塵埃四方に起る、我は暫く呂翁の枕をかりて、浮世の外の夢をたどる程もなく、

一夢さめ來れば我影我身の幾倍の長さとなりぬ。あはれ落日の光は希望の色也、光明の相也、人間の世界こゝに盡きんとし、神の世界將さに始まらんとせるにあらずや、來れ夜の色早く世界を闇に葬れよ、月や星や、雲の彼方へ隱れよ、人も鳥も獸も虫も萬象みな眠れよ、萬象沒し萬籟死する處、軈てエタアニチイの宿る處也、こゝに君主なく奴隷なく、罪惡なく僞善なく、虛爵なく虛僞なく、人間の野心小細工醜態みなあらず、闇黑の裡に平等の和あり、幽寂の裡に平和の聲あり、我我身體を見ず、人間の累をなせる手や、口や耳や、目や今何れにかある。物慾を離れ塵累を脫して我心天地と合し、天地我心と合す。我生きたるか死にたるか、抑も狂したるか我自から知らず、差別を見ず肉慾の聲を聞かず、床しき夜よ、閴寂は我身の命也、闇黑は我身の光明也。

（評）奇に過ぎたるが如くにして實は然らず古來東西の文人多く犯な寧む缺好も其一人なり。

（人）

○鍛錬

高山あい子

鑄鐵は炭素を含むこと多く、從つて質甚だ脆きを以て鋼鐵の精鋭を得んには、なほ層一層の鍛錬を要す、鑄鐵一度火に燒かれ、水に投ぜられ、痛き鐵鎚をも甘じて受くるの境を經るときは全く性質を變じて精鋭驚くべきものとなるなり。

數種の成分より合成さる鑛石は種々の方法によつて分解し其必要なる部分の他は之を捨つべきなり。

嗚呼人世何ぞまた之と相酷似するの甚しき我等は辰砂なり、故に水銀たらんには其法をつくさゞるべからず、我等は方銀礦なり、故に銀となるには未だ手段を要するなり。

嗚呼美衣美食を望み富貴榮達をこれ事とし徒らに世の虛榮にのみあくがるゝ迂遠の輩よ、そはたゞ鑛石の形を存して價値なき事を知らずたゞ其形のまゝに無限に發達せんとするものにあらずして何ぞ、覺醒せよ、然してとく患難の爐中に自ら身を投じて不用の分を捨て鍛錬せられたる精良の金屬たれ嗚呼方銀鑛として大ならんよりむしろ純銀として小なからんことをこひねがへよ。

○特長

犬は門を守り猫は鼠をとる。
是其自然に受けたる分業なり。
犬にしてねずみを獲んとするも難く猫にして門を守らんも益なし、況して犬一匹にして門を守り、ねずみを獲らんとするをや。
他より壓迫せられて一定の鑄形を以て作りあげられたる人は不幸なるかな。彼等は己の特長を發揮すること能はざればなり。ねずみをとるべき力を割いて門をまもらしめらるゝものなり、かくて何れをも能しあたはざるなり。
各自に稟け得たる特長あり、信じあたはざるものは庭に下りて蜜蜂を見よ、蟻を見よ、彼等は其特長を遺憾なく發揮しつゝあるにあらずや。
自己は自己を識るを要す、靜止默坐して疾く己れを識れ、識つて其長所をさとれ、さとつて忠實なる蜜蜂たれ、蟻たれ、百舌鳥あうむの徒となることは斷じて採らざるところなり。

（評）整はざる現社會は往々犬をして鼠を捕らしむ。

秀逸

○欲と夢

山口縣　田坂浪子

私は人間のなす事は凡て欲でなければ夢、夢でなければ欲と思ふ。抑も私達が何の爲めに勉强するかと問はば、己れの爲め、延いて父母の爲め、續いて國家の爲め、と答ふるだらう。然し其れは表面のみである。其の裏面には或る一種の欲があるのである。かの碌々たる輩が不格好な服に頸も廻らぬ高襟、人造麝香、コスメチックと飾り立てる、その裏面は何物だらうか、勿論一種云ふべからざる欲だ。其の他、曰く二〇三高地、曰く元祿、曰く桃山と流行を競ふも欲の爲め。さらば人事百般皆欲かと云ふとそうではない。子の危險に際し親が己れの身の如何も前後の事も辨へず一途にその子を助ける、即夢中で助ける、夢中とは私の云ふ處の夢である。而してその時は欲を距れて居る即夢の時は欲を距れて居る。然し夢と云ふと語弊がある、所謂世人の夢みる、と云ふ事は欲である。然し寢て起きて、何事も思うて居らなかつたら、それが所謂私の夢である。即欲が無い。さらばかの無邪氣な天使の樣な小供は如何かと疑ふ人もあらう。彼等も勿論欲がある。始めて此世に生れる時に呱々の聲を發したら早や欲である。その聲は困しみを避けんとする欲の叫び聲である、かく擧ぐれば數限りも無けれど、凡て人のなす事は欲でなければ夢、夢でなければ欲である。

（評）面白き觀察なる哉。

○農家の生活（其七）

靜岡縣　貞水子

第九月。農家の注意日たる二百二十日は九月二日にあるので暴風雨のないやうに常々願ふのである。
農工商の三界では頭の文字でありながら、皆樣に土民とか土百姓とか卑しまれる、さりとは辛い稼業ではありませんか、近頃になつて農事改良とか頻りに鳴らして漸く百姓の頭を上げて來ましたが、外の業に比べるとまだ〳〵辛い事であります、農業は腕力ばかりて出來るのではありません。都門の紳士淑女達の夢想だに知らない苦勞をして、一兆二百十日に暴れ出したなら積月の盡力水泡に歸す、たとひ豊作でも小作人は、一反三俵内外の年貢を上家樣へ上ると、七十八十の四斗二升俵を仕上げたとて歳も物置も無しで暮す、大朔日の勘定に少し賣つて、五俵七俵の殘りは小庭へ積んで置き半年も經たぬに食べて了ふ、一番茶の金を抵當に借りて食べる有樣、椽の下の力持ちとは貧乏百姓の事である、都の御方は小春日和だなど〻洒落てる菊の月我體より重い物を擔いだり背負うたり、目窪落して働いて麥飯に菜葉で腹を滿たし、蕎麥や薩摩を飯のかはりにして、前記の有樣であるから傍で見る目も氣の毒とは是等の人を言ふのであります、小作人が上家へ上けた米は何處へゆく、皆内地の都鄙を問はず、農以外の御方へと。

（評）農民のありの儘を說きたり、これを讀んで誰か社會の不整頓を訴へざるものぞ。

○女子たちへ參らす

本郷　大平てる子

皆さん外に出てあの松の木をごらんなさい。幹が大きく丈夫で枝が榮え、葉が茂つて、大變、勇ましそうに見えます、皆さんは、之をあ〻立派だと思ひなさるでせう、けれども、春の末になつて、之にからみついてる藤にだんだん紫ばんだつぼみが見えて房が次第にのびて、遂に、美しい、長い房が下つた時の有樣はどうでせう。とても、松の木一本見た時の觀えとは、話しになりませぬ。其美さ、けだかさ、丁度神靈のやどりかと思はれるやうで前の松の木は、ます〳〵勇壯に、然かも美觀をそへてきます。又藤の花も、たとこればかり、棚なぞつけて咲かしたのは、とても、比較になりませぬ。皆さん、靜に思つて下さい、あなたがたは、此の美しい、藤の花であることを、知つておいでゞすか。皆さんは實に宇宙の花ですよ。何と幸福ではありませぬか、それに蕾の中に、よく手入れしないでおい

たら、虫がついて、後に立派な花とはなりませぬ。中途でしほれて落ちてしまつて、沓や草鞋にかけらるゝやうな、つまらないものとなりませう。又、たとひ、一度虫に松の木にたよつて咲いたつて、蕾のうちに、くはれた花びらは、終生美しく咲きなほる、わけは、ありませぬ、きたない花瓣がねぢけた房に出來た爲めに、遂には、松の壯觀美觀も損してしまひます。みなさん、立派な花となるのが自分ひとりの幸福である計りでなく、之が即世の女子の最高の本務なのです。それに自分の本務は知らないでゐて、蕾の内に、自分勝手な手入をして、はては、つるまで曲げてしまひますので、彼勇壯な松の木に優美高尚な紫の房の下つた美觀は、とても見られないのです。天はどんなに之を嘆くでせう。皆さんどうぞよく自分の身に手入をすることを、怠らないで其優美高尚な紫の色を、ます〳〵そへるやうにして下さい。それに今まではどうでしたらう、あの蝦茶(エビチャ)式部(シキブ)の蝦茶(エビチャ)の色のために、松の木でもない、藤の花でもない、ハイカラと云ふものが、横行しはじめたのです。現代がもし此まゝでいつたら實に危險千萬ではありませんか然し、だん〳〵蝦茶の流行がうすらいて、そして、紫の色が、ほのめくやうに、なつたのは、誠によろこばしいわけてあります。然し此美觀を呈するに至るまでには、松の方でも、藤の方でも、各の修養が必要です。松の木は、藤をたのまないで又藤は、松をあてにしないで各一生懸命に修養の功をつまねばなりませぬ、私は、願ひます、宇宙の花たるべき諸孃よ、十分に修養して、これならば、松の木の美觀をそふるに、たると思ふ所までは、專心つとめはげんで下さい、決して中途で迷つたり、虫に食はれるやうでは、いけませぬ。



キッス（賞外）　博多　河原雪枝

（評）老女學者の演說を聽くが如し。

口繪說明

昔希臘にモノトールと云ひて半人半獸の怪物ありき。人間に害を爲すこと甚だしかりしかば、クリート島の迷園に閉ぢ籠めて、年々七人の少年と七人の少女とを人身御供にそなふることゝなりたり。アゼンス王の王子ゼシユース如何にもして此怪物を仆さんと島にわたり、モノトールを殺したれども、一たび迷園に入りたるものは、再び出て來ること能はずいたく苦しみしを島の王女アリアドチ姬手引の糸を王子に與へ王子は幸に此糸を手繰りて、迷園の外に遁れ出づることを得たり。王子は此恩義に感じ、姬を娶らんことを約して共に歸國の途に就きしものゝ、止みがたき事情ありて、姬をナキソスと云ふ處に遺して遁げ歸りぬ、姬は振領巾山の松浦小夜姬の如く、後を慕ふて悲嘆の淚に暮れ居るなり。

河井酔茗先生選

新體詩

天

○紅雪の曲

下野小山町　新井琴子

敗殘の絃月さと蹴落して、　冬の男神が弓勢鋭く、
銀箭荘嚴らに鳴り渡らせ、　世を妨ぐる蠱物あらば、
我手力に觸れても見よや、　清淨形る捧げの花は、
空に渦への瑠璃水受けて、　下界こそ蔽へれ、白蓮華。
我脊の威嚴讃ずるとてか、　曙參らす美き姫一人、
天の金の扉さと押明けて、　紅梅衣召すなよび姿、
微笑む瞳の濡るゝは何ぞ、　愛涙流れて玉と化れば、
久遠の光明漂ひ〳〵、　長き裳裾は蓮華にふれて、
雪は清淨佳麗を保ち、　世は淡紅色に染められし朝、
箜篌の音響さて靈香亂れ、　あゝ讃仰に値せずや。

偉なるかな理想の詩情、塵空を絶して須彌山上に歌ふべきもの、紅雪の賦は殊に色彩の美惑を添へました（酔茗）

地

○星の光

姫路市延末町　矢島みどり

西の國なるうた人が、　神にも似たる心もて、
み空の花と歌ひたる、　星にたへせぬ匂ひあり。
風の前なる白つゆの、　貫きとめぬ玉の緒に、
しばしは影を宿す時、　星にはもろき光りあり。
戀に煩えしうた人が、　靜に眠る奥津城の、
銀杏の梢にきらめける、　星には奇しき光あり。
散りたる花を抱きつゝ、　とはに眠れる蝶々の、
小さき夢を照すとき、　星には遠き光りあり。

此頃世間では、詩人の事を星菫派の親分のやうに言ひますが、星や菫は我々が十五六年前に歌つたので、それを今分つたのは隨分世間も後れて居ます。それから又、星や菫は未だ、決して歌ひ盡くされて居ません、星は美くしき天体、菫は可愛らしい花、少しも輕侮し、恐むべき意味はないのです、宜しく、もつと星や菫をおうたひなさい（酔茗）

人

○星

横濱市山手町二百十二番館　指田温子

うまし臈たき人の子の　み靈こりてか星の世よ
有明月のほの白う　西のみ空に殘るとき
うらぶれ果てし人の子が　此世の別れ告ぐるごと

またゝきの眼を輝し
夕べ彩雲消え去りて
塵の世むさきこの地を
ほゝ笑みの星淸き星
思ひ入りてぞ地眺む。
夜おごそかの慢幕に
わづかにかくし終へる時
静けき光あらはるゝ。

評は右に同じ(醉茗)

秀逸

○海の潮

石見　秀子女史

あゝ海原の深緑、
戀の光の燃え初めし、
崇高き聖の御胸や、
五彩色どるあやのかげ。
北にめぐれる紅は、
春の夜の夢南は、
迷の色のこむらさき、
こやみえ初めし裾模様。
きびしくされどこゑもなき、
みことと畏み夜の魔は、
暗と眠と西の空、
己が領にと退きぬ。
あら幾すぢの征矢とびぬ
けらくの色を世に投て、
浪ぢのはてをゆるやかに、
見よ火の車きしりゆく。
綾のもすそを射貫いたる、
白銀のそや手挾みて、



赤き心（賞外）　下野雀宮村　入江靜子

こがねのかむりいかめしき、朝のみ神尊きろかも。

曉の崇嚴は幾度うたひ出てゝも飽かず、新しい光彩のあるものです(醉茗)

○夕の空

陸前　佐々木華子

あら崇高しや西の空、
天馬に御して女の神が、
黄金紫雲の彩、
み空に舞はん美しさ。
白雲ゆるら流れきて、
七彩華やぐ雲の上、
たとはゞ鎔爐に金殿の、
燃ゆるか棟の麗しや。
闇に染めぬく紅の、
鎔々金の水脈とこそ、
奇しの樣にきらめきて、
神秘の色の深き哉。
淡き霞の幕出でゝ、
今か名殘りの空の色、
明星かすかにあらはれて、
殘る光の白き哉。
天琴をさまり暮せまり、
光の影の榮もなく、
あえかの星の煌めきに、
女の神行きぬ天の彼方へ。

朝の崇嚴、夕の華麗、大抵同じやうな事をうたはれて居ますが、今後是を歌うて一歩を拔くには、多少の苦心が入ります、色彩美ばかりではいけません(醉茗)

○海

天の舍

幾世のろひの魔の手に、　推移を誘ふ現在の、
風のつばさに鞭うてば　逆まき狂ふしら浪や、
天そゝり立つ岩が根に、　叫喚のこゑ碎けては、
嗚咽にかへる遠ひゞき、　たゝみて深し海の色。
寄せては碎け碎けては、　又よせ返すなみと浪、
かくて幾世に秘置きし、　永劫の寂靜に歸る時。
懷疑の雲の影とけて、　輝く海の果しなく、
月を射かへす靈光に、　星のみ園も榮えぬべし。

初めは强く歌ひ出して、一結「星のみ園も榮えぬべし」ては力が弱いやうです(醉茗)

○秋の雲

茨城縣　綿引早子

呼べば答ふる山蒼の　紅葉の錦ほころびて
ひまもる雲の白蝶が　秋風をいたみてふら〳〵と
鐘の夕を老い花に　縋るが如き形容をみき
芦の花散る夕湖に　塔影黯然ふ沈むとき
傷手に腦む斑鳩の　はしる血潮の流れては
優しの翼戰はして　漂ふ如き雲を見き

印象はありますが、なほ秋の雲のうたとしては、大いに歌ひ足りません(醉茗)

○悲しき夜の吟

長野縣　山田くに子

胸に秘めある十七の、　春をいたみて恨みねや、
雲と湧き湧く青春の、　血汐濃染のふり袖に、
短う見てし夢さへも、　枕に落ちし花ぐしの、
小さき響にさめはてぬ。
悲しき夜やとねがへりの、　頰の涙は目にかへり、
胸に或るもの滿たされて、　運命と──嚙し口唇に、
にじみし血汐紅き哉。

胸に湧く血汐は青春のさもあるべき情でせう、唇に滴る血汐は、美くしと云ふより、凄い方が勝つてせう(醉茗)

○溪流

上野　大沼波子

濃色もみぢ葉美しき、　秋の山路を越へくれば、
吹くとしもなき秋風に、　木の葉散り來て笠をうつ。
溪の流れのいと細く、　水面にうつる紅葉や、
木の間洩れくる秋の日に、　底なる魚も見ゆるなり。
蟹はうつろを這ひ出でゝ、　さかしき足に横走り、
石より出でゝ石に入る、　奇術師めきし興樂や。
山の小鳥はあへかなる、　高音はりつゝ寄り集ひ、

角あらはせし石の上に、　下りては水を求むるよ。

花は歌はれても、鳥はうたはれない、鳥は歌はれても秋の鳥は歌はれない、秋の鳥の水を求むるのはよかつたです、蟹の奇術師は少しハガキ文めきました(酔茗)

○聖訓

名古屋　小山かく子

聖者はかくと宣ひき——。
貧苦艱難せめくとも、　悲しむ勿れ只信ぜよ、
富貴榮達まゝなるも、　高ぶる勿れ只謝せよ。
聖者はかくと敎へにき——。
家屋や衣裳飲食や、　思ひ煩ふこと勿れ、
鳥や獸や草木すら、　養ひ給ふ主にませば。
聖者はかくと戒めき——。
愛せよ人を敵までも、　報酬をなすは我權威、
汝が義務こそ夫ならで、　主の聖旨をなすの之なる。

少し直譯めきました(酔茗)

○何ならむ

讃岐　東原菫女

失せにし妹にまがひなき　少女に逢ひてことゝへば
のたまふ聲の亡姉に　似ますことよといぶかりぬ
左らば少女子思へかし　君と妾は何ならむ。

短いうちにあやあり、一寸出來ない詩(酔茗)

○後悔

下総　若杉登利子

「過去」の鏡に向ふ毎、　身はおのゝきて血はこほり、
我幻境に立つ姿、　眼閉づれど現れて
犇とあたりし「良心」の、　鞭の痛さに目を開き
フッと見やりし鏡の面、　噫夢あとの怖ろしや
僅かのうちに築きたる、　「罪」のあらゝぎ高聳ゆ
我にもあらずおのゝきて、　崩すとなせば噫如何で
「死」の嵐の吹かざれば、　如何で倒れん罪のあらゝぎ。

罪を悔ゆる人の聲の眞なるものが現れて居ます、かなしい詩(酔茗)

○白雲の賦

大分縣　やま川

天つ女神の舞ひの袖　夕べは千尋の谷の底
晨芙蓉の峯の上　閉しつ開きつちぎれては
奇しや白雲樣々に。
海原遠く浮く雲の　見る〳〵湧きて幾千里
嵐を孕み風をおび　光りを蔽うてかけるとき
そこに無言の啓示あり。
織れば綾文春の波　染むれば巧み秋の山
櫻花と匂い紅葉と散りて　夕べの雲のなびくとき
そこに宇宙の神秘あり。

天女の舞の袖に喩へたのは宜しかつたが、櫻と匂ひ紅葉と散るなどは下手です、要するに一首を通じて力が足りません(酔茗)

○螢虫

赤坂　齋藤茂子

日の御神がめでますする、　明の星とは知らなくに、

情のひとみはじろうを、　清きみ國に罪ぞとて、
黄金の征矢を胸にうけ、　下界りてなりし螢虫、
さびしき姿のかゞやきを、　限りとぼしてさぐれども、
誰か指示ます定かや、　かたむく夕日に從ひて、
明星影なきはかなさに、　君が涙のしたゝりと、
あしの葉末の露すひて、　いつまでわびん戀かぞも、

想像はありますが、感興には乏しかつた（評者）

○稚兒　北海道　山崎八重子

眠れる稚兒をそと置きて　父と母とはあくる日の
かてを得んとて今宵また　夜舟こぐべく行きにしを。
星の影もる草の家に　笑みつゝ眠る幼兒の
面わは神に似たるかな。

飾らず此詩も趣味あつて却つて愛すべきもの（評者）

○秋　上毛　河内とめ子

簷端を叩く物音に　青葉の夢の今覺めて
片山里のわが家にも　秋のみ神はおとづれぬ。
庭の梧桐音もなく　ひらりと散りそふ窓の下
啣ける虫の聲々は　秋を讚美のしらべかな。
籬をめぐる小流に　姿うつせる白菊の
いぢらしと見れば萩姬の　優しく笑をたゝへけり。
色のあせたる海棠に　安く眠るや秋の蝶
忽ち落ちて小流れを　水のまに／＼流れ行く。

○波のあと　府下　浪子

夕雲消ゆる黄昏に　濱邊の砂に『君』と手づから
淋しき浪の音きゝて　指もて書けば寄する白浪
燃ゆるが如き手掌　かにの横ばう房州濱邊
奪ひて去りぬ──。

うき世の海は荒れたちて　白泡立てゝ遠くみ底に
綠を波の風の音の　ふたり手を取り歩めば寄す
そのゆくすゑを思ふ間に　浪泡立てゝ『君』が足あと
奪ひて去りぬ──。

汝白波汝何故に　獨りのこしてわが斯の君を
闇を私語く浪の音は　死なば諸共浮世を外に
浪は靜けき夜となりぬ　堅く誓ひしわが斯の君を
奪ひて去るぞ──。

見よ──遠海の闇の上は　されど汝は覩る明あるぞ
四邊妖氣立ち籠めて　余は誓へど浮世は──無情
おぞや惡魔に誘惑はれて　姉よとまでに誓ひし斯の君を

奪ひて去りぬ――●

○朝寒　磐城　富田時子

咲き後れける朝顔の、つぼみに重き露にして、
あまり冷たきつれなさに、花咲き兼ねし秋の朝。
幸をなげきの朝顔や、花凋落の今にして、
小庭の隅に捨てられて、照る晃を待たる運命かな。
寒さ身にしむ朝まだき、翁は猶も床にして、
枯骨にしむる秋冷の、起きるにつらき朝げかな。

本郷　なばな

○春の天女界

千里を離つ深山の
梅の林や櫻の森に
駒鳥歌ひ蝶の舞ふ
白衣の天女飛び遊ぶ
淸き流れに櫻散り
天女の袖に梅の染む
赤き太陽暮れぬれば
銀かと光る月や輝り
星や躍ると見ゆるなり
煙りの登る家もなく
小川や歌ふと聞ゆなり
雲の出でくる山もなし

新田柳舍十九女

○寐顔（ねがほ）

遊びつかれて幼子は
何夢みてかほゝとゑむ
げにエンゼルの如くなり
罪なき童のそのかみに
乳母のおひざをかりまくら
おゝ愛らしのそのおもは
吾も再び歸へらなむ

うちの孃（賞外）



長門萩　小國敏子

○雁　岩代　河野よし子

さよふけわたる雁がねの　鳴くなるなべをながむれば
あはれや影のたゞ一つ　やよ如何にせし汝ひとり
いづこの里にざめやらぬ　夢に遊びておくれつる
追ふとも友におよばじを　一夜は宿れわが池に

○木枯　府下　鵜澤良子

年月永く病み臥せる、病も未だいえざるに、
今年の秋もはや暮れて、人目かれ行く冬は來ぬ。
訪ふ人なきは厭はねど
涙たゝへてわぎも子が
看護する樣見てあれば
死にもまさる我が思ひ。
我が世更け行く木枯に
夢は果敢なく破られて
妹や如何にと見かへるに　寢床に入らず糸紡ぐ。
何をねたみの神の手は　病を我れに與へつゝ
夜の憂さ知らぬ妹までも　涙の淵に沈めけん。
木の葉誘ひて吹く風に　枯れ行く虫の聲聞きて
明日の運命を嘆きつゝ　幾夜か泣きし二人して。

吹くな木枯我が宿を　病に惱む我が宿を
吹く木枯に堪へ兼ねて　散るとも我れは厭はねど。
後に殘りて一人して　妹は如何にか泣くらんを
吹くな木枯心して　病に惱む我が宿を。

○秋野の露　滋賀　川島敬子

宿なき旅の秋の野は、　すそこそ濕れ夕露の、
白く冷き香ぞすると、　ソト手折りてし草花や。
雨に嵐に幾たびの、　秋や流せしさゝ川の、
橋よ危くくちはてゝ、　孤り淋しき草枕、
旅のあはれを音たてゝ、　汝も急ぐか秋の水。
行くに歸るに穗すゝきの、　丈をうづむる細道を、
とすればまよふさゝに、　道指しわかぬ石ぶみの、
苔打はらふ細杖も、　折れて悲しき生命かな。

○裾野　高尾　金子楓蔭女

富士が女神のめす衣の　裾の摸樣の巧みさよ
桔梗かるかやおみなへし　花さまぐ\に咲き亂れ
見えかくれする風情など　歌もおのづと出てにけり
かゝるやさしき裾野をば　夢にさそはる心地して
我が行く先は神の里

○小羊　陸前　尾形千代子

彩雲またく褪せゆきて、　はや黃昏るゝ秋の野や、
今日の務を了へんとす、　牧場の柵に凭りそひて。
角笛とりて吹き吹けば、　遊べる白き小ひつじの、
わびし一群つどひきて、　我をとりまく可愛さよ。
思へ、かよわき小羊の、　獨り此世にすてられて、
誰に便らむすべなきに、　われを母とや慕ふなる。
あゝ孤兒のさちうすく、　悲し運命をなげく世に、
愛よ、淚よ、分たむに、　汝こそ地に我よき友ぞ。

○病床苦吟　兵庫　柳田白百合子

芙蓉亂るゝ雨の夜を、　むねのいたみになやみつゝ、
はかなき病の今宵にも、　散りて行く身を思ひなば、
あゝ亡きあとの偲ばるゝ、　浮世の運命拙くて、
世に孤子と捨てられつ、　理想希望も地にすてゝ、
此の山蔭に六春秋、　めしゐの妹と二人して、
あゝはたとせの我運命、　などてか斯くも幸うすき、
病の進みし昨日けふ、　死するは惜しき身ならねど、
一人の妹を如何にせむ、　孤燈ふけたる破床に、
夢まどかなる妹の、　天使の如きおも見ては、
其の行末の忍ばるゝ。

○草枕　青山　永井よし子

野越え山越えてえ行て、　さまよひ出ぬ露のはら、
前途は遠し日はくれて、　今宵はこゝに明さなん、
野邊のかり寢のくさ枕、　草葉をおつる露の音は、
天の使のわがみゝに、　さゝやき給ふ心地して、

松虫すゞ虫くつわ虫、
三つ星さむき天の色、
處得がほにうたひつゝ、
かげは袖にぞうつりたる。

○落ちゆく葉

麹町　初霜

野に秋姫の訪ひまして
きのふ木陰の乙女子の
夢や昔に通へども、
あまりに色のよわいかな。
よそひすがれし我をしも
月の光を持ち來れど
ゆるせ情のうらまるゝ
此の衣さへも捨つなるを。
そとぬぎかふる葉衣や
詩集を青くそめなしゝ
血に湧く胸を引かんには
昔の風は忘れずて
秋の調べを奏づれと
汝が訪問にいまははや

○秋の夕

奈良　白露子

西にたゆとふ金色の、
朱にぼかせる夕雲の、
あはれ神秘の夢の領。
光もやがてうすらぎて、
薄紫にうつろひて、
夕靄頓に埋み來て、
ミユーズの神の奏でます、
讃美の香りたかゝるよ。
遠近に聞ゆは何の音ぞ、
妙なる樂の音につれて、
折しも月宮の扉打開けて、
今姫君の行幸に、
花の香たかき秋園には、
さゝやきのみぞもれてきく。
伽羅の裳の香もたかう、
妙なる樂は打やみて、
希望の聲と歡樂の、

○磯の夕

明石　孤蘭

夕美し彩りの、
沖に白帆の影二つ、
雲粧へる明石潟、
欸乃ゆるう歸るなり。
うす紫にかすみつゝ、
夜を護りの燈臺は、
靜に寢るや淡路島、
江崎の磯に輝きて。
暗闇の帷のおほひては、
何囁くや夕波の、
月まだ出でぬ淋しみに、
只ゆた〳〵と岸を打つ。

○青春

兵庫　田中　霜月

幸なくばあゝ幸なくば、
などかさはかよわき君の、
いたづらに花をし嘆き、
説けばとていつの時にか、
星のごと涼しき瞳、
海原に沈みゆく日を、
松風の靜けき音に、
妙にたゞ仄かに聞けど、
ふさやかにかぐろき髪の、
ふりかゝる高き薫に、
暖かき胸にもよわき、
せめてもややすき心に、
たそがれの寂びしかどの、
面ぶせに君がよる時、
曲たかき歌あらむに、
さびしさを胸に傳へむ。
しら露のもろかるさだめ、
また君が愁やたえむ。
ま白なるみ手をかざして、
夕ぐれに君や仰ぎし。
つま琴のしらべ通ひて、
亂れては思ふに堪へじ。
そは雨の夕べに見しよ、
三日月の眉毛ゆかしき。
悲の涙ひそまば、
人を戀ふ夕べ幸あれ。
夕日影まばゆく照りて、
やがて世は闇に消えゆく。

○秋の夕　　大阪　落葉子

み寺に響く鐘の音に、　何誘はれてもみぢ葉の、
散りしく方よ暮れそめて、　靜につゝむよるの幕、
あゝ寂しみの秋のゆふべよ。
またゝきそめし新星の、　み空にたかきほゝ笑の、
そこに慰安のいろありて、　もだえにくるゝ人の子に、
傳ふるは神の啓示なるらむ。
白たまつゞる道芝の、　葉末のかたにきらめくは、
それよ星くづ香もあれや、　硯にうけて墨すりて、
この平和(ピース)をうたはなむかな。

○新星　　信濃　芳枝子

錦織りなる秋姫が、　彩の御姿嫉しと、
峯を彷徨ふ夕雲は、　淡紫に紅さして、
刻一刻と濃艶(あでやか)に、　見る〳〵空の大海にの、
サッと流すや紅の、　色鮮かにせゝらぎ、
流れ床しき行く水の、　碧に影を寫せしも、
あゝ束の間の夢にして、　次第にせまる夜の色に、
しばしの榮華は包まれぬ、　大空高く見上ぐれば、
此の世を掩ふ夜の神が、　暗の御袖を洩れ出でゝ、
夜の平和を守るべく、　輝きそめし新星の光。

○なぐさめ　　京都　橋本みつゑ

ふるさと遠きなつかしの、　夢は破れけり小夜時雨、
幼(いとけな)うして父(ちゝ)にわかれ、　母なやませし十餘とせ、
涙多くもうまれにし、　吾(われ)は旅つゞく運命(さだめ)かな、
人のなさけの冷しや、　たゞ戀ひこがる故郷を、
千里へだてゝたらちねも、　山はた川も何かせむ、
思ひ出多きおもかげの、　せめては夢を慰藉(なぐさめ)とのみ、

○夕づゝ　　徳島　富士谷あい子

光(かげ)まだにぶき夕づゝの、　淡きを戀のいのちにて、
手をとりたどる畷みち、　つのるおもひを語りつゝ。
あせゆく色はとがめねど、　君におくりしわが庭の、
露の糸萩しほるれば、　いかにみだれんわが心。
いづくともなきひなぶりの、　ふしさへ空にきえ入りて、
遠き田鴫(たしぎ)の羽根搔や、　夜のさびしさの身にそしむ。
君ゆゑもゆるわが胸の、　愛の獵矢(さつや)の射ぬきなば、
あかきこゝろをしるしにて、　ゆくすゑ永くちぎらばや。
流るゝ星をゆびさして、　身のあけぐれをかたらへば、
調べをひむる秋風に、　更けて露けし四つの袖。

○秋の聲　　能登　新保露枝

音なくそゝぐ秋雨に　萩は泥にまみれはて

なもなき草の下蔭に
冷けき夢ぞ結ぶなる。

里の小川の水やせて
汀に秋の花淋し
衣に秋風寒きかな。

葦の花並ちり初て
枯れし尾花に風寒く
月影冴ゆる夜な／＼は
垣根に虫の鳴きつれて
いづこともなく秋の聲。

胡蝶空しく羽やれて

うつるや淡き雲の色
堤たどり行く老僧の

○花の刺　　千葉縣　川名代子

あれ／＼御覧花子さん、
奇麗に咲いて見ゆるのは、
あれ何と云ふ花でせう。

おや、暖き日を浴びて、
蝶が眠つて居りますよ、
妾は之をとりませう。

ア丶恐ろしい此花よ、
薔薇と云ふのは此花か、
妾は此所を刺されたよ、
蝶は知ずに未だゐます。



點燈（賞外）　府下八王寺　乙幡もん子

○草笛　　小石川　山崎星虹

今し夕虹消えはてヽ、
青野涼しきたそがれに、
星を生み行く夕空の、
合歡の香響る草月夜。

杜鵑月夜の露更けて、
草笛高く吹きすさむ、
如何にやさしき青春の、
雅びの人がたしなみよ。

奇しき調べにあこがれて、
音せし方をたづぬれば、
君の影とも見えなくて、
小百合の下に殘る草笛。

星ともならずそが靈は
花を戀して逝きにけり。
むくろは遂に生きざれど
夕べ小牛のかへる頃

○露の歌　　下野　露子

花を尋ねて行く蝶の
ひとり戀して狂へども
けふ金風の身に寒み
破れし翼やすめしが
髑髏となりてとこしへに
花戀しさに露となり
虫叢にすだくころ

尾花、葛花、女郎花
ゆかりも深き藤袴
一夜の宿のみ情に
されど果敢なき露の身は
榮えか五色のあやの玉。

○鄙唄

山姫の清掻ける
しのゝめの空あから
露深き羊腸の
山里の賤の女よ
かざり矜る現世や
嬌に彈くしづの音――
まことなる汚無の
玫々と苅る草に和す

○逝きし君

逝きにし君を偲びては
寂し想に憧憬れて
北の國なる氷窟を
堤小路の爐もみぢ

かはら撫子、萩、桔梗
いろさま〴〵の野の花に
甦りする蝶の靈
あした最後を飾らむの

常陸　清子

玉琴のひゞきかも
ひゞきくる朝まだき。
深山路を分け登る
木靈に聽ふ其み唄。
ひやうかに細き手の
銀燭の下かげに。
利鎌とる乙女子が
妙曲にふさふべき。

尾張　森　郁子

哀歌誦しつゝ我獨り
夕、湖畔の逍遥に
吹きても來しや秋風は
去らずて梢拂ふかな

噫青春の血は燃えつ
十八君と契りては
胡蝶もかくや甘蜜に
胸の血潮も湧く想ひ
醒めての後は徒に
立つらん想ひ淋しさに

○秋の母

梭の音輕く面白う、
障子に映るみだれ髮、
手ぶりおかしう織る糸に、
あゝ泣く時の友と見し
涙にしぐる我が袖の

○我が戀

樂しかりしよ霞み立つ
香ふ菫の紫を
あゝ限りなき樂しみを
二人が胸の美しき
されば十年は夢のごと
一人門邊にたゝづめば

ミューズの神のおん前に
唯樂園の花に舞ふ
醉ふては熱き頰のほてり
秋も春とし思ひしを
枯野の末の黄昏に
惆悵の子となりにける

群馬縣　こぼれはぎ

もるゝ小窓のともし火や、
袂しぼりし細たすき、
心おりこむ母の影。
杜鵑青葉の蔭を去り
乾かぬひまに秋は來ぬ

埼玉　白露

春の花咲く野に出てて
君が髮に挿せしとき
望みは其處に流れ出て
戀ふ葉蔭にさゝやきし
たのしき時よ過ぎ去りて
空う曇りて風寒し

文學士 沼波瓊音先生選

敍事文

特別第二賞

○朝晴

三河 燕女子

薄暗い小屋の中で、雞が羽搏して鳴いた。例の樣に戸外へ、冷たい爽な曉の風が、すーつと肌へ沁み込む樣。天王樣のお森を後ろに、樂法寺の大伽藍を右に見ながら、お彼岸花が露を帶んで、白つぽく咲いた野道を辿ると、突然、側の大豆畑から、小鳩が四羽ばた〳〵と舞ひ出る。――、あんな可愛らしい瞳だから罪も野心も無い聖い心の、僅な事にも戰のくのだらう、と思ふと、自分の僅な足音が、小さな胸を騷がしたのが氣の毒なやうに思へて、ぼんやり立つて行衛を見てゐると、樂法寺の伽藍の鬼瓦へ、一かたまりになつて下りて、クー〳〵と悲しげに鳴いた。

空は海のやう、白い雲がひら〳〵と、帆の樣に、又、鷗の樣に漂うてゐる。やゝ紅葉したかと思はるゝ彼方の森さきに、石卷山が圓う、ほんのりと霞んで、曉の光に色づいた溫容、いつもながら、自分にはお母樣の樣に思へる。

夜は已に明け離れて、曉の光りが音も無く迸る。堀またぎに束ねた黍からの先には、太やかな蟷螂が、斧を振上げて、朝日に向つてそり返つてゐる。よもぎの穗が白くほゝけて、畑から出したらうと思はるゝ雜草が枯れ〳〵に、露にやはらかになつた小道を歩むと、何處かで繭煮る香がする。半町許り行くと、朝顏が露にぬれた垣越に、座繰の音が響く。見ると、其處の日あたりの椽側に、赤い襷をした十六七の美くしい娘が、眞白な腕露はに、少しかゞみ氣持になつて、座繰を繰つてゐる。側には二十許りの若い男が居て、荒手に尺八の歌口をけづりながら、何やら女にはなしかけてる。

娘は雪の樣な面をほんのり染めて、うつむいた儘につてりする。

突然、掠鳥が一群れ、羽音荒く空を過ぎつた。

（評）朝晴の景趣痒い所へ手の屆くやうに快く次第〳〵に展げられたり齒も及ばず麗なる筆哉。

特別第三賞

○眠られぬ夜

麻布區霞町二十一番地 赤崎あい子

客が歸つて、皆寢靜まつたのは彼是十二時、こゝ東京の片田舍とも言ふ可き麻布霞町、今人力車の二輛通つた後はひつそりとして、音のするのは只、此の寒さを訴ふる虫の聲……生き殘つた……計りである。あゝどうしても眠れない、眠らうと思へば思ふ程、益々眼がさえるので。

人が寢靜まつたと知るや、己れの領分と云はぬ計りに、鼠が勝手を荒し出して、寒い々々皿の音が身にしみる樣。　妾は幾度も寢返りをしたが、矢つ張り眠られない、おや又例の弟の寢言、何んてすつて……生意氣な事云ふと先生に云つてやるぞ‼……今日學校て、必つといぢめられたのてせう。いやだ〳〵兄さんの齒ぎしり、心細い樣な音、なんだか淋しくて淋しくて仕方がない。ボンと一つもう一時明日學校に後れなければ好いが。寢られなきや雜誌でも讀んて眠ても疲らせませうと、ランプを燈して二三册持つて來て、讀み出しました。少し念が入つて來ると、　時間の立つのがまるで分らないて、おや今のは三時よ、どうかして眠りたい、明日五時に起きて又、母上の御手傳ひをしなきやならないの、つらい事ね。　ヤットとろ〳〵しかけると、庭てポチがワン〳〵吠え出した。うるさいな、切角人が寢かけると、あんなに邪魔するの、にくらしいポチだよ：何時もは可愛いーが：：：又寢られなくなつてしまつた。大方四時頃だらうとランプを上げて見れば、四時十分前、じや今日はもう起きてしまいませう。立ち上つて戶を一枚開けると、マー好い月だ事、氣が淸々するは。ポチポチポチポチポチ、御前何故あんなに吠えたんだいつて言ふと、何んだか尾を下に抓つてクン〳〵云ふの、矢つ張り可愛い丶犬ね。おゝ寒いと中に入つて床を取ると五時、何所かで高くコケコッコー。

（評）不眠の不快なほこの詩趣あり鼠の音、皿音、等樣々の響に連れ鷄聲を以て結ぶ興甚深し。

天

○鳥の聲

三河國豐橋市鍛冶町五五塔古方　房枝子

松が岡の尼寺を出て、小一丁、妾は何時か圓覺寺の前に來た。

初冬の夜の九時々分、早寢の此邊はもう大方戶締をして、駄菓子屋の戶が一枚開いて居るばかり、そこからランプの光が、ぱつと一幅末擴がりに路を照らして居る、其の直ぐ先に寂びた門があつて、妾は今其れをく

ぐつたのである。

拵う遲くならうとは思はなかつたから、提灯の用意もして來なかつたが、月のなき空は、眞黑に曇つて了つて、星影一つ洩れず、風も死して、梢を搖ぶる音もせぬのである。

犇と罩めた漆の如き暗を透して、唯一點、行くての方に黄色に薄ぼんやりと、鬼火のやうに見ゆるのは、遠からぬ湯屋の軒あかりで、是のみを目當に覺束なく辿るのである。

門を入つた左手には、小屋掛の茶店があるので、晝間は六十許の人の好い媼さんが出て甘酒を賣るが、今は見えない、御寺の門は黄昏前に閉めるのが例であるから、今宵も固く閉められて居るのであらうが是も見えない。

人は一人も來ぬけれど、母の懷に在るうちから、こゝを通慣れた妾は、恐しいとも思はなかつた、そして眤と暗を見守ると、其處の樣がはつきりと胸に浮ぶ。

幾百年經たとも知れぬ松杉は、兩側にすく／＼と聳えて空を蔽ひ、右手の狹い堀には、細く流るゝ水が何やら呟いて居る。夜は寂として、此せゝらぎより他には耳に入るものもないのである、あゝ、此時、こゝの僧堂に參禪して居る數多のうち若い僧が思は、如何なる物に觸れるのであらう。と思つた時、ぱつたり小石に躓いた、はつとして、踏堪へやうとしたが早遲く、私は摚と地に倒れた。

起上つて顧ると、早駄菓子屋の戸は締つて居た、前なる湯屋の灯火、あれが消えたならば、私は此時太古の世に在る心地がしたのであらう。



父の姿（賞外）　尾張一ノ宮町　森郁子

不意に、頭の眞上で聲がした、慄とすると、ばた／＼と羽音がして、山門の方で又一聲鳴いて鎭つた、聲はよく梟に似て居たが、梟とも思はれない、二荒、高野の山奥なれば、佛法僧とも思ふべきに、瑞鹿山圓覺寺の、夜を鳴く鳥は何であらうか。

何とはなしに打仰ぐと、眼の慣れたからか、暗の中に猶黑く、もの〻精の現したやう、松杉の梢が朦々として望まれた、彼の鳥は、此の枝に居たのであらう、二聲、はつきり耳に殘つた鳥の、其の聲を思ふたびに、恐しいとはなしに怪しくぞつとする。

白鹿群れて法を聽きしと傳ふ、其開堂の日、佛の眼に

洩れた鳥であらう、其の聲音の鋭き、濁みたる、嫉ましげなる、魔性のものかとあやまたるゝ。

それにしても、あの鳥の聲の、何うして恁く妾の心を引いたのであらう。常より憧るゝ法の園生にて、魔性に近き鳥の聲に、恁くも思ひを亂すとは、罪多き私と、彼の鳥との間に、目に見えぬ糸もて結び置かれた、怪しい約束のあつたではなからうか。

あはれ、恁るときはに、縋れ、救はむと、暖き御袖を飜へす、御佛近かりし頼もしさ。

あたりがぼうと明るく見えた、心着くと、妾は湯屋の前迄來て居たのである、こゝから、一軒、二軒と數へて、狹い空地をおいて、三軒目の小いのが妾の家、戸の隙より灯影の見ゆるは、母樣未だおやすみにもならぬさうな。

數知れず通つた圓覺寺の、今宵ばかり尊く拜まれた事はなかつた、又此時程、汚はしいわが心の浄められた事もなかつた。

あゝ、然るにても怪しき鳥の聲……、それよ、今夜あたりの夢に入るかも知れぬ。

（評）鏡花は幻怪を描くを以て鳴るされど彼は書き過ぎる癖ありこの文の作者の書き盡さむとして盡さず人をして迷はしむる所却て彼に勝ると余は思ふ。

地

○有聲無聲

大分縣中津町　やま川

耶馬溪の暮色

秋の淋しさは夕暮こそ増れ。

耶馬溪は今日も暮れんとす。

英彦山は紫に霞みて遠く、見上れば樵夫の通ふ細道嶺より嶺を巡り、累々たる巨巖は刀して削れるが如く、鑿もて穿てるが如く、岩は岩に重りて夏雲に似、松は枝を低れ猿の肘を伸ばして溪水を掬ふが如く、龍の雲を得て登天せんとするが如き間、青葉交りに乙女氣の羞しやと染むる紅葉ばの時を知り顔に燃へ出でしも哀なり。伏して望めば山國川の清流は岩に碎け石を嚙み滔々轟々と白雲を吐き、花と散り玉と亂れ、淀みては紺碧蛟龍を潜ましめ、遠く々々長蛇のうねれるが如く蜿々と、鬣を揃へて競ひ行く奔馬にも似たる群峯の間を北へ〳〵と銀を綴りて流れ行く。夕陽名殘なく檜原の峰に落つくし蒼然たる暮色、遠き彼方より次第に迫りて萬象を罩むれば、夢にも似たる一沫の雲煙は水面樹間より輕く浮びて、木立を縫ひ岩を掩ひ、峯をかくして碧空に登る、其靄やがて盡くる所五日餘りの月夢より淡くかゝれり。

我は此耶馬の暮色に秋の淋しさを探らんと川畔に佇めば、淵は眞黑に瀬は白く、山や木立や只一面の夜の帷幕の中に眠らんとし、群鴉星を負うて茂林に歸り、牧童月を戴いて家路を辿る彼方、屏風の如き岩蔭に隱見する茅屋は夕餉の煙棚引きて燈火の影幽にもれぬ。我は今宵圖らずも茲に太古の面影にも似たる造化混沌の耶馬の夕暮に對して永劫を感じ、悲愁をのせて行く水の行衛を問へば、思はぬ方にうすら淋しき鐘の音ぞする。

さても淋しき耶馬の夕暮や、尾上隔てゝ鳴く小鹿、月に冴ゆる砧の音を聞かば誰か秋の哀をとめて、孤客の思ひなからんや。

淋しとも淋し耶馬の夕暮。

月の闇無の濱

秋は月、月は秋こそよけれ。

濱邊の秋はさぞや景色も優ならん、思ひ入江に寄る小波の芦の枯葉に呼きて、白き花散る海士の舟、群雁斜に月影を亘る景色を看ば心なき漁翁の身にも轉た蕭疎の感ある可し。

今宵しも月明らかに星稀に一天碧を湛へて草葉がくれに喞く虫の音も哀を添へ、風冷やけく秋氣淸きに憧憬れて、長汀曲浦を飯る海士の、そこら刈り置く海松をばいづくに積まん藏なしの、濱の思ひ渚を一入淋しき影をひいて徜徉ひぬ。

見亘せば陸と海との境には白き一條の線を描き、足下には散る金珠銀珠、玉兎は中天にあり光り萬象を罩めて淸輝水の如し。彼方千秋沈默の和田岬は遠く海中に突出して月夜の影一刷毛に描きしが如し。此所には千古蕭々の磯馴松、磯吹く風に誰を戀うての想夫戀をや奏す。松影婆娑として白砂に印する所貝の燦めき星にも似たり、是や是、世を恨めしの流れ藻か、寄邊渚の亂れ藻か、行衛を問へば秋の夜は、さぞ寒からし浦風の吹出の濱の方に千鳥の聲す。

見かへれば夢より淡き扇ヶ城跡は公園となりて古の面影を止めず、花に月に憧憬の者は相肩を摩れども雨來り人去るの後獨り國破れて山河ありを唄ふ者なきを如何にせん。

遠き思ひに身を横たへて造化の呼を聞けば、砂原の表にも人生古今の叫びあり、女波男波の海底亦哀怨愁訴の咽びあり。吁月よ小波よ、汝は以前の汝にして何所の浦、何所の果てにも今宵の如く呼くらん。想ふ今宵此月遙かなる都の地に戀しの人の面影や照す、想ふ小波よ彼の浦に響く時あらば我心を彼の人に傳てよ。吁されど茲は西海の浦邊、千古花なき荒磯の渚に、昔ながらの月の世をはかなむうらぶれの子の心の中を誰か

知る。

風心あらば天にも告げよ！
波心あらば神にも告げよ！

人

(評) 風景あり情懷あり、錦を織るが如く珠を綴るが如し。

○霧

三河　露香女史

戸を繰ると、有明がポーつとさし込んで、植込の木が音も無くて疊の上に影を落す。飛石の影で蟋蟀がひそやかに鳴いてゐる。椽端に踞んで、今朝咲いた朝顔の花を數へると、白い福よかなのが妹の年丈。妹は夢に白い花に包まれてゐるだらう。屋根瓦の邊りを雁が掠めて啼き過ぎた。

野へ出ると、言ひ知らず心地よい朝の氣が肌を襲ふ。何處かで虫の聲がする。空には星が瞬いて、露を帶んだ校舍の屋根が月に輝いてゐる。

眞福寺の大竹藪が月にそむいて、眞黑く、遠ちの村、林が、ポーつと烟つてゐる。

野菊咲く土橋を渡つて、小川に出る。岸には風情ある柳が一本、其の根方から、彼方の岸に渡しかけたそり橋がある。一町も離れて見たら、霧で烟つてゐるだらうと思はるゝ、欄干に靠垂れて、顏も手も足も、一樣にうすものに包まれたかのやう、霧の中の人となつて、横雲の空を眺める。靜な朝だ、風は無いのかと思へば紡績會社の煙突が吐き出す、眞黑な煙が、倒れる樣に斜に折れてゐる。人の感覺は總べての物よりにぶいと見える。

霧は次第にこく、村を隱し、野を隱し、川向の製糸の家を隱し、煙突を隱し、遂には、すぐ前のひよろ〱松を隱す。

汽笛は、ボー〱と朝の氣をゆすぶつて六時を告げた、霧はやがてぼーつと紅く、やがて晴れると、日はもう登つて、岸に添つた飲食店の硝子障子がキラキラと輝く。川口からは棹置く音、朝ざむ其もの〻やうな響を傳へる。

お彼岸花、野菊、たで、みづひき、などが咲き亂れた野道には、荷車が一輛、色帽子を蒙つた五つ許りの子を乘せて通つてゐる。

(評) 美しき夢の如き風景多感の人を魅さむとす。

秀逸

○江村の夕

上總　山田沖子

誰がいひそめし呉れ竹の憂きふし多き世に、われも年頃親しみし敎へ子を、華はしき鄕に殘しおきて、高き聖りの道修めんと知らぬ都に志せし砌り、浪の音滑き江井ヶ島の里に悲しき一夜を明しぬ。

里の知人が心づくしの夕餉に、旅の疲れを忘れし吾は、寄せ來る夕波、吹き返す磯なれ松風に、故鄕はなるゝ悲しさをやらむと、只ひとり砂白き濱べにおり立ちぬ。

今しも日は西の方遠く牛島の頂きに隱れむとして、あたりの峰なす雲を金色に染めなしつ、餘光は影長く波間に漂ひて、空に流るゝ一すぢの淡雲と相映じつ。

沖邊はるかに吹き來る風は、磯山松に妙なる響を通はせて、入日に一日の勞をねぎらふごとく、また來む朝の再會を盟ふごとく、優しき樂を奏しぬ。

われは波うち際のとある石に腰うちかけて、龍宮の秘めごとを喞くごとく、足もとに小さき音たつる細波に、足の甲を洗はせつゝ、何見るとしもなく、西に續く濱邊を眺めぬ。

金色の雲の色はやゝ〳〵にうすれゆきて、美しかりし夕日は全く島の蔭に沈みはてぬ。夜の幕はみ空より靜かに降りきて海上を蔽ひつ、波の上低く飛び交ふ白き鳥は鷗にやあらむ。

おもしろき舟歌は、快き櫓の音に和してわが前をすぎぬ。やがて靄の中に消えゆきしが、今日の幸多き獲物は苫屋に待てる最愛の妻や子が、樂しき笑とやなりつらむ。

脚早く流れゆく雲間を縫ひて、諸々の星は輝きつ。九日の月は刈藻が島にかゝりて、淡き光もて小暗かりし海上を照らしぬ。

歩み來しわが足あとは、寄する波に洗はれてあともなく、砂の上に映る松の影も幽かなり。夢の如き牛島のほとりよりは、漁りする篝が敲たゝく音、波の上を傳ひ來つ。

夜も更けたらむに、さらばとばかり足廻らして磯山に上れば、屛風が岩のほとり、蛸とる篝の、かゞり火怪しう輝きつ。あはれ淋しき旅の夜や。

（評）雅馴なる筆。

袖　乞　（賞外）



府下日暮里　梅田かをる

○河畔　静岡　無名子

玆、荷揚場は、甲州より下る材木、彼處此處に、山とつみなし數十人の人夫は絕えず筏の切り揚にせはしいのである。

今船から上げたばかりの板四五十束、角に積み揚げて其のそばに二三人、一人は紺の股引同じ腹掛に、印袢纏を引つかけた……着たと云ふより掛けたといふ方が至當であらう……職人は金尺片手につゝ立ちて、少し反り身になりて滔々と、物の惡しきを論じてゐる、大かた買方ならん、尙一人は番頭風の男で、瓦斯織の着物に角帶きちんと締め、職人と向ひあつて算盤抱へて手を組んで沈思默考と云ふ躰、蓋し職人の傍若無人なる、論に當り兼ねしか、又は、直段の相違あるが爲か。外の一人は帳付けでもあらうか、年十六七位、今や兩人の談判、難關に達し居るをも知らぬ顏にて、手帳左手に鉛筆右手に、かたへの丸太に腰打ち掛けて、口中に琵琶歌か何かを微吟し、折々、鉛筆にて前の板をたたき、眉を張り、目を閉ぢ肩を怒らす。

職人が皮肉の論聞てやゝ面白く、番頭の沈默せる心中憂はしく、我不關焉たる小僧の態度、をかしくも又憎らし。

（評）技巧を弄せずしてなか〳〵に面白し。

○古き跡

群馬　松井清子

淋しげなる芭蕉の葉陰より、秋をはぐれし蝶の破れ翅なよやかに飛び行くを趁ひて長谷寺を出づれば日輪漸くかぐろひて、ちぎれ雲の一片、ふたひら、源氏山のあたり山鳩のほろゝと鳴く、怪しかりける空のともすれば雨をこぼして、たび衣袂ふる袖も侘しう濡れければ、一掬の水に英靈が墓の扉たゝかばや、と思へりし建長寺行きも思ひとゞまりつ、小袋坂も越えて鶴ケ岡にと出でぬ。

御階を幾つ、黄ばみたる銀杏の落葉、枝をはなるゝ音のかすかに、裏山ぞひに曳きたるやり水の散り積る紅葉にさゝへられて淀めるも、そゞろに冷やけき秋の色を湛へたるぞうれしき。

廣前には石の玉垣神さびて、神樂堂に靜か舞衣の袂しぼりし昔を忍ぶもあはれや。

みかへれば一時雨さとすさびて御廂の鈴の音おのづから古きをさゝやけり。

（評）穩健の筆。

○野道

長崎　栗田彌生

日も斜なればと妹うながして、歸らむとする袂とゞめて、垣根を流るゝ小川の水もよどむまで、うちなびきて咲ける白萩の幾枝、自から折りたまはりて、かゝる山里なれどまたも訪ひたまへや、必ずよ、忘れますなの御言葉に送られて、見送りつゝ行く友が宿、いつし

か、うすき夕靄につゝまれて、君が姿も垣根の萩も、次第にほのかに〳〵なりぬ、空には紅の雲ながれて燃るばかり、靜かに流るゝ野川の水銀と輝けり。

草に埋るゝ土橋渡ればせまき畑道にいでたり、畑の中にうすけはひしたる如き面して、横はれる冬瓜の姿のをかしとては笑ひ、茄子のいと小さきが濃紫の色の、夕日にはえたるが美しとてはたちどまりつ。ふみゆく道のいとせまくて草深になりたれば、蛇がゐさうなりとて、妹は飛ぶがごとかけ行くに、我もおくれじとすれど、手にせる萩の氣づかはれて、よほどに後になりぬ。かゝるうちにも、叢の中にやさしう匂へる紫の野菊、見出てゝはさすがに、とまりてきそひ摘むとき、何かひやり、わが足に……はと思はず立ちあがれば、わがはしたなさに驚きてか、しげき草の露はら〳〵と、あわたゞしうこぼれぬ、さてはと心づきて落ちつきて、またもいそぐ程に、やう〳〵道は小廣うなりつ、ほと一息、さて今更にをかしうなりて、顔見合せて笑ひいだしぬ。

空の紅やう〳〵うすれゆきて、藁家々々の軒よりもるる、夕餉のけぶりの三すぢ二すぢ、とある籬に白う開ける夕顔めづらしと見入る後の方より、里の男の濁聲の歌につれて、もうと疲れし牛の一聲、俄に迫ひ立てられし心地して、言ひ合せたる如く足をはやめぬ。さと吹きくる風冷かに、叢のそこ此處に蟲の音も低うきこえそめぬ。

（評）趣多き歸路かな。

○夕空　　大坂　稲穂女

日はもうとつぷり暮れてだん〳〵四方から夜の幕が閉ぢやうとするその瞬間。二階の部屋の窓から遙か西の空を見ると實に物凄い。丁度頭の上は濃い鼠色の雲が隙間もなく張りつめて居る。少し向ふは何だか川でもあつて苔の澤山ついてる石がごろ〳〵して居るやうな……その次ぎは青赤鼠のやうないろ〳〵の色が無茶苦茶にまざつて居て薄氣味のわるい色。ずつと向ふは一面に橙色でその上に眞黒なのが帯でもしめて居るやうに幾筋も横はつて居る、大層うつりは好いがすごい空だ、明日はまた雨かしらと思つて居る間に今迄折角好い配色であつたのがみんな鼠色のに占領せられてその鼠も黑みをおびて來てとう〳〵暗の幕は閉ぢ終つた、と同時に、今迄諸所の煙突の煙の渦を巻いてのぼつて居たのがみんな黑雲の中へ巻きこまれてしまつたのである。

（評）雲を寫すそのことが已に妙なり。

○曇り日　　津市　松尾弔花女

今日は朝からどんよりと曇つて、重い灰色の雲が空一面にはびこつてゐる。風もない、冷たい秋の氣が滿ち渡つて窓から見える畑の彼方の風情よい五重の塔を壓した銀杏の大樹に只一片帶の樣な淡玉子色の雲がなびいてゐたが何時しか消えて了つた。庭の植込の黄葉が今日のみは見るのも厭な氣がする。沈んだ日である。此の樣な日も早や暮近くなつた、と冷たい氣が犇々と身に沁む樣に、遙かに寒さを覺えたので、氣を散らさぬ樣にしんみりと讀み耽つてゐた「玉蟲」を閉ぢた、とんとんと階子を下りる、厨に入るといつの間にか愛らしい玉（猫の子）が寒さうに角火鉢の側に身をよせて、きよとんとした目で私を仰いだ、何となういぢらしいのでそと抱き上げると直に其弱々しい纖柔な毛を越して其溫かな體溫を胸に感じる、庭下駄のまゝ落葉のはらはらとみだれた植込をぬけて背戸に立つた。

入日の弱い力ない餘光が重くるしい山の端の密雲を僅かに透いて丁度淡いインクの浸むだやうな厭な彩り!! 連亘した布引、伊勢富士の諸山は腰から上邊りを白い濛々とした雲に閉ぢられて其僅かに翠の名殘を止めた裾の方が急に雪崩れて其處から大きく擴げた扇の樣に目も遙かな萠黄色の稻田!! 其間に折々ちよぼり／＼と村里を据ゑて神代村の鎮守の森の一際つゝ立つた櫟の木の頂きに鳥が一羽悄然と止まつてゐる、不意に「はいよう…」と馬を叱する馬子の聲にふと目をやると銀を溶いて流した樣な神代川の堤を馬一匹人一人とぼとぼ辿つてゆく、それへ續く眼前の小川に秋の水ちよろちよろと瘦せて、其上の堤には紫の綬をたれた樣な野藤が蔓つて野菊や撫子が小さい秋の天地を飾つてゐる。とやゝ暗くなつた頭上を一羽の離れ鳥が寂た音で鳴いてゆく。「孤獨!!」と思ふと云ひ知らぬ寂しさに胸をつかれて思はずほつと吐いた白い息!!。露を吸つた虫の音が冴える。冷たい風が稻葉の末の露をふるつてさら／＼とすぎた。

（評）末段最妙。

○八百屋の五分間

横濱　折部色子

四時五十五分。「おくれーい」と勢のある聲て、店へ十五六位の子供が、汚い味噌こしを持て來た。九尺二間の金棒引の、子らしい…。お内儀さんが「何を」と言て出ると、子供は戸板を裏にして、山に積である茄子の後の桶を指し、「蒟蒻を」と言ふ。亭主が小僧に後押をさせて、青物の澤山積まれてある、車を曳いて來た。二十五六の品の良い、丸髷の奧樣が、小さい聲で「下さいな」と羞しさうに、角の方で言ふ。多分今日は下女が故郷へ歸たので、其かはりとして買物にきたので

あらう……。島田に結た娘が、例の「何をですか」と丁寧に言て、頭を下げた。小僧と亭主とは、代る〳〵店へ、車に積てある青物を下す。而して工合よく並べて居る。親子らしい乞食が、穴の開いた錢を二十許り出して、「おくれ」と子供の方が言ふ。亭主は一寸苦い、何とも形容の出來ぬ顔をして、「何を」と無愛想に言ふ。乞食は鮭の頭を、二つ三つ持て店を出た。之れから歸て二人で、樂しく鮭の頭を突つきながら、夕飯を喰ふのであらう……。町内衛生組合の、袢天をきた若衆が、二人で錢を取りに來た。お内儀さんが錢箱から出してやる。若衆は受取を置いて出て行た。電氣が點いた。四方が奇麗に見える。小僧は一生懸命に茄子を數へて居る。「ヒトー〳〵フター〳〵」と美しい聲である。大きな聲を羞氣もなく、振りながら何處かのお三どんが、小さいおかもちを持て來た。大きな西爪の直ぐ隣の、梨と煮茄子を買て歸る。亭主は帳面をつけ始めた。娘は奥に居るのか見えない。一寸客足の絶えた時、時計がブーン〳〵と、五つ打た。

（評）余は鮭の頭の條を最も意味深く感じたり。



雨の日（選外）　日暮里　山田あき子

○五疊敷の一夜

岩代　武川たけ子

若松市の西方八里にして、五疊なる一小溫泉場あり。先つ年此の地に、草枕一夜の宿りを乞ひしことありき。この地は元より、人里遠くはなれしことなれば、物靜かにして『沈思』に耽るには、相應しき地なり、四面は山又山、春の花秋の紅葉の裝ひ、すて難しと。滾々としてつきざる靈泉に、浴すれば、心骨爽快、逆旅のつかれも頓に一掃さるゝなり。浴後欄に倚れば、前は斷崖十數丈、一小瀑布これに懸り、巖に躓きてサッとちる飛沫繪の如し。夕食後女中と語る『隣村との交通が杜絶されて居るためか、この地の人にして、廢疾ならぬ人希にして、そを憂ひて死する人も少なからず』と。月に憧れて宿を出づ、と見れば四隣は杉の枝の茂りに

茂りて、月の光も見えず、夜氣人に迫りて異なる感に打たる、あまりの淋しさに後をも見ずに歸途につくに、彼方には燈火アチコチに行きかよひ、人の罵る聲喧がし、いぶかりて、宿の人に聞けば、『與作の嫁が今そこの川で……』、半ば聞きて身振ひしぬ。程もなく死人は舁がれて下を過ぎぬ、被ひたる莚のひまもりて、見ゆる顏の色青く、滴に宿る月の影白し。おゝ恐ろしかりし、五疊敷の一夜よ！。

（評）凄絶。

○片々錄

神奈川　靜子

晨の二十分

鷄鳴かず、鴉鳴くなき此の峯。千里模糊として、さながら淡墨の山水畫を見るが如し。しばらくにして、青白き東の空に微黃を含みて、天地漸く明らかなり。既にして、淡雲の動き始むると共に、色彩の活動盛に、粲然として、其靈妙美麗なること、造化の技巧を驚歎するのみ。やがて日は半輪となり、半輪より全輪を躍出す、其間の氣象、景致、實に希望の色を現はせり。

夜の三十分

月いと花やかに出でたり、今夜は十五夜なるを思ひ浮べて、獨り、門を後ろに、御室の湖畔を逍遙へば、月の香爽朗なり、うつむけば、鏡の如き湖面に、金波銀波の波を漂はせ、あたり、いとゞ靜にして人聲を聞かず、波の音も聞かず、風のひゞきさへ聞ゆるなし、四顧茫々として、只、我と、優しくすめる月とあるのみ。嗚呼、平穩靜寂の境、實に永へに忘るゝ能はざる佳景なり。

此の夜、湖畔の月を、はがきに寫生して、故鄉の友に送りぬ。

（評）晨景妙。

○月下の美人

兵庫　矢島芳子

戀ひ情、これを瀨にせん蜆川にせかれてあへぬ身をかこちたる、それは昔の伊達男、紙衣着るまで通うた末には、死出の旅路を二人連、佛の國へ行かしやんしたが羨しい。笑うた後では泣かうぞと朋輩衆の言はんした時、エヽそれは初めから覺悟のこと、それが辛くて戀がなりませうかと、大きな口を叩いた揚句がこの始末、今更面目ないやら口惜しいやら、人もあらうに不斷から仲惡しの信夫づれに見代へられしとは。なんぼ浮氣な男心とても、あんまりななされ方、勤め氣はな

れた閨の中、ぬしが口から言はんした比翼の鳥、連理の枝がどうなつたやら、心では平井權八小紫、ぬし等ばかりを戀の手本にはさせまいと、思ひ切つての深はまり、ぬしのためなら輕い命と投げ出して打ち込んだに、嬉しやまことのかたまりは、お腹の孩子、これが互の仲のかすがい、離れがたなの首枷ぞと、喜んだはほんの東の間これ〳〵と話したら、ぬしもさぞかし喜ばんしようと、月は重なる五月雨の、或る夜ひそかに告げたが誤り、そのまゝに寐返り打つて餘所での浮氣、それ見たかと樓主の責苦、朋輩衆の蔭言、それに信夫がこの頃の小面にくさ、エヽ思へばどこに此の身の立つ瀬があらうぞッ‼、オヽそれ〳〵、死なうとぬけだしてきた此の身が、今更に何の未練にこの繰り言オホホヽヽ。あれ〳〵お月さまが笑うてござる、マヽよ吹け〳〵秋の風、散れよ散れ〳〵萩の花、咲いた花なら散らねばならぬ、醉うた酒なら一度はさめる、さめる間が人の命でござんせう、戀にやつれた女一人、主の形見の孩子一人、これからお前さまのお傍へまゐります、可愛がつて下されお月さま、默つてござるは御承知かヤレ〳〵嬉しうござんする。

* * * * *

みだれ咲く尾花葛花、月にかゞやく露の白玉、風そよそよと萩の花を搖り動かし、うら枯れし岸の柳の古葉を水に泛べて微かに湖心を渡れば、向岸の梢に小翠のさんざめき起りて、細り行く虫の音切々腸に泌む、華湖畔の夜、愁然として月に對するはそも誰ならん。

* * * * * *

優しき戀の花を散らせし秋風に長恨つきず。光すごく天心に冴えたる月には、歸雁の列明らかにかかれり、小笹原を吹きわたる風に、小夜の夢路を破られて鳴くか鶉の聲、遠く風に消えて行く、折りしもあれ一聲高く水に響あり、月光波に碎くるや、忽ち浮雲月をかくして物凄き時雨空、笹の枯葉を打つて湖面にそゝぐ雨の音、颯々梢を拂つて遠く消え行く風の聲、腸に泌むを、蘆心雨に白くして、月雲にくらし。

（評）才筆ありされど斯る材料はこの誌には不適當のものか。

○入院日記

あい子

病院の門を潜つた、いよ〳〵病院の門を潜つた。看護婦に導かれてはし子段を上つて古い廊下をゆく、と顔の蒼い、髮ををどろに振り亂した婦人がそろ〳〵と歩んで居る、二十位の田舍風の若者がこれも元氣あるべき其からだを、惱ましさうに欄干にそつてあるいて居る。

五番目の部屋、其處はわれにとて充てられたところである。

鼻をつく藥の香に思はずハンケチをかほにあてた、室

は八疊許り西は肬掛窓になつて東はからりと廊下に面した入口、南に二間押入があつて木の戸がたつて居るすみの爐のある反對の側に白布のかぶさつた蒲團が敷いてある。

持參した手荷物をといて居ると看護婦が「下においでなさい」と言ひにきた、下に行つて診察してもらつて部屋にかへる、とすぐ看護婦が御飯を持つてくる、豆腐のすまし汁と野菜の煮付生玉子二つである、食べてしまう、とお膳を下げにくる、硯をひきよせて端書を枚書いて出して下さいとたのみに行つてきて、それ二からまた部屋で少し本を讀んで居ると「五號だ五號だ」と言ひなれがら五六人の足音がすると思ふと一人の男が障子の破目からのぞいて「オヤちがふ」といふとまた他の一人が「何だ〳〵」とのぞきにきて「ウンちがふちがふ移されたんだ」「オーイ看護婦さんこの間まで五號に居た山岡といふのは何處に行きましたい？」といひながら何處か行つてしまつた、間もなく洋服金ぼたんの學生らしいのが例の偵察穴からのぞいてまた去つた、これは當分いろ〳〵の人がくるだらうと思つた。

やがて四五枚も讀んだ頃障子がスルリと開いて、見ると五十近い中婆さんが入つて來た、ツカ〳〵と入つてチャンとすわつてお涼しくなりました、ちつとはおよろしい方でございますか、と挨拶をする多分前の患者の間違ひだらうと思ふけれど知らない人の見舞に來るといふのもをかしい、煙に卷かれた樣なので「どなたでございます」ときくと、徐ろに曰く「ハイ私は耶蘇教の者でございます」それから訪問の由來を說いて傳道めいた紙を置いて行くまでには約四十分。看護婦寄宿所の後の森で烏がカアとないた。

籠から梨を出して食べて居ると看護婦が驗溫器を持つてくる、と間もなく障子があいたから「驗溫器ですか」と出さうとすると「イヽエあの」といつて脈をとつて柱に掛つた表に書きつけていつた。

入れ代りにまた他の人が驗溫器をとりにくる。とこんどは、また夕方の御膳がくる、食べ終ると急にねむたくなつたので一寢入した、さあ隨分寢たと見えて目をさますと八疊の座敷に暗いランプが一つ窓の障子が開け放しで寒い風が、遠慮なくはいる、何とも言はれない淋しい思ひがして廊下に出て見るとゝころ〳〵にねむつた樣なカンテラが二つ三つ、欄にイめばザワザワと高い音たてゝ樹々が鳴つて居る、月が高くかゝつて居ると其側にこのまあ澄んだ蟲の聲には吹きはらはれてしまひさうな黑いヨボ〳〵した雲が三寸ほどかゝつて居る、實にいゝ夜だ、しかし病院は廣い、心淋し

い、今夜くるとのことであつたが、おとみさんでも來てくれゝばよい、障子をみんなしめて內に入つた、爐の火は疾うに灰と化して居る。

（評）前患者の見舞人うるさき傳道婆寫し出して妙。

○出迎

薩摩　花岡春子

さもなき車の音も、今日は殊更のやうにきゝなしつゝ、久しき旅路より歸り給ふ父上のため、座敷も掃き清めぬ、床の花をも挿しかへぬ。かくて米ノ津に出で迎へむと、家を出でしは黃昏ちかき頃なりき。

町を去り橋を渡り、眺めよき野中の道を、わが車は威勢より走りゆく。田の面に厚く重れる稻の垂穗は、いつのまにかくも色づきけん。そよそよと吹きめぐる秋田の風に、黃金の波打寄せぬ隈もなき、さては怪しげなる案山子の立てるに、飛びかへる雀の群賑しく、げに豐けさは天地にみちてぞ見ゆる。平戸の村も過ぎぬ。眞紅に燃えし夕映の空は、樺に、紫紅に、とりどり美しく染めなされつ、やがて夜の幕は東の嶺の麓よりしづしづと、村にせまり森を覆ひ嶺を罩めゆくに、行くてには早、火影またゝきそめつ。今、父上は何處あたりをや來給ふらん。わらはのかく出で迎ふる事、知り給ふや否や。



ハイカラ（選外）　日本橋　松井なみ子

澄み渡れる大空に、さやけき十日の月を仰ぎ、美しき星の瞬のぞみつゝ、米ノ津橋の欄干によりて立ちぬ。ほのかに見ゆる天草の島々、名古の浦、渚に並ぶ松の陰よりもるゝは、波に浮ぶ漁火か、はた蜑の苫屋のともしびか、こなたは山高くそびえ水清く流れて、あたりに虫の音いとやさし。さりとも父上の遲きよと呟く折しも、遠くよりこなたを指して來る燈火一つ。人か、車か、何卒馬車にてあれかしと、心ときめき近づき見れば誠嬉しや馬車なりき、されど、あゝされどそは我が父上を乘せたるにてはなかりき。失望して、またも燈火や見ゆると、專らに待てども、待てども……『待つかひも渚にうかぶとま小舟、波のよるよるもるゝ燈火。』月みむとてか橋の上に遊びし人も一人去り一人ゆきて、ふし面白き笛の音も絕え、水島の君とたゞ二人のみ。宵の明星いつしか影消えて、月漸う傾き、秋の夜の風そゞろ寒し。待ちわびて、さき來し馬車ひく人に問へば、その人は阿久根にて車をのり換へ、出水の

方に行かれぬと……。つとめて此處まで來しものを、今まで待ち設けつるものを、徒らになりし事の口惜しさよ。

歸らむとすれば、車もゆかず、馬車もなし。淋しき沖田野の道筋に、もの凄き狐のこゑもやと怖ぢ、稻の穗そよぐ風の音にも驚かされつゝ、草臥の足ふみしめしめ、辛うじて廣瀬の橋に來し時、われらを迎ひの車いで立つ處なりき。馬鹿らしきことしけるよと、恨みもやがて、樂しき笑ひに忘れ果てぬ。

（評）ありの儘を寫して味深し。

○裁判せず

名古屋　小山かく子

『先生、私共は此婦人が姦淫してる所を捕へて來ましたが、モーセの敎へ通り石で打殺しても差支ないものでせうか……』と、四五人の紳士らは年頃廿四五位の美しい婦人を、公衆の前て道路の眞中へ起立させて、說敎最中のエス君へこんな質問を持ち出した。

すると、五六十名の聽衆はどや〳〵と三四歩退いて其一組を遠巻きにする。先生は急に口を閉ぢて身を屈めて拾ひ取つた棒切れて何か樂書きをなさる樣子である。

髪を亂した哀れな婦人は細帶一本〆た儘て、衆人環視の中に打伏いて日に照られて、どんな宣告を受けるやらとびく〳〵して、見れば涙は容捨なく膝の上に流れてゐる。紳士も弟子らも聽衆も、一寸から手持無汰汰の鹽梅である。鴿が五六羽宮殿の方へ飛んだ。

『どうしたんだい』『先生は何してるんだい』『あゝあ奴泣いてやがる』『だが別嬪でねえか色は白いし』『なにいやがるんだ……』『反對黨が喧嘩仕掛けの難問に來たんだと……』『あたりまへよ殺せッて云へば國家法律を無視する罪になるし闘うなと云へば神樣の敎を守らねえで事になるんだから雨天秤てつらえ所よ』などゝ後の方でさゝやく聲がする。參詣の人々は立止る『先生、どうすればいゝんですか……』紳士の一人は自烈た相に返事の催促をする。宮殿の方では燔祭の煙が盛んにたッてゐる。公衆の眼は齊しくエス君に注いだ。

柔和な神々しい御顏をつとあげて起ち給ふと、御聲もさわやかに『罪のないお方が先お打ちなさい』から申して又身を屈めてしまッた。俯仰天地に耻ぢぬ義人は一人も居なかつたと見えて、いつの間にか皆こそこそと姿を隱して婦人のみ一人寂しく立つてゐた。

『訴人はどうした』『誰もおりません』『私も裁判はない、もう惡い事をしなさるなョ』婦人は感謝の涙を……。

（評）好敎訓。

佐々木信綱先生選

和歌

天 常陸 清子

張板の更紗の形の紅萩に
羽弱き秋の蝶止りけり

（評）着想めづらしくしかも女らしき歌。

地 伊豫 あさ子

江の南まばらに見ゆる賤が家の
燈淡き宵月夜かな

（評）畫のやうなるけしき。

人 岩代國伊達郡小手川村川原 岸野常子

亡き母と語りし夜半の夢さめて
芭蕉に寒き雨の音きく

（評）可憐なる作者の人がらもしのばれて。

秀逸

埼玉 ひとつ星

貢馬ひきつゝ上る東路や
鈴鹿の山に秋たけぬらし

岐阜 泉たつの

けだものゝ足跡見ゆる霜の上に
三日月ほそき山の下みち

静岡 石神喜恵子

うなだるゝ粟の穂わけて畑中の
師のいほり訪ふ秋の夕ぐれ

小石川 吉田斐子

たゝずめる我が黒髪をそと撫でゝ
葦にかくれぬ秋の夕風

美濃 傍島敏子

平和ぎの風に花咲く百合畑け
歌思ひをれば朝の鐘なる

愛知 浪子女史

ひな唄は森の彼方に今絶えて
芒が原に月は昇りぬ

千葉 林葭江

月更けぬ今はと戸ざす柴の扉に

夜霧ぞ香る白菊の花
柳河　きよ子

○手をふれてさて罪の子にたゆたひぬ
あまりに清き白蓮の花
讃岐　賤ヶ舍女史

○夕暮を笛にそれたる小羊の
殘る牧場に秋雨のふる
秋田　黑丸富子

○ちらほらと里の子ちりて飴賣の
笛の音淋し春のひなみち
上毛　五十貝須江子

○菊活けてよき日を祝ふ朝の窓
君の壽なりぬ我が歌なりぬ
横山岸月子

○三とせ今日家出せし兄の文つきて
老たる母とかたる夜半かな
秋田　比良多けい子

○おばしまに衣手寒き秋の宵
白菊姫が戀みだれぬる
阿波　仁木花汀

○またゝきの星は淡けれど大海は
まださめやらで眠むるあしたや

○み手取りて語りしそれも一時よ
秋風さむし白萩の道
廣島　恒子

○白萩の野の宵月夜さまよひて
都の姉を思ひやるかな
名古屋　原田琴子

○尾花咲く港入江の秋雨に破れ小傘の人一人見る　堺市　鷲見壽惠子

○病める母の枕に匂ふ菊の香は進むるほかの藥なりけり　姫路　矢島芳子

○ふるさとの母と語りしゆめさめて一人ながむる有明の月　明石　藤谷市子

○朝ぼらけ紅浴きたれば加茂川原小石を走る鶺鴒のこゑ　堺市　竹安文子

○森に鳴く狐の影のほの見えて月影淒き森の下道　上總　小川ふみ子

○三とせ前泣きつ泣かれつ別れたる時しのばるゝ朧月夜かな　南多摩　金子信子

○白桃の蔭に泣きしと夢さめて我世美し紅の花　長野　山田くに子

○猿の聲にねさめて窓押せば落葉に寒し片破の月　伊豆　加藤爲子

○君と我と二人のこして月は入るぬ小夜風さむき濱の松原　船津　萬機月女史

○褪せ安き色とも知らで手折りにし香恨めしき花菫かな　大阪　島田ひろ子

○紅葉ばの散りて流るゝ川水にかへらぬ秋の行方問はゞや　下總　原さく子

○　備中　大山婆子

其むかし君とかたりしまるまどにその夜ににたる月を見るかな

○　下谷　菅谷米子

たちこちの本の間がくれに家見えて鶏のこゑする山中の村

○　上毛　磯貝すゑ子

思出ての詩集いだきて只ひとり芭蕉の窓にひろの月みる

○　和泉　涙江子

佛壇の燈の燈火またゝきて小雨の庭を秋澪雲散る

○　鹿児島　前野さだ子

たらちねの手植の撫子の花さきて一しほつらしいたつきの身は

○　徳島　住友登喜子

またのびし我黒髪をいかにせん母が涙のおとし思へば

○　大阪　伊藤あさ子

秋の夜や尾花が穂月さえて外山に鳴くよ萩の花妻

○　越前　野坂まさ子

夜な／＼に旅の枕はかはれども夢路は同じ故郷にして

○　美濃　傍島みゆき

貸家の札の斜目に朧月さして虫なく秋の宿かな

○　府下　登代子

聞えつゝせめて君をばたよらんと宿を出づれば風の冷たき

○　岩手　太田菊江

あはれさを蟲にかたればやがて又鳴く音に月も曇ると見ゆ

○　神戸　紫雲女史

隔つとも同じ雲井に澄む月を君はいづこにながめますらん

○　上總　山田沖子



夜なが　（選外）　大阪　佐文子

木がらしに鳥の夢路も寒からむ魂呼びもどせあけ方の鐘

○　本所　田中久子

村まつり風に太鼓の音きえてともしばかりに山そうぞきぬ

○　高知　森岡顯子

風寒き古城のあたり月落ちて鐵蹄高く駒の嘶く

○　愛知　渡邊涙子

さやかにも夕月のぼる山の端にはなれがらすの一羽とぶ見ゆ

○　北海道　山崎入靈

銀杏ちるや秋の宮居の舞姫の御手すべりし扇の橡に

○　岩代　河野よし子

武蔵野はことつてましの人ありと知らずや仇に渡るかりがね

○　大坂　儀子

幾度か戀のみちは聞きつれどなほも戀しき浮世なるかな

○　大分　田原秀子

筆とれど歌にもならず夜はたけぬ人はたゝへぬ軒の松風

○　越前　正枝女史

路かどの石の佛のひざ近く一本匂ふ姫百合のはな

○　本郷　西岡古代子

夢と消えし榮華の跡をみかへりてかざせし袖に秋の風吹く

○　加賀　美津惠

龍が住むと言ひ傳へたる池の面は白波立ちぬ星月の宵

○　本所　鈴木はる子

夢の間にいつしか秋や過ぎぬらん枯野に白く置ける初霜

○　千葉　寺田新子

物思ふ夜毎に細る虫の音に病む身のいとゞ涙ぐまれつ

○　雄子

うぶすなの路に迷へるあはれ身はいづくに行きて母にまみえん
○　仙臺　佐藤もと子
わが庭の垣根さびしくみだれふす萩に背せて秋雨のふる
○　福岡　小山はつ子
秋風の君が身に吹くかなしとや又もや春の花をとはゞや
○　岡山　吉井白梅
亡き母はいづこの空か白露の行方眺むる身こそ悲しき
○　浦和　關口つま
ねさめしてうしと吾思ふ長き夜に哀れをそへて鹿ぞなくなる
○　南多摩　金子楓陰子
こほろぎの鳴く音あまりに妙なるに小琴つゝむ手たゆたひしかな
○　本郷　丸田郁子
今朝もまたさを鹿鳴きて霜ふりん小庭の紅葉色まさりゆく
○　信濃　松志子
父ならばあれ瀬んに母まさばこれもたらむに他人よ戀しき
○　靜岡　石原楽浪子
秋たちて桐の一葉の風なきに地に泣く音のあはれなりけり
○　岩代　河野よし子
世はなへて寂しげくやなりぬらむけさかりがねの聲ぞきこゆる
○　三河　つばめ女史
萩の寺訪ふに露けきあさあけを妹によう似し小さき尼よ
○　靜岡　秋月
あはれ世の花咲く春をまたずしてつぼみに散りし君ぞ戀しき
○　越中　北本歌子
秋寒き夕日の丘に杖立てゝ野末はる〴〵霧の海見る
○　備中　山本登茂子
涙ぐみて別ちし袖の忍ばれて眺むる空に雁ぞ啼くなる
○　能登　つる子
忘れはてし道や問はんと近よれば稲田を守る案山子なりけり
○　渡邊棠川
草も木もうつろふ秋を押し込めて戀しさ見せぬ野邊の夕露
○　愛知　俊子女史
霜さむき市の夕を熊負ひて酒飲みに來る白老愛女
○　播磨　酒見村子
十五夜の月に雁がね渡りては戀に泣く人歌に笑む人
○　上總　小川みどり子
いつしかも背山の紅葉散りはてゝしぐるゝ雨に冬立たんとす
○　府下　鵜澤藍女
羊追ふ牧童の笛に日は暮れて夕霧深かき木曾の初旅
○　本郷　久子
高野山親子地藏に口あれど子弟と名乗るばかりなりけり
○　赤坂　森英子
小夜ふけて比良のねおろし物凄くかたむく月に千鳥なくなり
○　上總　すみれ草
一人よるとぼその袖につゆおきて月すみわたる雁がねのこゑ
○　澁谷　雅芳
夜もすがらこゑもはあれになく虫のにたりやにたり今のわか身に
○　山梨　一倉眞砂子
君が家の垣高けれど君が彈く琴の音匂ふ木犀の花
○　陸中　若生すみれ
牡丹なく此の山里の賤が家に菊黄白菊咲き匂ひけり
○　羽後　伊藤幻子
山々は花より紅かき紅葉なれど花の香なきぞ恨みなりける
○　本郷　月越たき子
武藏野の尾花が末に秋見えてちぎれし雲のひくゝ飛び行く
○　信濃　山浦楓月子
月影の光うすれて東雲のは山の雲に鳴くほとゝぎす
○　牛込　佐川すみれ
心にも庭の蓬生移ろひて忍ぶ思ひもよわる虫の音
○　岩代　三浦たい子
伽藍荒れて萩淋しく咲く夏を鬼蝶訪ひぬ夕暮にして
○　伊勢　村山里子

御墓に捧げまつると少女子の野路に折りたる菊の一本
○　陸前　尾形千代子
病みませる御手とりまをし小春日の野になぐさむる姫君痩せぬ
○　滋賀　川島嶺子
一幅の錦の雲に日は落ちて夢ひく宵に友尋ねくる
○　越后　松山けん子
いく度か日傘の中をのぞきけむ戀せし人に面似し僧の
○　牛込　阿部絹子
ともし火の光りも寒くなる頃は夢も千里に通はざりけり
○　山口　河津才子
はげしさの夕立降りて夏さりて桐の一葉の音ぞ身にしむ
○　福井　大關ひさを
別るゝは兼て覺悟と思ひしにむねをつらぬく今朝の汽笛ぞ
○　栃木　大久保はぎ子
くれなゐの紅葉影流す汀に歩兵中尉の姿見えし
○　越後　春野すみれ
亡き妹が御墓のわきのかれ尾花ふく風寒くすゞ虫なきて
○　秋田　伊藤澤子
曾我の五郎十郎語る秋の夜を雁なき過ぎぬもの悲しげに
○　長谷川　英尾
やうやくに世のあら海に出しかど楫かひもつ手のさてもあやふき
○　陸奥　目時はま子
草の上におく白露か照る月のめぐみをあびて玉をかざれる
○　酒田　菊池りう子
おぼろ夜や白百合千里の天國に白衣の天女いと淡く見ぬ
○　山形　阿部さゐ子
千代こめし竹のまがきに君が代の根さしかためて匂ふ白菊
○　横濱　清水千秋子
天の原開けし空をながむれば今宵うれしき十五夜の月
○　麹町　淺井千鳥子
夕雲のはやきを見ては泣かれつる君憂きことを胸にひそめて
○　神戸　木田しげ子
三五夜の月影涼しいほの窓にうつれる竹に風も見えつゝ
○　京都　むらさき
雅樂の御宴のむしろ更闌けてきくの香たかくなりまさりゆく
○　麹町　山下里子
夕昏のかすれて消ゆる川添にはぐれし友をよびにけるかな
○　上野　眞佐子女史
立初むる秋のあしたの初風にたえ〳〵ひゞく峯の白雲
○　京都　橋本みつゑ
秋風はつたへぬ遠きふるさとの丘に登りて君は泣けりと
○　東京　中島鮭子
はなれ島金掘る槌の人と世を呪ふ響に秋暮れんとす
○　志摩　小林緻江
旅僧の一人舟待つ渡場の柳は枯れて秋風寒むき
○　上毛　羽鳥綾子
月高う妻戸に寒き朝風や霧の香せまる秋のいほかな
○　日本橋　渡邊秋子
母やみぬ藥もとめて歸る路のはや黄昏て秋雨ぞふる
○　信濃　成澤とき子
放ちやりし鳩は歸らで行く秋の窓に淋しく暮れの鐘きく
○　兵庫　大谷さが子
朝の霧暮まで閉鎖せ秋の野を斷ちては落つる木の葉と見ずや
○　大坂　大坂ひろ子
夢なりきあゝ夢なりき花蔭に戀しき君とかたると見しは
○　仙臺　明女
流れ來る小川に浮ぶ花よめないづちとゝはゝ如何答へむ
○　秋田　錦織つる子
浮雲のもろ〳〵と出てゝ月を發く我手届かば拂はんものを
○　伊綠　曉子

霜枯れの秋野の菊も幸なれや佳節の御堂に菊の香みつる

○　讃岐　林靜子

花やはな花めしませとしづが女のつゝりの袖も香に匂ひつゝ

○　仙臺　夢袋女

青葉若葉夕日てりそふ下蔭やほとゝぎす鳴櫻井の里

○　本郷　近野小枝子

白萩の花散るあたり母君は夢永久に眠ますらむ

○　本郷　すみれ

友垣のすがたは夢に見ゆれども言寄す事の出來ぬかなしさ

○　大阪　山崎京子

發卒へて證書を手にしてかへり行けばわれを迎ひのポチの見める

○　波島　工藤伊津子

露重き黄菊に眠むる秋蝶の夢おどろかす曉の鐘

○　本郷　田中常子

おなしくば君がよります文机に散りなば幸よと宿の白菊

○　茨城　前原こと子

おく霜に小菊も枯れぬ病むはゝに何を手折りてけさを見せばや

○　淺草　吉村雨紘子

月みれば昔なつかしうたよみてともに詠めし人やいかにと

○　淺草　翠花女

なやみある胸を抱きて欄干に思出おほき秋の月みる

○　伊勢　蘆の舍女史

五月雨に栗の花ちるたそがれを人なつかしき山の庵哉

○　博多　雪子

罪なくてけがれしものゝ名をおひぬ人のれたみの恐ろしきかな

○　伊豆　西堀榮子

花すゝき野分にふして立つ秋の姿もみえずむさし野の原

○　近江　武村琴音子

ものゝふの盡す心の眞とこそあまれく照らすみいゝづうの空

○　下谷　太田樂子

七十丈瀧にまぎるゝ岩つばめ華嚴大瀧虹たちわたる

○　埼玉　小林園子

一行の雁金すぎて眞帆片帆夕日はながく海しづかなり

○　岡山　三村す美子

京へのぼる君を送りて病める身のとぼ／＼歸る尾花野の路

○　兵庫　とし子

友禪の袖とほあまり水汀にたちてきりのあなたに千鳥きくなり

○　紀伊　室谷保子

冬の間はいたづらなりし水車今日夏川を絶えずめぐれる

○　丹波　衆津子

愛て　ふ白百合今日に開きぬと書きて送りぬ京なる姉へ

○　大坂　岡崎數枝

いざき　せ月とむしとに身をまかせ秋のなが夜をかたりあかさむ

○　廣島　吉崎白蓮

ゆきませ　ゝの君しのぶよもすがら枕べちかく虫ぞなくなる

○　筑後　野口みどり子

日は入りぬ月は登りぬ秋立ちて夜風身にしむ異城の夕

○　讃岐　東原玉翠

天さかる鄙の住居は中々に都にまさる心地こそすれ

○　常陸　中西よし子

奥津城に去年を偲びて一人泣く手向の花に風のさゝやき

○　上野　宮田のぶ子

浦の宿若布が背き香に明けて高臨り潮の戸をめぐりゆく

○　長崎　栗田すが子

ゆふ風に袂まかせて眞砂路に小貝ひろひます君うつくしき

○　備後　入千代

鳥なき月はかくれて影あはき紅萩の野にひとり泣くかな

○　群馬　こぼれはぎ

朝あけや露の垣根に今さめし化粧ながらの紅芙蓉かな

○　千葉　林よれ子

吹き誘ふ風に亂れて落栗の音もさびしき秋の山里

○　明石　孤園

つよういひて別れし母を慕しみ幾夜か泣きし白萩の窓
○　安房　木村ひて子
紅葉散く嵯峨野の奥の鹿の音をきくも淋しき秋の暮かな
安藝　和田昌子
白萩にやどれる夜露踏みわけて里まで藥とりにゆくかな
○　博多　白百合子
愚かよと笑はゞわらへ我はたゞかくてすぐさん君が名秘めつ
○　群馬　横田よれ子
なつかしき君の手をへし其歌を一人誦して夕雲を見る
○　新田　柳舎女史
なきて共に調べあはせしこのうたをわれはいくたびくりかへしけむ
○　滋賀　宇野民子
母逝て秋は來れど父まさぬ今宵墓場に一人月見る
○　高槻　赤松春雨子
暮れて行く秋の山べの旅人は何れを宿と定めかれつゝ
○　福岡　すぎ子
紅葉する片山里の友遠は妻こふ鹿とほとゝぎすの聲
○　羽前　竹田せん
小よふけて草葉にやどる露よりも己が秋の露ぞしげゝれ
○　備中　倉田征舟子
いさめ言に悟りぬ悔いぬわが不孝ゆいて詫びなん母のみ前に
○　東京　ときこ子
母君の棺の前に打伏してわれも共にと妹のなく
○　德島　齋藤菊子
萩の葉におとなふ秋の夕風は人に知らるゝはじめなりけり
○　埼玉　ひとつ星
おぼろ夜や尾の上のはなの散り來るに雲がくれせし人をしぞ思ふ
○　常陸　直子
雨過ぎて後より晴るゝ天の原空高々く胡蝶舞くる
○　京都　千田晶葩女
妹と歌詠みかはす春の宵紅き灯を蝶慕ひ來て
○　大阪　金森よしゑ
ふみにうみて窓押しひらき月見れば何處を飛ぶかかりの一聲
○　安房　孤足靜子
あゝ戀ひし雲ゆく方はなさけこき母いまさるゝ故郷の空
○　福岡　桑栞枝子
百入十と花はさけども白菊の花にまさりてよき花はあらじ
○　秋田　伊藤瑠子
歌乃は枯れし蓮葉の風に止んで君が閑居を月の照しぬ
○　操子
さえ／＼し月をみつめて物おもふ知るやしらずや蛙とびこむ
○　麴町　八代美代子
なんとなく涙ぐまれて故郷のたらちね思ふ秋のたそがれ
○　埼玉　百子
あし引の山より踊る若駒のそびらに匂ふ緋桃一枝
○　茨城　青柳愛子
荒磯の松原一里黄昏て蜑の伏屋に夕煙立つ
○　伊豆　遠藤智惠子
夕姫のゆたにたゆたふにぶの海潮にたゞよひて椰子の實れむる
○　下總　若松登利子
草むらは秋姫假りの御宮よ虫の樂して月影宿す
○　上毛　無名女
われも人石木にあらぬ心にはあつき涙も血もあるものを
○　青森　花瀨穀子
野の花は名を求めざる姫のごと殿のかりくら一日を默す
○　芝　大木あつ子
湖の波おだやかに風すきて藍赤雲の宿り行く見ゆ
○　横濱　折部色子
あな嬉れし親しき友の働ける布哇のモロの島見えにけり
○　紀伊　田中登惠子
秋風に吹かれふかれて蝶消えて芒に昇る武藏野の月
○　横濱　波南子

和歌

草生えてテニスの原や去年の秋やけし我家の跡にてありし
○　北總　涙の舎眞砂女
竹山に百舌鳥の一聲高くして秋そと吹く朝風寒むき
○　呉　進藤吟月
奥津城に母を葬ふてわれ一人折りしも血に啼く杜鵑の聲
○　安藝　みどり子
都なる我子に着せんと針とれば時雨そほふる秋の夜半かな
○　近江　辰井ふみ子
君が魂乘りて來ますのみさとしかみ慕はらへば虹あらはれぬ
○　宮城　武杳雪子
かくれたる月は雲間に照り初めて虫の音つゞく白萩の下
○　紀伊　三宅靜女
白萩の枝もたわゝに咲きにけりつよくな吹きぞ秋の夕風
○　霜月女
五十年たゞ夢と見てこの夕べあはれ身にしむ虫のこゑかな
○　大阪　金森よしゑ
さらでだに淋しき秋の夕まぐれ音もしづかに小雨さへふる
○　茨城　椒上花畦子
大浦や眞帆に興やる海士の子が船唄聞くと鷗のむるゝ
○　常陸　酒葉貞子
大利根の水かさまして父は來ず暮れ行く空に思ひみだるゝ
○　德島　高田まさお子
窓照らす月に向ひて耻づるわれ拂ひもあへぬ文机の塵
○　神戸　百合子
海づらに寫ろ夕日の影消えて海士の百船淡くなりゆく
○　日向　吉原富子
今朝もまた隣娘が田かり歌水上一里こゑ響くなり
○　花月女史
なつかしき年ふる里をふりすてゝ旅路の今宵君を夢見る
○　高山あい子
看護婦は三度巡りて日は暮れてともしび寒し病院のまど

○　飛驒　松野みどり
みだれ咲く萩の細路ふみわけてたどる少女の姿やさしも
○　岐阜　泉あや子
都なる背子をおもひて衣縫ふを更けしか蟲の近うなりくる
○　ひさ子
暫し降りし雨に芭蕉は色増して障子を青く染むろ涼しさ
○　宇都宮　柏崎喜久子
友垣は朝な夕なに戀れども咲きし桔梗に君思ふ哉
○　靜岡　柴田志間子
しろたへの雪かあらぬか庭の面草葉を照す月の冴けき
○　奈良　白雲子
秋の空いつはり多き世の中に神の愛てつる花か野の菊
○　神戸　たみ子
待ちわびし今宵の月は影暗しいづちの空に澄み渡るらん
○　常陸　後藤艶子
月冴えてあたりしづけき秋の夜にたがゆるしてか松虫ぞなく
○　安房　内代信子
碓氷なる峯の紅葉は今も尙行く人とむか關守にこそ
○　靜岡　羽根安子
友どちと學びの千草摘みにしに今日は淋しき賤が家に住む
○　鹿兒島　平山もと子
こよろきの磯うつ浪の音もして夕さみしく千鳥なくなり
○　千葉　林はぎ子
柚が家の朝けの烟見えそめて遠く消え行くさを鹿の聲
○　千葉　入木美惠子
八重蓮茂れる庭にたゞひとり聞もさびしき鈴虫の聲
○　伯耆　野菊
我膝に傷手なしのふ敎へ子のひそめし眉のいとほしきかな
○　福岡　三葉女史
夕立の晴れて涼しき我宿にピアノ響き來みな月の宵
○　京都　千島子

去年の秋互ひにめてし白菊のいまは手向の花となりぬる

○　美濃　市川覺子

この月もまたかきくもりふる雨に今年のみのり如何とぞ思ふ

○　東京　松岡定子

沈みてもかほりや高き楠の流れも清きみなと河原に

○　上毛　しら萩子

昔々桃が流れし里川に今は汽車橋架せられにけり

○　常陸　洒葉小花舟子

城跡の本丸あたり日は暮れて尾花が末にやどる月見ゆ

○　宇都宮　芳野靜子

つらき身を思ひに暮るこの夕へ萩の上葉に風渡るなり

○　紀伊　阪本春江

子守等がまゝごとすなる御社の廻廊長く日は畫にして

○　月兎

散りて又錦をかざるもみぢばはいかに榮あるさだめなるらん

○　姫路　船戸ゆき子

この秋はみのりゆたかに御與の民にもほきの歌ながらめや

○　四谷　野村那加子

秋の夜やこひしき思ひ堪へがたみ又取り出す君のうつしゑ

○　金澤　矢尾茂登子

打絶えて問ふ人もなきあれし家に時來にけりと傳ふ秋風

○　若狹　栖星蘋子

萩の花窓の硯にちりうきぬ戀の歌書く秋雨の夕

○　山口　田坂涙子

憂きの世の涙の涙にもまれつゝあはびの貝の片思して



風（選外）　神戸　伴利子

○　遠江　越川つや子

箏ひけば花のおぼろ路くる人の水給めきたる春の宵哉

○　名古屋　小山つき子

ふと見れば胸のいたでにそと觸れて散りし紅葉よときにくの謎

○　羽後　佐藤笑花

なつかしき君の玉章見るごとに夜なよなかん風のさむさに

○　大分　やま川

宵すだれそよぐまに〳〵雨ふりて萩の花散る九重の庭

○　駿河　みどり

みか月のほどよりまちし此宵ぞとかたりあかしぬもち月のそら

○　岩代　大竹さよ子

秋風もしのび〳〵に音づれて夕べ凉しき木がくれの宿

○　美作　性全紫女史

母逝きてはや我が家は秋更けぬつもる落葉に虫の音あはれ

○　山口　山中けい子

千町田の稲葉の露にかげ見えて流星一つ尾を長うひく

○　金澤　和田倫子

夕ざればなき明すなり時來ぬと草のいほりにこゝろながくも

○　山形　神尾ます子

日を追ひてけふも時雨のふるさとをおもひしほるゝ旅衣かな

○　若狹　津田瀧子

與謝の海舟の灯火一つ消え二つ消え失せて千鳥啼くなり

○　東京　京の女

憂きあらき波打ちよする度毎に都戀ひしき初の旅かな

和歌

赤坂　齋藤茂子

○落葉かく雛僧見えず玉垣に紅葉みだれて雨細うふる

靜岡　福井道子

○空高く鳥は塒に急ぐなり尾花が谿に夕日おちゆく

伊豆　上原靜枝子

○かるたとる君の勝ち聲吾も又兄の歸りを祝ふうれしさ

下谷　岡林さかゑ子

○石山の石をはこべる男の子等の背より湧きたつ雲の峯かな

新潟　まさ子

○夕べよりまだ降りやまぬ秋雨に殘らず散りぬ海棠の花

赤坂　露花女史

○河添の十月の漁村寂として夕風寒く蓼の花散る

下總　澈月子

○秋風よいたくな吹きそうらぶれをかくすばせをはさけもやすらん

徳島　藪内龜子

○春の夜は文よむ窓にそよ／＼と吹く風寒し川添の宿

神戸　伴利子

○須磨の浦月の笑顔の浪の上釣する海士の袖や涼しき

本郷　山媛

○庭暗きすゝきが原の古井はかしの葉厚く月宿りける

遠江　岡村双鴻

○秋雨や黄菊白萩うなだれて郊外淋しき秋の夕ぐれ

群馬　倉金白百合

○忘るべく忘られべきや何忘るこの身この世に存へるまは

播磨　高見雪子

○白萩が宿にすだける鈴虫の泣く音淋しき夕暮の空

八戸　名久井冴子

○木の間よりほのかに洩れて北嵯峨の白かべ見えて春まだ寒き

東京　とし子

○なつかしき君に送らむ歌かきてうつゝ心に蝶舞ひ入りぬ

千葉　八木美佐保子

○君ゐます都の空を眺めては牡鹿の戀も偲ばるゝ哉

肥前　賀美子

○海人とまでうらぶれし身に歌心なほも起るよ秋の夜の月

本所　三ツ森ふじ子

○秋風にあし葉そよぎて苫舟のともし火ゆらぐ夜の入江哉

尾張　井口登代子

○招きけむ尾花が袖もうらがれて月かげ寒くうづらなくなり

北海道　梶水仙

○きり／＼す鳴けば都の夕べだに淋しきものを秋の山里

成松　靜女

○秋の夜のながき思に月ふけてさむしろ露に夢はひえけり

豐後　安藤貞子

○瀧川清き流れを美人一人髪梳る今朝の秋風

艶子

○鹿やなく森はさ霧にかくろひて水にうするゝ石燈籠の灯影

秋田　松田せい子

○文にあきて萩咲く庭の彷徉や歌に筆とる星月夜かな

筑後　菊子

○秋淋し此山里にひとりねの枕に通ふ鈴虫の歌

横濱　屋戸花舟子

○駒にして勿來を越ゆる夕雨や木槿の花の御鎧にちる

陸中　大志目白羊

○露かれし庭にのこれる白菊はすぎ行く秋のかたみなるらむ

下總　川奈部たか子

○秋雨の夜の灯に亡き母のうつし繪見ては一人泣き居ぬ

備後　能美律子

○秋風はそよ／＼誘ふ黄昏にあはれ散りゆく合歡の花

飛驒　あやめ子

○十六夜の月はさやけく照り榮えて君と別れし宵をしぞ思ふ

陸中　木村敏子

○霧深き谷間の奧の岩かげに一人さびしく白百合の咲く

○　伯耆　泉田香子
高殿に姫が調べの樂たえて澄みゆく月に蟋蟀のなく
○　淺草　大沼きさ江
うつし世にまたかたらん時はあらじ思ひかへして思ひかへせど
○　山形　金内こう子
汲み得たる手桶の水に影落ちて月は柹の下にこそあれ
○　長崎　竹下かめ子
萩ちりて水うつくしき寺の池遊ぶ鯡鯉のかげ亂れ勝
○　肥前　廣瀨清子
露の玉蘭に碎くる曉を小虫のうたに辿る野の秋
○　播磨　秋水女
千草枯れ後に雄々しく白菊や咲きて香高し秋の野の原
○　大津　保津見死花
夕靄の染め忘れけん朱の門比叡の山もと香高きも
○　兵庫　柳田白ばら
住みなれし我が古里をあとにみて花の都にあこがるゝ君
○　向島　玉蕊女史
いざさらばともに散らなん白萩と今ひとたびの秋風をまつ
○　播磨　秋月
英雄を偲び尋れし戰場の尾花が末に秋風ぞ吹く
○　群馬　三輪よし子
秋空は變るものとは知りつれどほしたる傘の又ぬるゝとは
○　常陸　大和田清子
なんとなく一人淋しきこの夕遮れにわかれし雁一羽飛ぶ
○　越後　藤村三枝子
この頃の花は青葉となりにけりやがて紅葉に宿やおるらん
○　和歌山　津田久子
夕暮れの秋の山路只一人いとも淋しき鹿の聲する
○　群馬　吉村翠露子
大方の世のあはれさを占し身の秋におもし秋のはつ風
○　磐城　鈴木榮子
逝く秋や思ひにあまる悲しみを胸にきざみぬ夕暮の鐘
○　下谷　菅谷米子
賤が屋の破れし板戸のひまもりててる影さびし秋の夜の月
○　長崎　入重子
眞帆かけてこぎ行く波の靜けさにくだけてうつる秋の夜の月
○　神田　谷文子
燈籠は萩にうもれて夕風にともしほのめきこほろぎのなく
○　小石川　つる子
夕月に秋のひかりもみえそめぬともやまれかむ白萩のまど
○　上毛　金子落葉
亡き友の奥津城照す秋の夜の月なほ白く露なほおもし
○　備中　唐井治子
夕霧はあとなく晴れて萩の上にてるつき清しみやぎのゝ原
○　美作　よし子
有明の月まだ白き東雲の空を南にかりがれのとぶ
○　讃岐　香川榮女
黄ばむ葉まばらにしきて秋は來ぬ日影はあはく苔は伸びけり
○　神戸　廣澤花子
捨小舟みる目もあはれ破れはてゝうちは蝶の住家なりける
○　千葉　岩佐ひさ子
夕日影照り添ふ峯の紅葉は燃ゆる思ひの色に出てけり
○　讃岐　青葉女史
雨含む月ほのくらき川口に潮さしよどみ雁なき渡る
○　靜岡　三輪朝子
日は暮れて月はさえたり神さびしみ山の枯木にふくろうのなく
○　和歌山　津田梅子
物淋しお池の蓮の葉の上に蛙とまりて啼きつ夜は更く
○　三河　金田みつ子
精あらばからくれなゐにもえ出よと薔薇の下に歌屑うめぬ
○　和泉　白ばら女史
ま白にぞ霜をいたゞく白菊の背に弓張の月仰ぐかな

○　下總　櫻井定久子
利根川の楓のもみぢ散り〳〵にあはれ流るゝ秋の夕ぐれ
○　秋田　佐々木園子
文にのみ睦びかはしゝ友垣にせめて夢にもあひてみしがな
○　成田　渡邊かつ子
それとなき小山に登り眺むれば稲田の面は穂波うつなり
○　備中　大山ます子
此まゝを只このまゝに照さなん月の影さす白萩の窓
○　秋田　比良多女史
み墓なる香の煙の雲となりて君がみ靈をのせてみ空へ
○　備中　大山ゆかり
馬子ゆきて旅僧さりてたそがれて五けんひと村雨に暮れゆく
○　成田　野々宮園子
散る花をリボンに受けて佇める少女美くし春の夜の月
○　神田　太田照子
我が戀はかなはて咲きぬ木犀の小さき花に世や狭くせむ
○　千葉　白百合女史
草して來ませる道の淡雪をこよなう賞めておはす人かな
○　高槻　赤松春爾子
保津川の瀬瀬をくだす筏士はなげきの上に世をわたるらん
○　秋田　安藤きよへ
やり水にうかぶ木の葉の上に立ちおきは殘さぬ今朝の霜かな
○　相摸　池田政子
春は花秋は紅葉を流す哉吉野の川の水の白波
○　石見　青柳秀子
青潮に白帆あげたる秋晴の島を訪はゞ君に逢はんか
○　秋田　大橋華楯子
堂守の飯ひ炊く煙りたなびきて地藏の顔の霧にかくれつ
○　小田原　清水咲子
亡き母の形見に殘すすがたにも心ばかりはうつらざりけり
○　廣島　白すみれ
夜すがらの野わけの風のみちにたちてふけ行く秋の月を見るかな
○　羽後　前田比佐子
露にてる灯ゆらぐ萩の院三日月淡くこほろぎのなく
○　秋田　松田せい子
多徳島海女がくれ行く夕汀眞珠の話をあはれときゝぬ
○　柴田　優子
なつかしなゆかりも深き紫の色にくだくる露の玉はぎ
○　播磨　吉田翠子
野にいてゝ秋を繪にする君が過に一もと咲ける白萩の花
○　德島　藤谷あい子
夜はふけぬ人はかへりぬ月すみぬ露おきあまる草のいほりに
○　上毛　眞砂かつ子
うなだれて物思らし夕露にぬれつゝ咲ける野路の白菊
○　松山　孤蝶女
別莊にもの珍しく少女子は夕の背門に鳴子引きけり
○　佐賀　内田泣菫
山鳥のをろのかゞみもくもるらんかすみこめたり虹の松原
○　羽後　渡部宮子
中々に星の契のうらやまし逢瀬しられぬなかに比べて
○　上野　倉金渓山
夜な〳〵に亡きいとし見を夢に見て想ひになやみ枕うるほす
○　濱田　三明ちどり
つれづれに椽に立ち出て七彩の夢雲の行方ながめやる人
○　愛知　渡邊馨子
小法師の行く手に木枯の音絶えてふもとの寺に鐘なりひゞく
○　尾張　渡邊霞石子
萩小徑行くに露けき夕野路秋篠のなかを笛吹き過る
○　靜岡　稲垣いや子
はぎの露硯にあつめ書きて見むかぞへ盡せぬ秋のあはれを
○　芝　山本たる子
彩鳥の彩羽をかけて湖上にはしると見しか秋の夕雲

○　佐賀　錦城　窓峰子
うぐひすのはつ音きこゆる小松原今朝は霞のひきぞわたれる
○　埼玉　田島つれ子
河面にうつりし月を汲みとればかすかに聞ゆ雁の一聲
○　豊後　花野白川
青蘆の中に短艇見えずなりて白百合清き江の南かな
○　本郷　武石秀子
とつおいつ淡き理想の影戀ひぬ秋の夜更けしともしびの下
○　京都　堤登久子
東とも西とも分かずさまよひぬ秋は花なき嵯峨の野の奥
○　上野　伊婆夏芳子
うら若き悶えの柴に夜は更けぬ北嵯峨に鳴く鶺鴒のこゑ
○　本郷　齋藤茂子
花ちりて夕わびしき草宿の柴の折戸に旅の人訪ふ
○　飯田　嘉子
いづこより匿くともなしに夕來れば白露結ぶ草の葉の上
○　磐城　片寄しな子
露ながら折りて文よむ友とせん匂ひこぼるゝ庭の白菊
○　富山　比佐與日出子
鳴きかはし友よひつれて行く雁の聲きく時ぞものうかりける
○　群馬　關奥子
露ちぎれ易水さむう日は落ちて昔しのべばなほ夢むごと
○　播磨　房子
心なく鳴くらん虫もさがの奥秋のさびしさ人にぞつげぬ
○　茨城　中西芳子
きませ君過ぎんは惜しき月夜哉わかあづまやに歌かたりせむ
○　神奈川　中山かづ子
物このむ姿ならねど吾が家の子は數へてぞみまほしきかな
○　秋田　武田香子
山下りて一谷越えて火を焚けば峯の煙りに尾花散りけり
○　鹿兒島　竹中たみ子

夕ざれば旅舍の欄干身をよせて思ひ出て多き雲を見るかな
○　和歌山　露嶽
うつくしく分れをおしむ蝶小蝶羽末に春の風匂ふなか
○　兵庫　柳田白百合子
なく乳子をかゝへて秋の月によれば思出つらき雁の一聲
○　岐阜　泉翠房子
鳴つゞく道のながての蟲のねになり〳〵さはる秋の雨かな
○　大阪　呑海たまゑ
をしとりのかたみにつばさかはしつゝみきはあそぶ時ぞたのしき
○　長門　伊藤さくら子
鮮かに五色の雲は花に似て今し朝日は富士の頂
○　佐賀　松浦子
衣させと鳴く虫よりもうらぶれしを夜寒むいやます村雨のふる
○　下野　鈴木露子
朝月や落葉はきつゝ歌誦せば班鳩三羽鳴き追ひくる
○　小石川　山崎星虹
七草のいづれはあれど霜がれの冬まで匂ふなでしこの花
○　能登　森田みつ子
つく〳〵と思へばうれし敎へ子がやがて御國の礎となる
○　石川　白百合
吹く風も何となけれど身にしみてふるさと思ふあきの夕ぐれ
○　岡山　松子
時ならぬ吹雪せしかと見ゆるかな汀に咲ける白萩の花
○　本郷　齋藤茂子
香たきて姬歌おもふ小机やひと聲すぐる山ほとゝぎす
○　茨城　藤原こと江
冬の夜の松ふく風にみがゝれしかたわれ月にふくろうのなく
○　鹿兒島　貴島とみ子
永き夜を昔語らむ母もなく雨に消えゆく鐘の音きく
○　京都　綾子
たらちれのいたづき癒えずなりにけり癸種咲く日の鐘のひゞきに

○　北海道　飯田季蓉

菊畑いさゝ小川のさゞめきて花舟經く秋の風ふく

○　京橋　吉野つれ子

小夜ふけて軒端に白くてりそひし月にうたふやこほろぎのこゑ

○　德島　紫浪子

行きくれて一人たゝずむ峠路のひともと松に日ぐらしのなく

○　尾張　森郁子

さゞ波や磯山寺の鐘の音花藻に消えて月出てにけり

○　薩摩　樋口きよ子

晝の間は夏とばかりに思へどもすゝきのつゆに秋はみえけり

○　本所　根部女子

八千草の枯し花園に一本のにほひも高し殘菊の花

○　相模　井上たけ子

散り敷きし紅葉染めて歌かゝんかぎりしられぬ秋の恨を

○　横濱　江草すゑ子

寂びやにありしむかしの忍ばれていともなつかし十五夜の月

○　南品川　萬千田野里子

おぼつかなうつゞる綻うらの衣の上に散りぬこぼれぬ萩の白露

○　備中　知惠子

萩な見て露の小徑をわけ行けばあはれや鹿の夢やぶりけり

○　大阪　鎌田春枝

月出てゝ玉布く露の草むらにうづもれて鳴く虫の音あはれ

○　上野　柳つぎ子

夕榮や里家に霧ためてやがてぞくるゝ五月の村かな

○　愛知　熊谷つや子

櫻花ちりにしあとの嵐山またるゝものは紅葉なりけり

○　安房　錦織ちえ子

枯れて立つみぎはのあしの穗かげより群立つ小鳥聲の寒けさ

○　相模　とよ子

姨捨や荒野遠く横ぎりて吹雪をはらむ雲騷ぐなり

○　武藏　山口邦子

祖母君のみ肩たゝきて語る人の身の上に泣く山の湯の宿

○　福岡　細川しげ子

窓推せば庭に散りし菊の花輝としもなき初秋の空

○　三河　房枝子

咲きつめし蓮の花白き沼の中に狂女人呼ぶ朝月夜かな

○　岐阜　金森文子

井のはたの今朝咲出し菊の花良き香たはなて己が心の

○　下毛　小島蘭史

戰ぐ頃淋しと思ふ思川はるかに見ゆる輝し銀波

○　遠江　たゞの

一里半すゞ花なみをよせかへす風やあまりて山に入りぬる

○　越後　村山芳枝

木枯しのやみたる野邊に月冴えて古杉のあたり狼のなく

○　豐後　藤葉子

組みてし月影落ちて夜は暗く何をしるべに行かん浮身か

○　麹町　よし子

掬ぶ手にやさしくふくる山茶花のにほひながるゝ澗月の川

○　因幡　三橋春代

古き宮の銀杏も今は枯れ果てゝ三千石の忍ばるゝかな

○　豐前　龍子

枯萩の上風寒き秋の夜を雁が音さびし弓はりの月

○　土佐　野菊

さゝ川に散りてこぼれて紅萩のゆくへもちさう秋の雨ふる

○　福岡　山口定子

秋風は浪とやともにきたるらん衣手涼し袖のうらなみ

○　周防　西村しんじ

曉の谷間に暗く露しげく冷たき風に百合の香ゆらぐ

○　香川　東原妙々子

深草の露の月影さやかにも鈴虫の音のすめる夜半哉

○　茨城　綿引早子

夕雲に涙こぼるゝ故郷のひとりの母も泣かむ蟲の聲

久方の雲井はるかに秋のよの月すみ渡る玉しきの庭　○　香川　東原かほる

うたゝ寢の夢覺め果てし夕暮を煩悶の窓に秋雨細き　○　本所　小林千代子

君ゆきて愛になやむわが憂いよゝまさする夜半の虫かな　○　新潟　村山芳子

秋風になりなり影は動きけり池のみぎはの白菊の花　○　大阪　瀧子

門に立ちて惠み給へと幼子の乞ふ食寒し秋の夕暮　○　濱田眞砂子

山風の浮雲拂ふ高根よりさやかにいづる秋の夜の月　○　下總　篠坂秀嶺女

清よめんの命令かしこみ世におりて小萩に戀ふ秋の夜の露　○　攝津　和久藻子

何につけ似たる物見る度毎になれし古里いとど戀しき　○　福岡　長野敏子

奥の間に母の呼ぶ聲聞き付けて玩具を捨てゝ走る靜枝子　○　越中　林子

咲き殘る花こゝかしこ錦のごとき秋の大野の夕ぐれの道　○　上野　佐藤露子

ともすれば雲たち騷ぐ大空をひとりはなれて雁なき渡る　○　上毛　沼田少女

何となく涙ぐまるゝ夕暮れを萩の下枝に蟋蟀の鳴く　○　羽後　三浦芙蓉子

荒れし野の花にむすべる露の玉寂しく宿る秋の月かな　○　豐前　村田和子



夜の業（選外）　大阪　よし子

春は花夏は青葉と暮しつゝ又こん秋ぞ淋しかるらん　○　山形　菊地よし子

空高く鳴きつる雁の聲はして淋みしく秋も暮れて行く哉　○　高槻　赤松春雨子

君去りし夜や夢のごと現ごと幽けく聞こゆ磯の浪音　○　筑後　貞子

紫の富士を包める白雲を茜に染むる曙の神　○　信濃　春江子

なき母に手向けし菊のしほれしに今日來て見れば蝶の舞ひ居る　○　長野　内山けさ子

尼僧を道しるべして歸るさに月もこゝろも冴ゆる宵かな　○　鹿兒島　平山せい子

夜がらすのなく音さびしく三日月の影さへさむし川沿の道　○　鹿兒島　前名もり子

朝晴や花野を秋の氣は凝りて虫のこゑ搖る露草の風　○　津　松尾華子

綠こき背戸の青葉の下かげに清水湧くなり白銀色に　○　島根　須谷千賀子

なが文の今か今かと待つ程に聞くも嬉しき郵便の聲　○　秋田　東海林榮子

想ふたび戀をかたりし繁り葉のかげもあらゝに秋ぞ悲しき　○　小樽　飯田季呑子

さし昇る清き月影川沿の書齋を照す夕月夜かな　○　上總　岡澤りよ子

馬草に其花刈そ啼虫のいとゞ夜寒を侘やまさらん　○　土佐　矢野靜子

○五位の君の後に従がふ太刀持の顔白うして猫にふさひぬ　京都　大澤白的女

○破笠の比丘のそびらに夕日消えてをばなゆらめきからすもいそぐ　播磨　奥平こいゑ

○稲の醪朝酒のんで刈に出る父の草履のつめたかるらん　山口　須子如月

○金魚鉢の水うちかふる縁下りゐんじゆの風に蝉の涼しき　千葉　本間はな子

○月見ては君のみ思ふかなしさに夕ぐれ寒く秋風のふく　安房　渡邊かく子

○皆背きいはほの下に咲きいてぬ桔梗の花の拗りたるまゝ　上毛　霊磨子

○秋雨のやみて雲行く夕まぐれもれ出る月に響く鐘の音　備後　萩光いち子

○只一首心安まる歌もあれと歌集繙く白萩の窓　陸前　村田こと子

○菊咲きぬ庵のあるじ椽に出て人待ち顔に茶を入れられぬ　播磨　小林俊子

○落葉して淋しさまさる秋庭の枯れし芭蕉と夕日冷たき　小田原　秋葉女

○柿多き賤が伏家の秋めきて蕎乾す庭に飛ぶ蜻蛉かな　上野　なみ子

○草の上にかゝやく露の玉見えて虫の音消し秋の夜の月　安房　竹澤つる子

○幾度か迷の夢さめつゝも又迷ひ入る我こゝろかな　小樽　船津恒子

○馬かたの鄙歌遠く消えゆきし松原一里秋の雨ふる　能登　新保霞枝

○麥笛の歌おもしろう消えて行く野の末白し里の夕暮　島取　上山千重子

○見せばやな七草生ひて眺めよき金城閣の秋の夕くれ　京都　橋本八重子

○芭蕉ごし飛の山の遠く見えて磨野の如し日は今沈む　豊前　つるゑ子

○霧こる少女子二人行きすぎぬ百舌なく野邊に唄殘しつゝ　大和　中富よしみ

○暮れぬれば又も春立つ音いほに庭の紅梅笑初むる哉　越後　細野花子

○郵便と呼ぶ聲おそしと出て見れば待ちに待ちたる女子文壇　豊後　都月女史

○稲こきの霧にかくれし時雨やみて眞紅の空に夕日消えゆく　播磨　女郎花

○秋の露こぼれて落る庭の面は虫の音細し曉の鐘　薩摩　白菊子

○妻に別れ子にわかれりと聞きし人の砧の音に秋の夜更けぬ　岩代　根本松江

○稲こきの籾に含む露ふりこぼす東雲空に鳥なくなり　山口　川邉巖子

○雁がれの鳴きつるたびに便まつあはれこひしきふるさとの空　富山　高野秀子

○朝がほの夏は垣根に枯れはてゝかしことよめる上に月すむ　手賀沼　和香子女史

○逝れは皆紅葉の山の詩集なりつどい歸らん遠寺鐘なる　茨城　川中すけ子

○つくづくと思ひくらして入相の鐘を聞くにも君ぞ戀しき　安房　代子女史

○まだ淺きもみぢの色をかこちけりぬひし小袖のしつけとりつゝ　千葉　高濱桂園

○戀かしき君が御姿見送れる髪のほつれを秋風の吹く　越後　桑野とし子

○月あれど光り及ばぬ冥途を竹の杖して一人ゆく身は　上野　楓子

文學士 沼波瓊音先生選

抒情文

特別第一等

○疑惑

（某燈臺守にかはりて）

静岡縣藤枝町 紅薔薇女

枕に馴れた荒浪の音の、今宵は妙に胸を刳いて怪しくも寝つかれぬまゝ、ひとり靜かに臥床を離れて幾丈の階段を攀ぢ、絶頂に登つて熟と浪くらく潮吼ゆる海面を見下ろした。

宵に點じたわが廻轉燈は、その强き火光を忠實に精勵に咆哮する怒濤の上に投げて、水に岩に、頻にま白き環を畫きつゝある。

あゝこの、不斷の音と光りとを以て、よすがらを閲しつゝある浪よ、燈火よ、心あらばその藏する神秘をひらいて、わが爲に、再昨夜の椿事の眞相を語れ。

溺れたはわが過去の許嫁なる橘まどか子、ところは此火光の夜々親しみつゝある指呼の沖、いかで此海波、此燈火の、將知らぬ事があらう、あゝされど…………。

思へば其夜我心は如何に躍つたらう、儚なき運命の神に捕へられずば、吾は疾くにあの島田髷を我物と眺めて、身には輝く學士の冠、榮ある活社會にもてはやされうものを、一たび恐ろしい魔の手に弄せられてより身はあるに甲斐なき巖角の燈臺守、遠からず冷ゆる血汐の軀を移して、こゝに二歳うらぶれの我眼に、許し合つて、裂かれて、思ひは長き彼女が、愈隣村の某家へ輿入れの夕べと、縫摸樣美くしい振袖姿を舟べりに持たせて、優々と漕がせ行くさまの、此窓より見下ろす瞳に映つた時、總身の血汐は一時に沸き立て、人も世も粉碎し盡さんず思つたが……。

越えて翌朝、不思議!!! あの堅牢なる小舟が手たれの六藏に操られて、僅か數里と離れぬ白羽ゆきに、辨天岩の手前で難破して、嫁御はもとより舟子も船も見當らぬと云ふ騷ぎを耳にした時のまたわが驚き!。

思へば何故に彼女はたゞ一人舟路をのぞんで、迎への人々や荷物とはなれたらう、操術にかけては村中比ぶものはないが、偏目で、侏儒で、世にも推出しの醜い彼六藏を、何故に圓子はぬきんでゝ、晴々しい此日の供とはしたのだらう、殊に案内知つたる内海の航路、いざと云へば五里も泳ぐ海濱育ち、二人ともやみ／＼魚腹に葬られ果つべき謂れなし、如何に宵暗の水暗う風吹き出てたればとて……。もしや、もしや……思ひ合はすれば一團の疑雲むら／＼と湧いて、身を掻きむ

しらるゝやうな心地がする。

かねて彼れ愚直者の六藏は、烈しくわがこの現在に全情をよせて、人知れず屡、其後の圓子の煩悶を、我耳に囁いた男ではないか、その六藏を撰んで、好む舟路とは云ひながら夜陰の獨行。ふつてわいた難破は、恐らくはまどか子が、好んでさせたのではあるまいか、切なる主の望みに不調法の責を一身に荷つて、哀れなる忠僕の、身を捨てゝあるじの操を守らしたのではあるまいか？、思うて此處に至れば、われは腸のちぎるゝ心地がする。

熱涙わき出づる双眼を瞠つて、閉ぢて、何らかの「謎」を表示する如き波の音、燈の光りに、見入り、耳傾くれど、薄倖の人の子、永久に釋くよしもない、止みなん、たゞ吾は靜かに終生を此燈臺守にさゝげて、夜々手づから白光を點じ、海を透してかの女、かの舟子が床しき温容をしのばう、かくて季滿ちて愈佛のみ手に救ひ上げらるゝ時が來たならば、千尋の底にしもありときく玉の宮居にみたり集うて、樂しくこの疑惑を解かう。

（評）圓子は情に命を捧げ六藏は主に命を捧げたり、あゝこの二人をして命を捧げしめたる我れ燈臺守は依然死なずして波涙を友にす、長き恨や、

抒情第三賞

○あか星

天鹽國増毛町　天の舍

獨此の世に我を殘して遠く星のみ國に母君の去られた我が六歳の春の夕！。我は人皆の泣き喚く席に居たへて獨り欄干にもたれ、靜に暮行く野山を眺めつゝ、切ない樣な悲しい樣なぼんやりとした思に耽る時、疎な庭樹の間から、産土の森の彼方に淡く光つて居る星を見とめた。そして稍オレンジ色を含んでゐる薄い乳色にぼかした淡い明い藍色の空に相應しい彼のみ星の優しい光は、唯何となく懷かしく、見れば見るほど深い温い情のほのめいて、我が瞳子に何物か我に傳へんとするかのやう、此の時我は誰から聞いたともなく、彼のみ星は我が母君のみ魂であらうことを心に深く思ひ定めた。

それから我は毎夕此の欄干に凭つて此のみ星を見ることを、何よりの樂にして居た。そして常に斯う思つてゐた。お花見にも、お彼岸の寺參にも、をばさんの處へ行くにも何時も私を可愛がつて一緒に連れて行つて下すつたのに、何故に今度は獨り隱れて行かれたであらう。私も若しお藥を貰て呑だならば一緒に連れて行

つて下すつたのであらうか。若しそれとせばなぜ呑めといつて下さらなかつたのであらう。あれほど親切なお母さんが！。苦しい痛いと仰しやつたがそれがためか。お母さんの爲なら苦しいのも辛いのも厭はなかつたのに！。併し今ではお母さんもきつと悔んで居らつしやるに違ひない。それで私が遊から歸つた頃に毎夕逢においでなのであらう、はやく成人くなつてせめてはあの薄紫の山に行つて見たい。よし抱て頂く譯にはいかなくとも。何時もの優しいほんの笑顔……幻ではなく……も見ることができるであらうと。」その後私は學校に行つて、彼の星は一の塊土であることを知り、母君は已に冷い土になつたことを思うた時小さき希望は夢の如く醒め、天地に向て思のよせ處なく、ゐても立ても居られずよゝとばかり泣き伏した。此時私は始めて眞に母を失つたのである。

（評）憎むべき科學よ汝は何が爲にこの憐れなる子の幻象を破壊せしぞ、末段に至つて余は實に歔泣せり。



茶の間（選外）　越後　瀧澤　みつ子

（天）

○面影

長府　高田　沖子

實にや捨てたまふ神のあれば、救ひたまふ神もある世の中、妾は一昨日より此の家の主人に助けられて、再び厚き情に浴する身とはなりぬ。

今、食膳も下げ、洗も終りたれば冬の夜の事とてなす事もなきまゝあまりに雑巾の破れ居れば、新しきをも縫はやと、薄暗き掛ランプの光を力に、針走らす時、今宵はあまりに寒ければ事止めて、寫眞等あまたあれば見よ、との御主人樣の御仰、木枯强く戸を打ちて森の梢のピユーと悲凄の音たてゝ、何んとなく物淋しき此夜、五十路を越えさせたまへる御主人樣と、お若きお孃樣と只二人、まして女人の事とて、さぞお寂くあらせ給らん、御心も慰めばやと、妾は針止めて、席にはべりぬ。

寒ければ此處へ、とて御主人樣のお言葉に、おさかし

きお嬢様の、火鉢差出したまふ有難さ、幼き時より繼母の苦めのために、かれつくせる妾が涙の泉は、あやしうも流れ始めぬ。

山なすばかりに積まれたる寫眞、これは宮島の景色、これは岡山の後樂園、これは舞子の明石のと、幾組の寫眞は、紅葉に似たるお嬢様の御手によつて列べられ小さき御口より敎へ聞さるゝに皆目新しからざるはなし、中にも一層大きく寫されたる人物の御寫眞を、つくづくと眺めさせたまひて「東京にいます吾が父上母上よ」とて懷かしげに頬笑まれて、妾に渡したまふ。あはれ彼の地にまします御兩親を、如何に懷かしく眺めさせたまひつらん、遙々遠き此の山里に、お祖母樣お相手のお住、如何に父母戀はせ給ふらん。然れど然れど、必ず歎かせたまひそ、君が垂乳はまします者を君の父君は君が成人を早かれと樂しく待ちわび給ふをあゝ幸なき者は吾が身かな、父は恐しき罪を犯して今猶ほ獄に、母は妾が六ツの夏死して顏だに覺えず、せめて母上がうつしゑのありせば、いかばかり繼母にせめられんも、妾が心猶慰め得可けんに。妾はまたしても身の不運を歎きて、思はず涙こぼしぬ御姿の上に、まあ如何せん此の失禮、赦させたまへと謝び事すれば、妾が身の上知ります御主人樣は、好いよとて頷かせまふ其の御目に、あやしき露は光りぬ。おゝ妾はいまなほ幸ある者哉。

（評）引締りておとなしき筆つきそゞろに作者の人のなりを想はしむ「いまなほ幸ある者哉」の句の意味の長きよ。

地

○短きちぎり

三河國北設樂郡振草村大字神田　金田みつ子

ちぎれ〱の雲迷ふ、美はしき靜づけき夕の空を立ち出でゝ、八千草に置き渡せる白露に、己が優しき愛の光を映さばやとて、み空の星は、淡紫に彩色せられし夜の帷をひそやかにかかげて、遙か下界の小野原を打ち見下ろしぬ、短かく刈られたる八千草の上、置きたりな珊々たる白露、清淨なる天の神の造られたる水晶の如くに。

み空の星はあな嬉しやと笑ひつゝ、麗はしき姿を半ば出し、言葉やさしく、今宵も白露の君を訪れたり、白露はいたくも沈みて、憂きに耐へ兼ねたるが如く、重げなる眸をあげ、懷かしき我が星の君よ、端近ふ來ませと言ひつゝ、淋しくきらめきぬ。

露は泣いて優しき星に訴へぬ、あはれ愛情厚き星の君よ、我々二人は迚も長からぬえにしなり、唯束の間のちぎりにも、仇し風の吹き來らぬかと思はれて、心の程も安からず、やよ星の君よ、露の身の果敢なさを知りますか、偖ても御身の羨ましさよ、吹く風を知らず顔に……………我も君の如くなりせば好める花にも宿らん宿らんものを。

み空にまたゝく星の君は、小さき唇を開きて、いたはしき露の君よ、さな悲しみ給ひぞ、我とても清く明らけき夕月の東の空に輝き出てんとき、我が光は消え命は絶え、雲の奥へとひそまむ身なるを知り給はずや。

露は泣きて曰く、月な出でぞ。

星はかてちぬ、風な吹きぞと。

あゝ星よ露よ、さても似通ひたる運命かな、悲しき事の數々を語らんよりは、疾く星は白露に愛の光を宿せかし、露は星に身を任せよ、いざ月影のさし出てぬ間に、いざ仇し風の吹かざる中に。

（評）優しく美しき想像かな星露の如き微なるものゝ上にもなほ自然は束縛の苦みを與ふるなり。

人 ○旅の終（三）

兵庫縣加東郡下東條村の内下番村岸本照市方　岸本桂子

今を終りの旅衣縫ふべき暇もなきまゝに急ぎ筆とりて最後の文を綴り初めぬ。世に行脚の僧の廻國もかくやあらん、遠き昔の巡禮も亦かくの如けん、海あれては浪枕の定かならず、道迷うては深山邊に行き暮らして谷の牡鹿の妻戀ひに、儚なき夢を破るとかや、身は聖代昭々の下に生を享けて、それ等の昔は視ずもあれ、遠き宿舍に數ならぬ形骸を横へて、無情をつぐる鐘の音をきゝ冷々と冴え亘る有情の月の光を眺めては、端なく故郷の胸に浮びてそなたの空も打瞻るぞかし、泣けとにあらぬ旅なれど、心根弱き女の身は、などしも哀愁の感に打たれざらんや、昨日は田鶴なき渡る和歌の浦、今日は仙藥を求めし徐福の古跡、明日は熊野の權現と、俤に、船に將た汽車に、種々多き夢を乘せつゝ、漸く歸途につきて、波や今宵の主なる須磨の浦曲に長途の疲を慰むることゝはなりぬ。

あゝ山紫水明、幾その山に、水に、心を樂ませたりし妾が旅も、今曉を限りに別れ去るべく、今となりては又名殘をしう思はるゝよ、近畿の地、踏み破りし千山万岳も、烟の如く胸に浮びて、憂かりし過去の歸りて懐しう、いつ又迎へらるべき時やあらん、誠に白駒の

隙過ぎ安くして、紅顏よくいつ迄か花の香を保つべき見よ、夕焼け雲の如く、榮に誇る紅閨翠帳の夢は、東におてる攻皷に破られて、さしもに猛き平家の一族も再び此處より南海に落ち往きしとかや。もとより妾の身は數ならねど、唧とかましき蟲の音に、一人旅寢の心を傷り、曉霧に行く手を閉されては、紅ゐ散らす衣の裙を葉末の露に濕たれつゝ、鄙の草木に時ふりくしの興をやりしなど、胸に浮びては、愈よ蹄るのつらく彼の朝、關山に雁を聞き、夕べ大江に月を見ると、古へ人の言も思ひ合はされて、憂かりし草枕の、今はなかなかにをしと思はれぬ。

（評）文流暢にして情景ともに具はる旅の終とは面白き趣ある哉。

寄送

○桔梗

糀町　大澤白百合子

過ぐる夏の夜、星の宮居に紫の君を訪れ、いと睦じ天の川べに舟漕ぎ出て、納涼けるそり、君過ちて水に溺れたまひけるが、遂にみ姿さへ知れずなりぬ。

無二の友を失ひたる我の、悲しさやる瀬なければ、日々涙の露にのみむせび居つれど、けさ清らかの風に誘はれ、白菊香ばしき野邊にさまよひ出てけるに。

あな懐かしや、失せたまひしとのみ思ひ侍りし友の君こゝに居たまひぬ。

み言葉によれば、再び星の宮居には皈りたまはで、淋しき秋の野を守りたまふとか。

昔のごとき盛装はしたまはねど、其かみの面影そのまゝにて。

（評）かゝる空想はともすれば失敗に陥るものなるがこれは趣向も自然にて情もあり無韻の詩ともたゝふべし。

○自然の子

紀伊　文子

我は自然の子なり。

塵を隔てし深山の奥に、炭燒を業として日を送る與作の娘として。

生れて茲に十七年、まことの父の情を知らず、母の慈愛を知らぬ身なりき。父も母も權門に位高く榮えますとかや、されど逢ひたくもなし、見たくもなし、子を捨てゝ忘るゝが如き冷き心もてる父なれば、母なれば戀しくもなし、なつかしくもなし。

日々菅笠被りて、草鞋をふみしめ、三里の道を馬引きて、人里近く炭賣りにゆく此の身を卑しみと、嘲りの眼もて見る、世の人の日にく多くなりゆけど、己が身に幸ありと思ひしみたれば。

吁我はとことはに自然の子となりすまして、此の後を運命のまに〳〵自然におひたゝん哉。

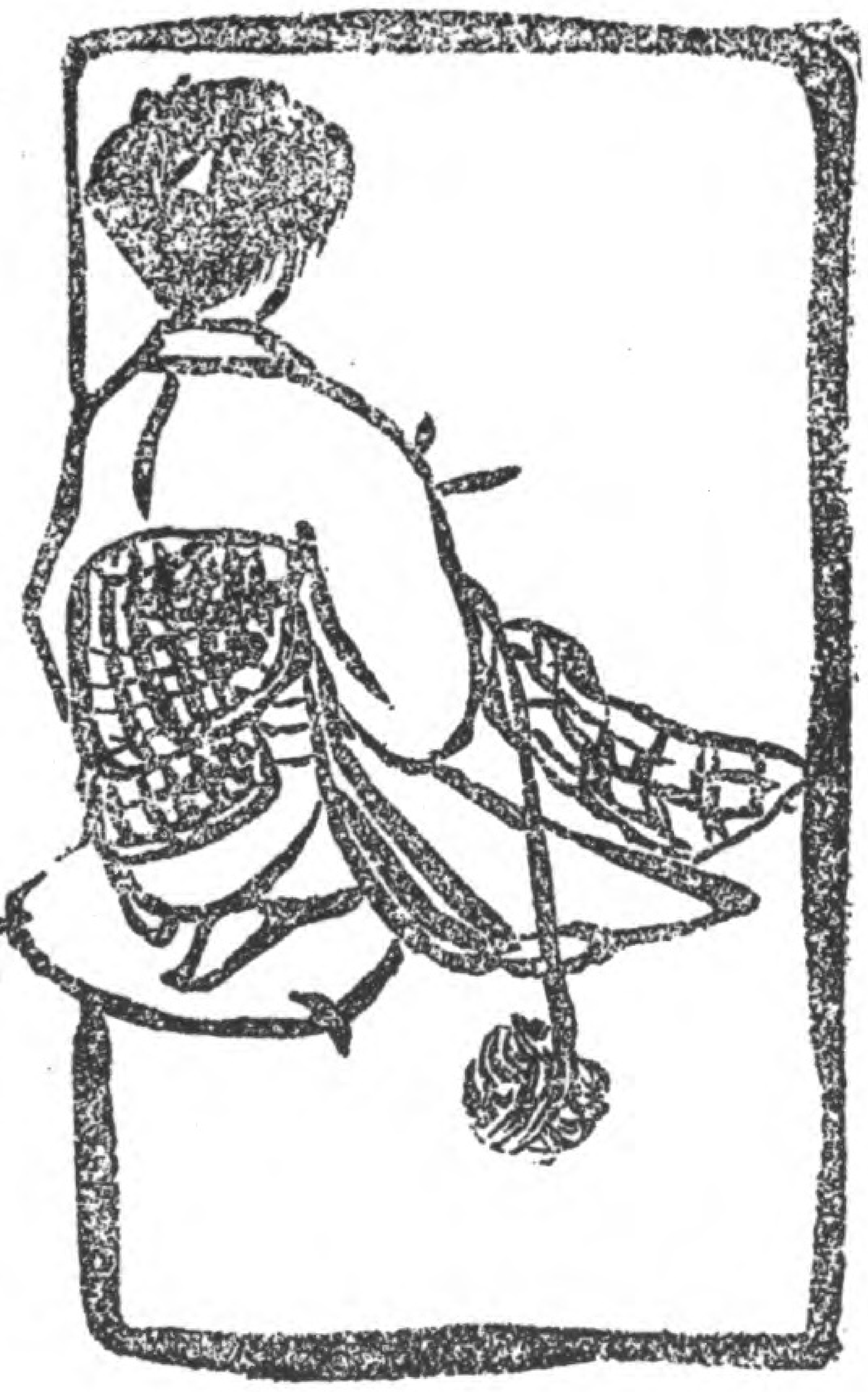
（評）牛は怨み牛は慰む一篇の好小說。

○あゝ此の月

石見　秀子女史

浮世のあなた、鶴が峯のあたり、月は入り方の空清う晴れて、打見やるに、眺めやるに、涙おのづと湧出でゝ冷めたき頰に流るゝかな。あゝ、この月よ、石見潟波打ち騒ぐべにたちて今ぞかなしく眺むれど、想像に輝く、よろこびの眼をあげて望み見し時はあらざりしか。君が家訪たびのかさなりては、さすがに心弱くも入りかねて、ためらふ生墻の外、緋桃ほろほろと散る夜朧げに仰見しは此月にあらざりしか、こん後の果敢なき事ども胸に描きつゝ君と二人櫻川の岸、綠色こき柳の木陰にさまよひつゝ望見しも此月にあらざりしか。あゝ、さるを、あゝ。空想の殿堂、已にこぼれて、おなじこの夜の月を見つゝわれは今かくすぎにし樣を夢と見てなげかんとは、はては月の神々しきさへ恨めしくも思はるゝよ、さても月は昔の儘の月にして罪はあらざりけるものを、あゝ弱きは人の心なるかな。

（評）哀れに讀まれたり、書き方おぼろげにて却てよし。



あみもの（選外）　麹町　淺井千鳥子

○雨の通學

府下　あき子

雨天！私は最も恐怖と、厭忌の念を生ずる語は、これである。通學！私は、通學は左程苦しいと思はない、否却て面白く感じてゐるのですが、兩天の通學、これは全く私の最も苦痛とする所です。

今日は、この厭な雨天である。加ふるに風さへ強く傘を、ともすると、奪ひ去らうとするのである。

友の俊子さんは、とう〳〵欠席なさつた。今頃は窓の下で好きな詩集も讀んでゐられるんだらう。

私は、欠席するのは嫌だ、如何なる事があつても欠席はせぬ覺悟である。雨は愚か、雪でも、又は槍が降つてもだ。けれども、實に雨天の通學は決して、樂てない面白くない。

晴天だと、朝の淸冽な光に、何とも云へない輝きを目

せる森の眺も、山の姿も、萬物が皆いき〳〵としてゐて、見るからに、氣が清々とするのだ。

それが、雨の日は何を見ても泣いてゐる樣だ。寂しい、陰氣な、何だか世の中が太古に復つた樣な氣がする、こんな空想を胸に浮べながら私は、坂へさしかゝつた、こゝは私の一等の難所である。注意に注意を加へて、やつと下りると途端、眼前に一人の人が居る、見ると七つばかりの女の兒だ、下駄を切らしたのと見えて、しきりと之を繕つてゐるのだ。けれど如何も能く出來ぬらしい、それもその筈、新聞紙で緒をたてようと云ふのだもの、私は何考へたでもなく、ハンカチを裂いてこれでおやりと渡すと、少女はジットト眺めたきり、御禮も云はねば、只ウットリと立つてゐるのであつた。何を考へてゐるのか。

私は、無頓着に過ぎて行つたが、七間程行つて、後を顧ると、もう少女の姿はなかつた。急に、けたゝましく會社の汽笛が鳴り出したのである。

少女は會社へ出勤するのだらう、あの幼さに勞働するんだと思ふと、急に我が身が思はれて、雨天の通學も何でもなくなつた。

これは、私の實際の事の話で、私は、これを決して忘れまいと、日記へ書いて置いたのである。

（評）少女の恍惚として居たるは通學を羨みしものならむ。

○嬉しき消息

和歌山　水子女史

山川遠く越えて言の葉かはさん人はおろか、未だ四方に續くる山々の名をだに知らぬ、旅の身に、一番嬉しく思ふものは、戀しき故鄕よりの消息なるに、まして今宵、鳴く虫の音もたえ〳〵に、野寺の鐘の音さへ幽に響き渡りて、よろづ物悲しう心細き此の秋の夕ぐれ、未だ書きなれぬ妹より。お母さん、夕邊大きなやゝ子、生みましたと、認めおこしたる時の嬉しさ。冬休みさへ近きに。

（評）短かけれども情長し。

巖谷小波先生選



特別第一賞　秋田縣横手町伊藤慶太郎方　白香女史

枯枝に鷹のもの喰ふ枯野かな

〔評〕何等雄大の句ぞ。

特別第二賞　讃岐　香川榮女

富める家の幟大く子は愚なり

〔評〕喝破し得て痛快。

特別第三賞　上毛碓氷郡東横野村　五十貝すゑ子

蝶塚に咲くや菫のかへり花

〔評〕詩味溢るゝばかり。

天　本郷區弓町一の二六榊方　齋藤茂子

蛇出でゝ人よぶ妻や苔清水

〔評〕やさし。

地　小石川區雑司ヶ谷町四〇　柳下くら子

茶の花やテニスの鞠のころげ入る

〔評〕をかし。

人　福井縣　紅葉の下

猫の子の覗き合ふなり青簾

〔評〕あいらし。

秀逸

朝寒や竿に物云ふ渡守　岩代　岸野菊子
縁むすぶ石の地藏や草の花　伊勢　岡本しげ子
朝顔の種干す秋の扇かな　浪花　風蘭女
長き夜を眉なんど剃る老妓かな　小樽　岩谷綠子
磯村のみかん畑や晝の月　上毛　和田季子
醫學士の瀬戸札白き柳かな　秋田　黒丸とみ子
角立てゝ聖書を覗く蝸牛　千葉　白百合女史
旅人の貝塚見出す枯野哉　下總　櫻井定久子
銀屏の松ものふりし夜寒かな　石見　操子
千鳥なく夜や城を出し灯が二つ　愛知　渡邊磐子
虫聲の哀れ五尺の男かな　上總　關たけ子
山門に乞食集る時雨哉　播磨　谷口文子

隣りより子の見せに來る團扇哉　京都　今泉磯千鳥
名月や階にてり込む新世帯　靜岡　天女
秋の雨凱旋門はさびにたり　大分　はぎ子
鵙鳴くや夕日輝くのぼりさほ　安房　女郎花
管絃の舟名月に出たりけり　美濃　みち子
稲刈りて淋しげなる案山子かな　陸前　鵜水時子
朝寒や雀の覗く臼の中　相模　井上たけ子
廃ろごりて小庭に狭き芭蕉哉　豊後　後藤葵美子
我にまだ良縁なくて秋の行く　麹町　森安千代子
寢とぼけて名殘の月を拜しけり　京都　波間子
團扇をかし下されの太夫かな　熊本　緒方なほ子
上京や夜寒の家に紅をうつ　鳥取　久松よし子
鹿鳴くや奈良の都の常夜燈　信濃　春江子
馬子一人時雨てかへる枯野かな　横濱　吉川香都子
初雁や遅れて風呂を落す頃　越後　藤原淌子
戸あくれば夜風に煙る榾火かな　島根　藤子女史
蟋蟀に亂るゝ月の柳哉　羽後　前田比佐恵
萬葉にしたしむ秋の夜錦かな　三河　耿子
ひげ剃つて節を菊にまかせけり　岐阜　泉紫房子
汽車道に萩の花さく雨の寺　臼杵　安田初子
秋晴れや非人施行の大地主　兵庫　土井一子
柿盗人柿から落ちし月夜哉　周防　西村しんじ
墓近く撫子やせてさきにけり　横濱　星戸花舟子
夢さめて秋の雨聞く芭蕉かな　美作　佐全紫女女史
小春日の犬も乗せたる俥かな　讃岐　青葉女史
男月の嵯峨は更けたる追貼　赤坂　内田桂子
朝寒や樋守の宿の小鍋汁　柳宇子
温泉の客の秋行く空を仰げけり　千葉　林はぎ子
雨はれて十五ヶ村や虹の橋　大阪　岡崎かずゑ
焼跡を掘る男あり秋の雨　羽後　伊藤幻子
亭の絵直す小春の小窓かな　豊前　尾形千代子

尼寺に尼の打つらし小夜砧　伊勢　つれ子
明月や小便をする隈もなき　南越　蕗月子
居ならんでおはす地蔵や今朝の霜　本所　鈴木はる子
寒月や長堤三里人を見ず　上總　小川まさ子
時雨るや朱雀大路を牛車　横濱　風間彌壽子
初潮汀の錨にすべりけり　京都　細川菊子
追はぎの頬ひげを吹く野分かな　本郷　丸田郁子
鍬提て出代る寺の男哉　愛知　渡邊紫川
秋雨や火ぞほしき手の置きどころ　京都　橋本みつえ
大盤に野菊とまじる小庭哉　麹町　淺井千鳥子
花野から花野に渡す土橋哉　大磯　池田まさ子
名月や座しきに届く松のかげ　相模　うし虫女
金佛に雨冷かな彼岸哉　巣鴨　木橋たゑ子
楠の木にしぐれて殘る榾子哉　姫路　矢島芳子
水かけの浪にゆらるゝ蓮の花　伊豫　菊池幽子
秋の閑土人形に戀しけり　尾張　はごろも丸女
富士詣吉田から出す藥香かな　本所　三ツ森富士子
蚊帳吊て明放ちたる二階哉　信濃　藤岡三輪子
踏むにおしき練兵場のすみれ哉　兵庫　たか子
冴ゆる夜を汽車の真似する狸かな　横須賀　加藤春子
樓見し雲見し山や秋の月　神奈川　内藤春子
帷子にかくしやうなき土藏哉　伊勢　乙部きく子
初雁や月に冷たき庭の石　岡山　芳蕊女史
馬病て藁屋さびしき秋の暮　神奈川　高梨たか子
雞頭の四五本黒う時雨けり　備中　佐藤芳子
小春日や猫も來て居る椽の先　廣島　渡邊千枝子
柿の木にしぐれて殘る榾子かな　美濃　西村由子
上京の人をてらすや朝の月　あきの子
山の宿三尺の百合活けにけり　美濃　加藤よれ子
瓜茄子青田の宿の晝汁　伊賀　山村りやう子
秋風や波の白鷺を一渡り　秋田　大舘みさを

文學士沼波瓊音先生選

消息文

天

○手隙に妹より

韓國永登浦　手塚靜子

姉樣今日は雨降りで仕事も手隙ですから韓國の摸樣を御知らせ致します。私韓國へ來た當座は何となう心細く思ひましたが段々と馴れ、今は韓語の一つも覺えて、もう何も思はぬ樣になりました、けれども今日のやうに雨の降る日は故鄕の事など思ひ出して、遠い東の空を眺めるのです。韓國位氣樂な處はないでせう、流行物はいらないし、どんな風をして居らうとどんな事をして居らうと人が口喧く噂すると云ふではなし、日本語の生まわかりの韓人を相手にする位氣樂な事はありません。韓國では毒の無い者を「チョンガ」と呼びそれと反對なのを「ヨボ」といひます。「チョンガ」は髮を組んで後ろへ垂れて居りますが「ヨボ」は結んで居ります、男女とも全じ事です、そして韓人の呑氣さはお話しになりません腹さへ滿ちたら遊んで居て食ふ事が出來ないやうになれば働くと云ふ風です、早く云へば其日暮しなんです。日本人は韓人から非常に敬せられて居ます、韓國の巡査でも日本の子供にまで道を讓ります、私はこんな事を見ると嬉しくてなりません。それから私が感心した事がありますそれは、韓人の約束をよく守る事と、いまいましい私通のやうな事のない事です、早く妻や夫を失うた者は一生一人で暮らして行きます韓國にもこんな美風が殘つて居ります。今日のやうに雨の降る日は韓語と日本語の敎へ合ひをしようと約束して居る隣の韓人の妻が待つて居ませうから私しは約束を違へぬ樣に行かねばなりませんから惜しい事ですがこれにて筆を止めます御免。

（評）短き文の中に韓人の欠點と美德を擧ぐ感深し。

地

○奉公せる弟へ

松山市御室町三一　孤蝶女

毎日々々重い荷を背負ひ得意廻りをして、やつと歸るや直ぐお店の番、本當につらひことでせう、けれど一郞さん、世が世なれば此樣な、お父樣が御存命ならて

の辛苦をなど、決して思うてはなりませんよ、このやうに母姉弟が艱難をするのも、みな神樣の深いくみ情で、人は皆この荒浪にもまれ〳〵て初めて、眞の人となるべく世に生れきたので、それを恐れず悲まず耐へ忍べば、軈て希望の港に着くことが出來るのですよ、一郎さんは男ですから、それくらゐの事はとくにお承知で、何にこれしきのことゝ思うていらつしやるでせうが、妾は日々織る機の上で、筬持つ手の凍るときは、開け放ちしお店の門から入りくる身に泌むやうな寒風に、風を引きはせぬか。お店のお朋輩にいぢめられ、火の氣もなき片隅に、座り居りはせぬかなど、思ふと女の愚痴とは知りながら、つい書きたくなるのですから、どうぞ堪忍して頂戴よ。お母樣もこの寒に何のお障りもなく、縫物をして居られますからお安心なさい、今日綿入と裏の蜜柑を小包で送りましたから、風を引かぬやう氣を付けて、お主人を御大切に……さやうなら。

（評）十分弟を慰め勵ますに足る。

人

○ゆきかひぶり（山村より）

岐阜市上加納區入間道　泉　絮房子

鳥も通はぬ山重山中こゝも秋にて候山々には紅の幕を下ろして、野は一面に黄金の莚、ふ川は銀絲の如くに其間を縫ひて、今し落日美しく輝きいて、葉も梢も皆血汐の色に燃えいて候我立つ足元の幽谷は、霧深うして底ひ知れず、峙たつ巨巖の苔も古びて、あやうげに掛る老樹の蔦葛にまとはれたる、あるは被ひ重なる葉の間より、葡萄の房の鈴の如くに垂れたる、何れか嬉しからざらむ、紅葉燃え立つ前崖を、白瀑數條水晶の水は谷を流れて、浮べる木の葉もあるべきに、深き谷の道もなくて、下り難きぞ恨みなる、潺湲たる水の音に名殘をしみつゝも、更に歩を續け候へば、道漸く嶮しうして、ふみ上る岩根の苔滑らかに、千歳の老樹蔭をつくる所、香りゆかしき茸は落葉の下よりわれを迎へ、風なきに散る赤きもの一二片三片、袖にとまりては錦をつゞり候、せめては我が淋しき山村の秋色を偲び給はむ料にもと、色よき片一つ二つ、描き文にまきこめ參らせ候。

落日黄に暮雲とび、紅の梢を一つ〳〵ふるはして、すぐる鐘聲幽に、洋青色の空にははや銀の月浮びて、轉寢の枕に鹿の聲さへ、をり〳〵きこえ候（谷間に鹿の紅葉書にて）

（評）山水畫の卷物を見るが如し。

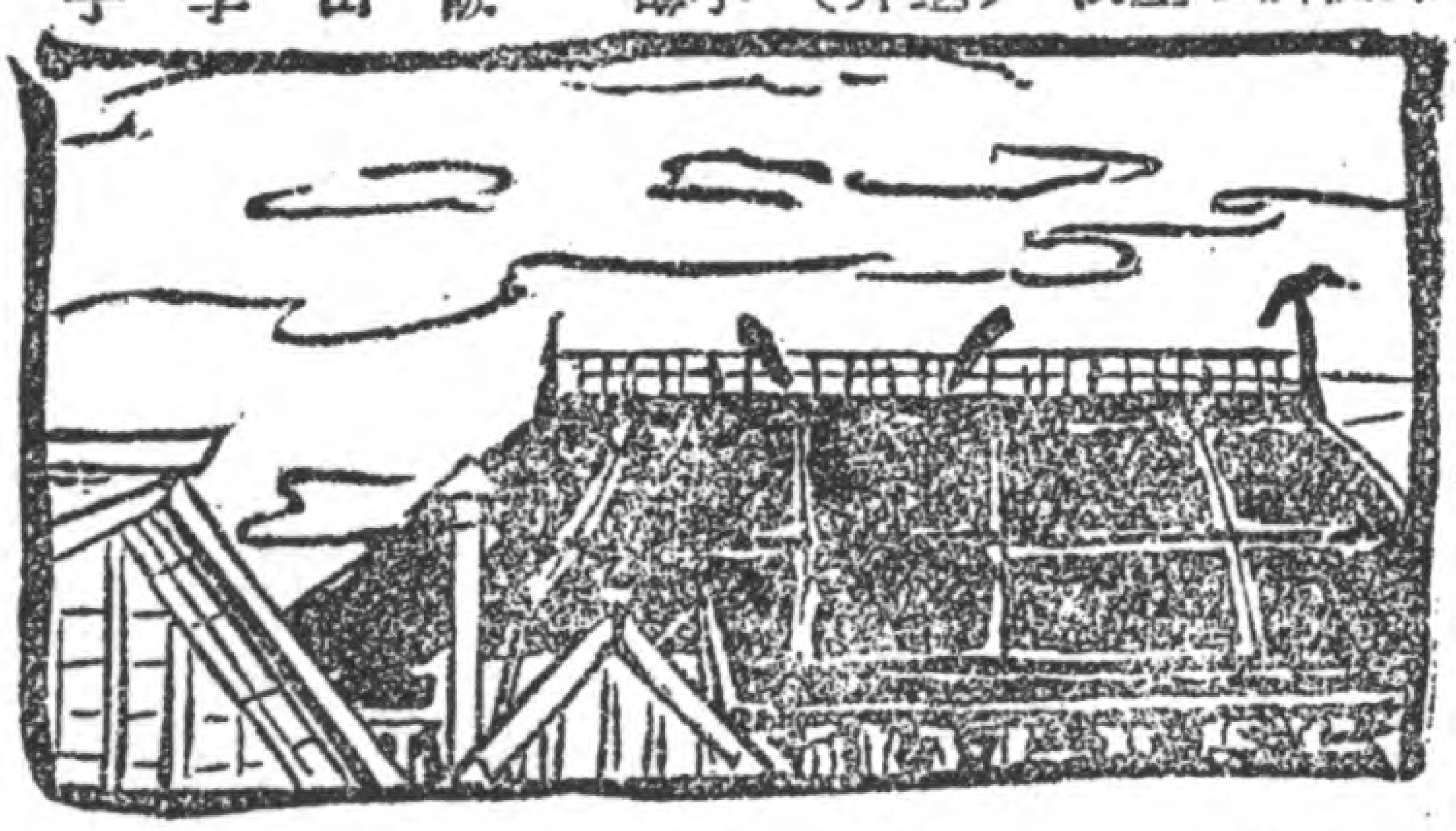
秀逸

○上毛より（陸前山形幸子の君へ）

上毛　河内とめ子

幸子様、過日は立派な繪葉書ありがたう。只今迄消息もせざりし罪は、何卒お許しを願ひます。御許様は、草深き田舍に淋しき月日を送つて居ますなんて、何だか田園の生活を厭うて居なさる樣ですが、御住居は海邊近くではありませんか。陸前と申せば、名に負ふ松島の好景に、恍惚として言ふべからざるチャームを感ずることもあるでせう。或は紫瀾白波に身をよせて浩然の氣を養ひ、或は漫々たる潮に無限の爽凉を擅にし、或は夕日の餘光に美はしき暮雲を賞しなさるなど、隨分趣味ある御生活と妾は却つて羨しう存ます。妾の住家は八王子山といふ小さな山の、南麓にありまして極く淋しい處です。東南約二里（山上迄）には、新田氏の英靈を留むる金山がありますれど、山にはひとり松の茂れるがあるばかり、春が來ても花見ん程の所もなく、徒らに遠き淺間の煙を眺め、近き榛名赤城の青黛に思ひをやるのみです、加ふるに海邊とは異なつて塵多き空には、雲の變化やその色彩の美などは、殆ど求むることも出來ません。況して御地の樣に、白砂青松の裡より白帆天に懸ると云ふが如き、浦邊の光景などは、迚も夢想にだも得べきものではありません。とやかくと思へば、飛び立つ思ひせられても、翼なき身の詮方なく運命とあきらめて、時に或は金山に上りなどして、渺茫たる八州の平野が、若し海洋であつたなら此の邊は入江でもあらうか。脚下に見ゆる桐生足利などは港である、彼方を走る汽車は汽船であるなどと思ひ比べて、僅かに慰めて居ります。何卒折々、御許樣の才筆を以て、御地の景などお知らせ下さるならば、妾は如何に嬉しいことでせう。先はこれにて、左樣なら。

（評）筆つき落着きて快し。



郵便局の屋根（選外）小樽　飯田季子

○奉公先より

伊豫　あさ子

土橋にてお別れ申候てより早一旬を越え申候今日やたよりをおくり申さん、明日や雁にも言つけんと思ふ心も手間なき身の悲しさ、たゞあはれとのみ思召して。さて、主の許に着き申候は其日の夕方頃、お叔父さまお叔母さまのお敎へにてこの家の勝手、習慣等も略々

知り翌日よりは、直に臺所の仕事を受持つことゝ相成申候。田舍者のかなしさご飯炊く事も心得ぬ身の萬事にうとき生れつきとは言へ、ありきつし當時は、何やかやにまごつきて、奥樣のお小言に時には胸を絞らるるの思いたし候。その悲みも二三日にて今は大方御家内のご氣質も知り、勝手も覺え候故、御安心下されたく候。

私の日課と申せば朝は、薄暗き刻より床を出でゝ、朝飯の仕度に取かゝり候へども、夕は存外早くより仕事を拂ひ、それよりは縫物のわざ、讀み書きなど敎へて貰ふ事に候。臺所の仕事をする位の事に候へば、別段苦しくは覺え候はねど、日頃自由勝の身のその當坐は泣く思をいたし候。

朝寒き刻ひとり床をはなれてつめたき水遣ひいたし候折などはそゞろ父母の御恩のたゞならぬを覺え申候。今日は此土地の氏神の祭とかにてみなのもの鎮守の社に詣で候、妾も午より少しの暇貰ひ候故その暇をかりて、かくお便り申上候。追々風寒くなり候はゞみなさま御要心なさるべく殊に母上には老ひませしみからだの幸に身をいとはせ給ひぞ。

(評)　眞情こもれり。

○海賀變哲樣に　神田　谷文子

女の身の窖もなき者とおさげすみあるかは知りませねど日頃貴郎樣の小説を好み讀みまゐらせ候故御忠告申上ばやと一筆まゐらするわけ何卒みぎおん諒せられたく候さて貴郎樣近頃公になされし新浮世風呂中『一寸茲で日比谷公園』は甞て萬朝報小説一等貴郎樣の作『豈圖蘭藏』に『廻り舞臺伊勢屋家内』は文藝界七月貴郎樣の作『喜劇求婚』に又浮世風呂中批評家小鞠門太郎對光山の談話は文藝倶樂部九月貴郎樣の作『材料商賣』に或は全然或は部分など名を更へ品をかへ其他夫々換骨脫胎とよく云へば云へ貴郎樣の如き新進作家のうちにて未頼もしき方が同じ筋を繰り返して只書名を更へてこれを公になされ候は餘りに貴郎樣の取材の乏しきを自ら御説明なさるゝに同しものならむと存じあげ候私は貴郎樣の小説は必ず讀まぬことなく絶えず注意いたし居候ゆゑ係かる苦言を呈しあげ候これも貴郎樣を敬するあまりと御ゆるしにあづかりたく右はゞかりもなく御忠告申上まゐらせ候。

(評)　變哲大人御返事いかに。

○寧樂より　上總　山田沖子

我は今猿澤湖畔にたゞずみ候。衣掛の柳、釆女が恨み永へに若うして、池畔のそが木の新芽は、怨みの色に萠え出づべく候。時は今、秋、天が下知る五月雨の候に候はねば、多少樓臺烟雨中の趣きはなけれども、柳枝むなしく寂しき風になめられて池邊に逍遙ふ老鹿は、如何に無常を觀ずらん、首を垂れて低徊致し居り候、多感の我、何となく旅の哀れを思ひて、惆悵として思ひに耽り候。

案内の車夫の忩がしげに促し候まゝ、我は南圓堂に入り候、抹香の烟りに咽んで、内陣の樣も定かならず、古代の美術に少しく心を傾け候へども、思はず辟易して逃げ出し候。

正倉院、帝室博物館、そは寧ろ實見の後の人に語るべし、未見の人には語るべく餘りに大に候。

讃ぜんに御名は知らず大男花に吹かれておはす東大寺。天才晶子の君も賞賛の辭を失ひ候ひしとかや。

まことに運慶が入神の作、二王と申し候はんよりは、今少しノーブルなる美しき名を與へたき者に候、技巧の上に於て、大佛は足もとにも及ばず候。

されどさすがに大佛に候よ、威あつて猛からず、笑まんとして笑まず、寛悠の態、嚴正の姿、他が天平時代の美術を繰り返すを怪まず候。

こゝを出て候ひし我は、神鹿に擁せられて終日を暮し候。同情なく慰藉なく、孤獨に泣きし我は、優しく美しき動物に依て、初めて温き愛を得しに候、まことに自然が動物に能ふ丈け與へしシンパッシーは、智慧とかいふむづかしき本能を有せる人類よりも、寧ろ無智なる畜類に依て、より多く發揮せらるゝものと存じ候。

まづはこれにて擱筆致し候かしく。

（評）蒼古なる趣。

○東京の兄へ

常陸　なみ子

兄さん東京で私知らないが、栗や柿も出來て、家ではね、裏の柿が例年にない、あたりで、それが今盛んにあかく色が付いてほんとに見事です、藏の後の大栗も、まつくろにかねが付いて、昨夜の大雨で半分は落ちました、私はそれを母樣とひろいながら、是れを、東京の兄さんへ上げたいと申しましたら母樣は東京にはもつとよい栗も柿もありますつて、だけど東京のと故郷のとは味が異ひますわね、兄さん、昨日御送り致しました、袷はね、今年始めて母樣に習つて縫りましたのそして私が縫つたのよ、兄さんには田舍むきで御氣に入らないかも知れぬが私が毎夜々々のたんせいて、仕立て上げた、着物ですから何卒寒さを御しのぎ下さい。兄さん。

今だから御話し致しますがね、お友だちの皆樣が、や

れ女學校の、裁縫學校のと云うて上京するのを、見て居つた私は、あゝ私は一人物學ぶ事も、出來ないで、一生をこの草深い山里に田畑を耕しつゝ埋れねばならぬ身かと、思うては、人知れず都の空を眺めて、袖をしぼつた事もありましたが、今ては年取つた、母上に苦勞をかけては、すまぬと考へましたから、東都遊學など云ふ事は、早や忘れて、一日も早く、兄さんの成功遊ばす樣にと、母樣とふたり神や佛に祈つて居ります、兄さんも何卒その御つもりて御身躰にはさはらぬ限り、程よく勉强して下さい。

尙ほ申し上ぐる事は、數盡きませんが、夜もだいぶ更けたやうてすから、後便にてまた〳〵申上げませう。折りしも名も知れぬ、秋の虫の數々は幸薄き母子に同情してか聲も哀れに啼き出しましたさよなら。

（評）秋の趣しみあり。

○兄上樣へ

秋田　松田せい子

兄上樣、ボストンよりお差出になつた御手紙が着きましてから五日目に小包もつきました、妾中を開けて見たくつて〳〵仕樣がないの、だけれど、兄樣からあの通り私が歸つてから開封せよとのお手紙だつたので毎日毎日兄樣がお歸りになるのを一日千秋の思て鶴首して待つてゐますよ、其の小包に對する妾を母樣などは小猫が手毬にからかふやうだなんて冷笑しなさるのよ、日數も少ない慰勞休暇をなぜそんなにくち〳〵しておいでなさるの、橫須賀にお着きなさつて休暇になつたとのお知らせがあつてからは向ふに車の音がすると母樣は針の手とめて顏を窓にだされましてよ今ては父樣も母樣も待草臥れておいでゝす、それに遠洋航海にお出でなされた事なんですからどんなに其のお話が耳新らしい面白い事計りでせうか、それにつけても彼の小包はどんな珍らしい物で目を驚かせるか妾は其の包を見るにつけても、兄樣がお早く歸つて下さらぬのが恨めしいのよ、錦町の義姉樣の家からも未だ歸らないのつて毎日くるのです。では兄樣早く歸省つて頂戴なさやうなら、妹より。

（評）小包が開きたいから歸れとの意可愛らし。

○病床より

府下　安喜子

病を口實に、久々の御無音、何とも申譯無之候。何がさて、筆とりて紙に向ひし事も度々にて候ひしも、いざとなりては筆動かず、殘念ながら思ひ止りし事とて、何處も御無沙汰をのみ致したる次第に候間、不惡御賢察下され度候、今日は、やゝ心も勝れ、病も怠り、且

は思ひ出多き月の夜とて、一筆認め申候。友なつかしきは今更申す迄も無之、殊に病を得て樂しき都門の天地より獨り寂しき鄙里に移りし身の雨の夕、風の朝につけ都の空に憧憬るゝは、さる事なるが、わけて、今宵の月はいたくも我が胸を碎き候。君、忘れやし玉ひつる、三年の昔、この月は、君と我とを鎖守の社頭に照して上京苦學の約を結ばしめ、昨年の今宵は君と我とを寄宿舍の窓に照して、未來の空想に魂を飛ばしめしを。而して、我、今宵この月を寂しき病床に眺む。君！この月に照されたる我が身の如何なる樣なるかは之を推し玉へや。感は深くして筆は短し。唯思ふ、君は今頃如何にこの月を眺めてやと。聞きたきは君の便に候かな、かして。

（評）多少の感慨。

○入學した兄へ

北海道　山崎八重子

兄さん、一番で御入學なすつたんてすつてね。昨晩其のお手紙を拜見致しましたので、妾、嬉しうてく淚られませんでしたわ。御母樣も大喜び！手紙の上に淚をこぼされて、そしてそつと、袖てかくして、いらつしやいましたよ。此方で出來れば、やはり何所へ行つても出來るのね。だから何も、あの樣に御勉强なさらなくつてよかつたのだわね。

早く兄樣の洋服着て、中の徽章のついた帽子をかぶられた御容子をたうござんすわ。左樣なら。シャツ一着小包て送りましたから着て下さい、ほんとに近頃は寒いわね。



汽車ごツこ（選外）仙臺　池田ふて子

○友への返し

芝　登美多　つゆ子

あな美はしの水莖やとばかり、御ふみ拜し參らせ候しばしがほど、打見とれて候、芳ばしの御名は誌上にて疾くより承知候ものから、ゆくりなうおこせ給ひつる玉章に、やさしの御こゝろ偲ばれて、一入にゆかしうこそおぼえ候へ、偖御申越の繪葉書交換のことは、私も好めるわざに候へば、悅びて御うけ仕候、されど肉筆のは恥かしながら繪筆染めむ術を知らねば許され候へ、また私の寫眞おこせとの仰に候へども、生憎手許に一葉も無之候に付、遠からず撮し候て御目にかくべ

く候が、幸ならも生れ候ものかなと、今は亡き母の世に在りしつね〳〵申され候ほどの御面相、鍋蓋のそれはそれは醜きに候へば、手にしたまはぬ前に、氣附藥の御用意をこそ、かしこ。

○『ちよび』の最後　名古屋　小山かく子

段々御心配を藏きました『ちよび』も到頭今朝八時にあの世の猫となりました。そのせいか夜前は時々悲しげな聲で、にやア〳〵と鳴きましたから、其度毎に私が起きて撫てゝやつて介抱致しました。するとさも心地よさゝうな顏をして眼をつぶッて又寢入りますのでまだから早く死ならうとは思ひせんでした。所が今朝照ちやんが早く見舞つて下さいました時はもう眼を引きつけて、昏睡の姿でありました。私は可哀相てどうしようかしらんと、まご〳〵して居ますと照ちやんは、氣付けだと申して唐辛水を拵へて呑ませて下さいましたがもう駄目てした。眼をあける勇氣もなければ呼んても挨拶する氣力もなくつて、強く四足を引き付けて、これはと思ふうちに今度はグタリ伸ばして夫なり黄泉の客となりました。私の力をおとしたことは、お話にならん位てあります。埋葬は夕方子供式てやります。私の書齋から棺を出して裏庭の椿の根もとに葬ります。生きてる間散々椿の實にジャレましたが緣故て。司式者は源ちやんてあります。是非御會葬して下さるやうに願ひます。

○都の兄へ　千葉　龍雲女史

田舍のあした乙女が草籠を脊負ひてわかやかなる千草の露を踏みつゝ前の細道を通り行きて後は唯さと吹きくる朝風ばかりにて候青田はそよぎ木の葉の露はこぼれ朝顏は垣根に白き赤き三つ五つ床しく咲き出でたるなど皆人の眼を喜ばすものにて候實に涼しきは田舍の夏の朝に御座候あなかしこ。

○片瀨の友へ　赤坂　武代子

海水帽もいつしか片隅にやられ一日毎に客人少なく只鈴虫の聲計りにてさぞかし淋しう候ひなむ君には定めし今日の晴間に釣竿持ちて神戸橋のあたりに風月を友として世の浮事を白菊の花と太公望を氣取りて居玉ふらんと浦山しう存じ候思ひ返せばきのふの朝君と共に浪打よする濱に出て櫻貝集めかもめの一群に驚かされれつゝ渠し舟に竿さしてあゝ此樂しさはそも何にくらぶべきなほ忘れがたきは月の夜の虫とり暗さこわさも打忘れて草を分けつゝ聲する方へ松葉にさゝれ露にぬれつゝそれても今日は十ぴきと籠ふり〳〵細道出る時いつもの赤犬に追はれしをいづこの人か石なげてにがしくれし事もありしをあゝ今はせはしき家にありて妹のみとりに日をすごしたゞ〳〵君の一日も早う御歸りの程ねがはしうしやちに追はれし鯨とかの御はなしも伺ひたく先は待居候かしこ。

特別寄書

星はみ空にすみれは野邊に私しや炭燒く山小屋に　　大和吉野郡賀名生村大日川　中富よしみ

〔評〕清き擧して

天

私しや都に富士山見たが國の筑波は未だ見ない　　京橋區元數寄屋町太刀川方　今泉磯千鳥

〔評〕故郷知つて他郷。

地

百合の姿できた花嫁御お里がへりは萩の花　　陸奥　てる子

〔評〕白萩か紅萩か。

人

草を背負ふて七坂こえて歸りやそろ〳〵夜があける　　上野利根郡沼田町四三　佐藤露子

〔評〕星ないたじいて、

秀逸

○又もきて啼くあの猿とゝぎすなぜにひとりて山を出た　　月形　小町女史

○思ひ出さずにねられよものか月に歌ふた姉様を　　名古屋　原田琴子

○雨は降り出す蛙は歌ふ寢てるすゝきが目を醒ます　　京都　波間女

○阿蘇の煙が南へなびくあすは好い日ぢや收納ぢや　　熊本　逝く春

○わたしや賤しい花うり娘慕うてくるのは蝶ばかし　　芝區　花蝶

○鎭守祭を只樂しみに明日も刈りましよ垂り穗の稻を　　明石　孤蘭

○出來た出來たよ畑けの豆が風が吹くたび莢が鳴る　　上野　大沼楓子

○桃は三年で實がなるけれどわたしは幾つて花が咲く　　千葉縣　高濱桂園

○馬に食はるゝ槿の花に羽を休めた秋とんぼ　　盛岡　はつしも

○乳母の形見と思へばいつも話したいよ菊のはな　　小石川　吉田斐子

○　　越後　松山けん子

君友達皆御嫁様わたし一人がまだ殘る
新田　得子

○ぜひに逢ひたいあいたいぜひに去年逝かれた母様に
博多　白熱さと子

○姉はむらさき小學教師妹は海老茶で交換手
陸前　佐々木しづな

○出たよ出た〳〵お名月樣がさあさ踊りましよ月の舞
横濱　翠薔子

○赤い襷で花嫁さんが一生懸命で砧打つ
信濃　松志子

○とんで行きたやあの山越て今日は鎮守の秋祭
美濃　侍島芳子

○秋はあはれよ蟬の羽一つ蜘蛛の古巣に晒さらし
奈良　藤田ふぢ波

○わたしや深山の山守女落葉掻き〳〵世をすごす
羽後　松盛芳江

○杵の音する山家を訪へば晩は蕎麥餅搗らんせ
南多摩　金子信子

○農の合ひ間に裁ち縫ひわざをするも坊やのあるがため
本郷　山姫

○天つ乙女の愛嬌づきて匂ひほのめく雲の中
陸中　若生なか子

○京はよいとこ花見てくらすわしもなりたや京美人
信濃　山浦とく子

○夢のやうだよ三年のわざもすんで故郷へ冬休み
滋賀　川島嶺子

○姉は白菊妹は黄菊好む花とる秋の野邊
陸前　尾形千代子

○谷の底から山見る心地室で見上げる庭の雪
下ふさ　わかば

○さえた空だよ靜かな夜だよ霜が尾花と戯れしてる

○私しや山里鏡は要らぬ朝の御化粧や岩清水
若狭　塚本ふさ子

○きぢめ〳〵の角々縫ふて行儀闘さぬしつけ針
京都　大澤孝子

○ゆかり優しき野菊の花は清い乙女が戀のいろ
香郁　良子

○星の雫か名もない森に綠りさゝめく瀧泉の音
淺草　大沼きさ江

○エビ茶袴にホワイトのリボン胡蝶まようか蕎麥畑
靜岡　天女

○仲のよいのは男と女仲が惡よに見えながら
羽後　大越みさを

○京へのぼるをいとうじやないが君と別れがつらいので
新田　無名女

○神や佛に祈つて見ても明日は雨降る空模樣
大阪　西端芳枝

○心して行け山道三里母がなさけの旅仕度
臺北　春雨子

○冬の夜寒の煖爐にかへて落つる木の葉で焚火する
九段　よし子

○羨しや田舍の十八なんな露にぬれつゝ稻苅る
秋田　三浦芙蓉子

○夫が戰塲のすみやきがまへ行厨運ぶがわが務
德島　紫濃子

○母は井の水私しはつるべ深い御恩を汲て知る
相摸　井上たけ子

○風に淋しい曠野のすゝき月を招いて夜もすがら
本所　關根都女子

○花の王なる牡丹でさへも寒の中には菰の下
羽前　草舟子

○ 岩代 岸野常子

月のみ船を銀河に浮けて星の女神と話したい

○ 鹿兒島 前田露子

上り坂にてさてつらからう一寸降りましよ車屋さん

○ 臼杵 安田初子

一人娘に緋袴はかせ氏神詣でや百合姿

○ 本郷 齋藤茂子

蜘蛛の白糸羅織りかけて昇る朝日にきら／＼と

○ 安藝 千鳥

わたしや田舍の百姓育ち粉縫ふ事まだ知らぬ

○ 美濃 内藤みち子

母は無事かと彼方を見れば空は百餘里秋の暮

○ 八王子 布田藤子

庭に咲ひたる白菊の花を兄に見せたい送りたい

○ 伊豫 井出やはる子

海老茶色には最うあきましたよいは桔梗の雫色

○ 和歌山 靈路ともへ

何がお好と時計に聞けば私といつしよに稼ぐ人

○ 京都 堀川正子

桐の一葉に秋知り顏やつゞれさせてふ蟋蟀

○ 東京 登代子

やつと貯つた此の金五圓何も買はずに寄附しよう

○ 能登 つる子

夜中勉強と目覺時計掛けて明日の朝まで一寢入り

○ 富山 高野秀子

つゞれさせとて虫さへしらす我もいそがんせんだくを

○ 越後 金塚としゑ

澤山お金をとる人よりもお金費消はぬ良夫望め

○ 愛宕 大木あつこ

盛に風吹きや花より花へ紅露白露が亂れ飛ぶ

○ 德島 山口ながれ

今日は日曜て先生樣も赤い襷のお三どん

○ 磐城 武者露子

きのこ三ツ四ツすゝきにさして歸る野路は星月夜

○ 常富山

娘よいのは十七八よ錦かざした花よりも

○ 備中 倉田笹舟女

銀の鈴振る川沿小路香床しや白萩

○ 常陸 重子

君がうつし繪見るたび毎に昔戀しや舟遊び

○ 豐橋 花村靜枝子

うちの嫁子にやはかまは無いが文もよう書く針もする

○ 青森 花瀬綾子

色は黒かろ手は節じやろが藤より松の木わしや好む

○ 上總 小川園子

今かいまかと花火の空をふッとあふげば銀の星

○ 埼玉 小林園子

虫の聲する方より暮れて月の女神があらはれた

○ 群馬 こほれ萩

月を横ぎるあの雁がねは誰にうれしいたよりやら

○ 大津 保津見死花子

後れ走りに袂にすがるあゝら袂に秋風が

○ 安房 ひで子

野末山かげ淋しくないわ君とわたしと二人づれ

○ 石川 白百合

白い手拭ふたりともかぶり黄金草かる新夫婦

○ 本郷 齋藤茂子

君は何處と濱邊へてれば月に自慢の潮來節

○ 京都 堤登久子

野菊優しい理想の花よ私摘むでは胸に挿す

○ 愛知 渡邊馨子

雞籠出しても思案がつかず待たぬ春來る春が來る

廣津柳浪先生選

短篇小說

㊝天

○朝日和

岩代須賀川本町　服部水仙子

「如何したの？」飛白の福々とした筒袖にギヤダの多い海老茶色の前掛をかけた三つか四つの男の子が、瓦斯燈に海津とある家の黑塀のところに佇んでしく／＼泣いて居たのを、母の墓參の歸途、つと寄り添つてこふ問ふて見た。

「え如何したのよ」と覗き込んだ自分の顏を、涙が一ぱいに浮んで居る大きな目で見上げて、暫く默て居たが「草履が切れたの……」と幽にいつてまた不思議そうに自分の顏を瞶めて居る。紐足袋の小な足に穿ちて居る赤い緒の麻裏の鼻緒が切れて居るので、袂を探りて手巾を裂いてそれをよりながら聞いて見た。

「何と云ふ名なの？」、「秀ちやん」、「そう、幾つ……」

「三つちゆ」、手早く鼻緒をすげ終へた時、四辻に廣告をして居た活動寫眞の樂隊が、節面白く箱根の山を奏しながら表通りを曲つて往つた。秀ちやんは其を殘り惜しそうに後見送つて居たが旗の先が漸く見えなくなると急にまた歔欷りあげた。大方今の樂隊に着いて來て、つひ此樣な遠くまで、そして草履の緒が切れて困つて居たのであらう。

「姉ちやんが送つて往つてあげますからね、お家はどこ」「あつち」と町はづれの方を指す紅葉のやうな手を取つて自分は今來た道を戻つてゆく。

松並木を通り拔けると田甫道、刈り取られた稻の跡に獨り淋しく殘つて居る案山子の笠に、今朝の霜がとけかゝつて餘程昇つた旭にキラ／＼と光つて居る。疎らな家々の軒や背戸に、赤く實つて居る柿の枝もたはゝに、青く澄んだ空には一點の曇りもないが、ゆるく輪を描いて居る鳶一羽、實に近頃稀な朝日和である。

廣からぬ道を幾曲り餘程來たと思ふ頃俄に我手を逃れて馳せ出した。杉垣の圍に白壁の二つ並んで見える廣い屋敷の其杉垣に寄つて悄然と向ふの田の面を眺めて居るうら若き姉樣かぶりの人の我目に入つた時。

「オヽ秀ちやん！」とばかり驅けて來て確と抱きあげ

た。「能く歸つてお呉れだ！秀ちゃん、母ちゃんもお祖ちゃんもどんなに心配したかしれないよ、一躰どこまてお出てだつたの、お祖母ちゃんはね：：：：お祖母ちゃんはね、私が繼母だから秀ちゃんを苛めたのだらうつて：：：：」云ふうちにほろ〳〵と涙がこぼれた。

「秀ちゃんもうどこへもお出てゞはないよ！」

「母ちゃん姉ちゃんが：：：あのこの姉ちゃんが：：：：」と抱かれた身をひねつて自分を指せば、

「オヤ！」と抱いた子を下して襷をはづそうとした時、座敷の縁にさびた老婆の聲、「秀坊歸つたかい、早くお祖母ちゃんとこへお出て」子はまたそなたに驅けて往つた。やがて「オ、母ちゃんがどうかおしだつたんだらう：：：？」と聞えよがしの高聲。

「貴女が送つて來て下すつたのですか、あ、有難うございました！」がつくりと丸髷が頽れてハラハラと地に散つた露幾雫、納屋の前の鶏が時をつくつた。

自分は云ひ知らぬ感にうたれて道々を考に辿つたのであつた。繼母！世の多くの繼母は殘酷である。繼母は殘酷なるものと信じて居た。然し眞のあたり見た今の現場は如何だらう、苛酷なる繼母の行爲は猜疑の眼にのみ映ずるのではあるまいか？こたび自分にも新



らしき母が出來るべくなつたのであるがそれに對してあまり清い心を抱いて居なかつた自分は、きかぬ氣の祖母其性に似た妹の間にあつて、繼母の同情者となり、慰藉者となつて、曇れる眼鏡を拭ふべく決心したのである。それにしてもあゝ、我母たるべき人はそも如何な人なのであらうか？

繼母だからとて人格の如何に依つては、必ずしも殘酷なもの計りでもあるまい、多くの作が繼母を惡いものにして書くのに反對して、善く書いたと云ふ事も此篇の作者が眼さきの利いた處であらうけれど、それよりも文筆の活躍して居る事が、如何に多く此作者を重くならしめたであらう（選者評）

（地）

○夕日の光

安藤玉椿

今年も早や十一月の半となつて、吹きすさむ木枯も物淋しい、殊にこゝは田舍の一小村、四五十戸の農家の中に少し目立つた門がまへの家がある、今しも其の六疊の座敷に、五十路に餘る病み上りの父が、寢床の上に起き直つて、傍には四十格恰の、さまで美しくはないが、どことなく昔を偲ばせる氣高い母と、其れによく似た十五位のやさしげな娘とが座つて居る、父は二人に向つて、「實にお前達には一通りならぬ心配をかけて……嘸骨が折れたらう、」すると母が、「いえそんな事は少しも……それにしてもあれほどの御病氣がこんなに早くおなほりにならうとは思ひませんでしたが、これは全く神樣の御力でございませうよ、ネエ」と嬉しさうに娘を見返つた、娘は「ほんとに萬一の事でもあつたらと大變心配いたしましたが、この頃のやうに一日増しにお顏色がよくなつては……」とこれも嬉しさに堪へぬ風情、父はまた口を開き、「常々出入りする人達も、こんな病氣になつてからは、誰一人顏出しもしない、それに下女までが暇を取つて行くといふ有樣で、毎日一里餘の道を藥取りに行つて、歸つてからは妹の世話やら臺處仕事、お母さんは看病につききツきりだから、何から何までなれぬ事を手一つで……澄江嘸辛かつたらう、あゝ己は今まで考へ違へて居た、學校へなど出すと只なまいきにばかりなつて家の事などは少しも出來ぬものと心得て居たが、決して決してさうでない事を己は悟つた、何もかも其の者の心掛け一つだ、澄江！來春は必ず女學校へ入れてやる、立派に仕上げて女らしい女となつて歸つて來な」氣強く言ひ放つたが、さすがに老の目には露がきらめいて

居た。

實に澄江は今年の春、優等で小學校を卒業し、なほ續いて女學校へ進むべく父に願つたのも二度三度ではなかつたが而し頑固一徹の父はこれを許さなかつた、ところが夏以來、ふとした事から一時は生死も覺束ないまでひどく煩つた父は、澄江が一通りならぬ心盡くしに、いたく感じたものと見えて、今斯くいつたのである、あゝ、これを聞いて彼れはどんなに喜んだらう、また彼の母はどんなに滿足したてあらう。

秋の日脚の短くて、早や塒にかへる小鳥の聲が聞える、折から夕日の光いと美しく、此の座敷の障子にうつつた。

「汝が表はす人物は即ち汝自身の人物を表はすものである」とやら、澄江は作者が理想の化身であらう。此篇の技巧、乃ち筆のなれないのは言ふまでもないが、着想の高潔なると、眞摯なる描寫とは讀者にも多大の感動を與へるであらう、夕日の光もわざとらしくなく、此際最もふさはしい後景であつた(選者評)

(人)

○ふた道

和泉　白ばら女史

肌吹く朝風身を切るがやう、黄金色した稻の穗も、こ數日の中に殘り無く刈り取られて、野良一面のまる裸體、時々百舌の囀りがあちらこちらに聞えて居る。

あゝ嫌な――いつそすつぱり學校を廢めやうかしら……てもそうすればお母さんがお困りになるだろうし、外によい目的もないのだから……あゝどうすればいゝのだろう……われ知らず長い吐息をついた。

自分は毎日、この田圃道の朝露を別けて、二十四五町下手の秋山小學校に通ふて居る一教員である。

初めて茲に教鞭を取つてから最早二年、いつも面白う日を送つて居たが、先々月轉任して來られた今度の校長日が增すに從ふて、ますます親切にして下さる、それが又自分にとつて云ひ知らぬ苦痛を感ぜしめるのである。

つい此間の事であつたが、體操の時間に私と高山さんと二人で、生徒を校外へ出したのがはしなく校長のお氣に障つて、永い〳〵お叱責を被つてから、高山さんはすぐの轉任、遠い但馬の國へお越しになつた。

あゝ思へば忌々しい、何故高山さんを出したのであろう、あんな事ぐらひで直ぐ出してしまうとは……いつもあの方ばかりに酷く當つて、何故同じ受持の私を咎めなかつたのであろう、實に變でならない、高山さ

んはあんな温厚しいお方だつたから、默つてお出になつたもの、、まあ何と云ふ意地の惡い校長であろう、自分は思ふ、校長が屹度私と高山さんとが、何かおかしな事でもある樣に思つたのであろう。あの方は私に親切にして下さるし、私もそれとはなしに慕ふては居たが、然しまだお互に戀などに憧憬れる身でなかつたのに、お別れの時「貴女、どうか御壯健で居て下さいまた屹度再會の時があるでせう、僕は何よりそれが唯一の希望です」と云つて下すつた。あ、何とまあやさしいお言であつたろう、思へば〱小さき胸が張り裂けるやう。

此頃はまた見えぬいた親切づくして、もう〱自分は校長の顔さへ見るのが嫌な位ゐ、一時も早う學校を廢してしまいたいが、このまゝ直ぐ引いてしまうてはおつ母さんにすまないし、さし當つてよい所も見つからないので、斯うして居るもの、、あゝほんとに如何すれば宜いのだろう……。

筋も能く通り、無理もなく、短篇にしては能く整つて居る、地方の小學校などにはまゝ有りさうな事實、强て言へば生氣が乏しいやうであるけれど、先づ今回の募集中では、上出來の部に屬する（選者評）

秀逸

○母の心

堺市　竹叟文子

ある淡暗い月の晩である、十三か四の娘子が汚い町はづれを、街燈の立つて居る辻を曲つて半程の家並より奧まつた小さな家を覗いたが、又行き過ぎた、と思ふと戻つて來て其家を覗いて居る。斯くの如く行つたり來たりして、終々五度目に足音を盜む樣に猿戸口に近よつて窃かに開け初めたその音の聞えたのか中から。

「誰方……」女の聲がした、これを聞くと同時に娘子はぎよつとして猿戸から手を放したが、滂沱と涙をこぼした。

「誰方樣です」先よりも少し大きな聲で又聞えた。

「ハ……イ」娘子は極く低い聲で答へて、涙を袖で拭ふなり荒々と猿戸を開けてつと這入つた。

* * * * * * *

「ねー君子、そりや辛いだろう、儂にも經驗があるよ……、有り丈けの精出して、忠實に働いても御主人のお氣には召さないんだから……。お前の樣に年端も行かん者が……何うして御主人のお氣に召す樣に働けるものかネ、當然だよ、雖然、それが世の中だから……、まア〱辛棒して……」はふり落つる涙をそつと拭いて「儂だつて、お前に恁んな辛い苦しい

思をさせたくないんだ……が……お前も知つての通りお父樣が……お酒が無ければ氣が濟まないつて惡性だから……、先ア不幸な者に生れたと思つてね、親に孝行をする心積で……暫く辛棒してお呉れよ」母は泣き〳〵言ひ含める樣に說き聞かすのである。

今まで默つて聞いて居た娘の君子は俯つと淚を拂ふて、「お母樣、堪忍して下さい、私が惡う御座いました……堪忍して下さい、何時……何時迄でも辛棒致しますから」云ひ終ると又泣き沈むのである。

「君、能う云ふて呉れた、お母樣は嬉しいよ。一時も膝元を放したくは無いけれども……、又お父樣が歸ると面倒だし、御主人も心配だろうから……、些とでも早うお歸り……、ねー君、左ア早う」早起ちかけて歸りを促して居る。君は默つて俛いた儘起ち上つて、共に門口まで出た。

「ね、君、辛いだろうが辛棒してお呉れよ、身體を大切にしてネ……」母は耳の傍で私語いた。



相談（選外）　京都　佐々木繁子

「ハイ」極く小さい消え入る樣な聲で答へて、

「ぢや、お母樣行きますよ」强ゐて明瞭した聲で云ひ放つたが、容赦なく溢れ出る淚を堪えて居るのである

「一人で行けるかへ、送らなくても……」鳥渡空を仰いで「月も暗いのに……」母は言ひ半して、何か考へて居る樣子だつたが、

「君、些とお待ち」ばた〳〵と家へ驅けて入つたが直ぐ出て來て。

「この半襟ね、先日伯母さんが私につて、貰つたのだけれど少し華麗過ぎるから、お前に進げるよ、他出のそれ、あの襦袢にお着けよ」

「お母樣、有難う」鳥渡展げて見てもう嬉しそうに微笑を洩らして居る。

「行つて來ますよ」君子は步き出した。

「ハア、氣を付けてね」君子の後ろ姿を闇にかくれる迄見送つて居たが、見えず成とほつと吐息して、月を見上げた兩眼には淚が一杯に溢れて居る。

月は今雲を放れて明らかに人通りも無い町を照した。

何處やらに蟲が鳴いて居る。

母子の情、奉公人氣質、それ〴〵現れて居る、筆も老成して居る、一字一句に氣を附けて書いて居る、少し小說らしい型に入れやうと工夫し過ぎた難もあるが、此位ならば既と云ふ程ではない、前途に望あり（選者評）

○出鄕

花月女史

殘月淡き並木原曉露冷かに、一箇の行李を肩にして、行手を急ぐ孤影小く、顧みれば、鎭守の森は、無限の意味あるかの樣に、こんもりと茂りたる奥の一筋道を、眞直に行けば、僕がなつかしの、したはしの、父君、母君、はた弟妹の家のある街である、されど、こゝからは迚も見ぬ、嗚呼、僕は不孝なれど敎育はうけなかつた、薄情なれど薰陶はせられなかつた。しかも、今は餘儀なく此罪を犯さねばならぬ。あゝ書齋の窓白らんで、桔槹の音、厨に高き時、我一家の驚き殊に父母の驚愕は如何であらう？。あゝ僕は不孝だ、實に不孝だ、如何にして此大罪を償ひ得べきか、それでも前途洋々たらばまだしも失戀者の成の果は、大方解めてある、さしてゆくへは、浮世の眞只中、寄邊もない大海に、舵も櫓もなき一葉舟、今にして、彼五味君の熱情を知らなかつた以前の僕が孃に對する當時の希望の嬉れしかりしを追想すれば、實に恍として隔世の感がある。あゝ孃の昨今は、何を思ふて、そして何をして居るであらう、友禪の衣配りにいそがしいてはあるまいか、はた、琴の組歌に戀の俤を歌ふてはあるまいか、されど、明日よりの孃の境遇は如何であらう、必ず僕の心は誤解せらるゝてあらう、それに相違ない、乾度それに相違ない。が、其次に來るべき問題、實に畢生の大根事。僕は迚も其吉報を聞くに堪へない。否、彼の孃の心は、そんな薄弱なるものではあるまい、されど父母としての義務、社會としての制裁は、如何しても獨身で終ることを許さぬ。されど、あゝ、あゝ、されど、何を痴な、今は關係なき他人の行末に對して何の焦慮。もう思ふまい、もう、もう、決して、決して、思ふまい。俄に耳につく舟歌、こゝは名に負ふ會津橋、わたればはや西谷村である。

多くは女性を主人公とした作であるのに、男性を主人公としたる事は本篇の特色で、感慨を述べたのも、出鄕して行く途もいゝが、今一歩叙景の筆に韻致があつたら、もツと引立つたてあらう（選者評）

○失意の人

奈美木翠子

「ネ、左樣してお呉れ、此塲合仕方がないから」

「……」

「それァ察しる。美千さんもさぞ苦痛からふ、私も苦

痛いが、併し少許の中で又暫時に一所になれるよ、ナーニお母さんだッて直きに了解るだらふし、直ぐにも不自由するのだからネ、兎に角今の所は眼を閉ッて一先づ歸宅ッてお呉れ」「ハイ、歸ります……二度と實家の閾は跨ぐまいと固く誓つて嫁たのですけれど……是れも皆私が不行届ない計りで貴郎にもとんだ御心配を掛けまして誠に濟みません。

貴郎さへ其御精神で被居れば、實父や實母には面目なう御座い升けれど姑さんの御心が解けます迄何時迄でも忍んで待つて居りますワ」「オヽ什麽か左樣してお呉れ、美千さんの實父さんには私こそ面目ないので、何、是限り離縁ると云ふぢやなし、例令如何事が起らふと私の心は美千さん、お前より他にはないだから、それ丈けは安心して……」

妻の美千子は愁ひの中にも嬉しさ餘つて、眞心から感謝の意は涙もつ眼に表はれて、這麽優しい夫に持ッた吾身の幸福を今更のように喜ぶのである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

木下薫が美千子と華燭の典と擧げたのは、つひ昨年櫻に人の出盛る社會は暖かい春の頃であつた。此れより先き薫の父が未だ存命の頃親しい友人の家に總領娘の菊江と云ふのが居たが、薫の母には甚く馴染んで、美千子のよーに人に物言はれて頰を染むるでもなく、稍もすれば、母を措いても差出ると云ふ風、教育は無論内氣な美千子には遠く及ばないが、至つて華美好で、而も如才なく、客の應對振りの上手な所をも甚く氣に入つて、將來は薫の……と、それとなく菊江の兩親にもほのめかして一人ホク〳〵樂しんでゐたのである。所が意外の事から美千子と婚を結ぶ事となつて、夫婦の愛情は日增に加はる計り、到底此愛を菊江に移す事が出來ず、遂に今日迄我慢に我慢を忍んでゐたが昨日美千子が僅かの失策から無情にも、離れ難き夫婦の愛を、生木を劊くが如き所置に出でたのである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

搊落の秋の日は最うトップリと暮れて、七日餘りの細い月は淋しく門の柳に懸ッて虫の音は斷れ〳〵に嘯いてゐる。

美千子は顏色も青褪めて一人想ひに惱みつゝ力なく玄關の襖を開けたが外には車夫が提燈を點けて、心惡くも主人や遲しと待構へてゐるのである。

美千子が名殘惜しき一步を踏み出そうとしたとき、再度襖が惶急しく開いて、婢のお竹「オヤ、奧樣、私つ

い存じませんて誠に失禮致しました。愈々お歸り遊ばすので……」もう眼は涙である。「ア、一先づ……」と計り、人目も耻ぢず啜泣くのである。「お前にも隨分世話に成つたが、今後とも旦那樣には氣を付けて下さい、さぞ御不自由てせうから」「ハイ、旦那樣の事は最う決して御心配遊ばしませすなー、及ばず乍ら私が出來ます丈けは……けれども御隱居樣がもう召使て下さりますまいと思ひまして……」折柄奥に姑の聲「竹や、竹ッ」とけたゝましく婢を呼ぶ聲に、お竹は一寸顧みて目を顰め「ハイ只今」と計り「それては奥樣、御氣嫌よー」疾くも車は失意の人を乗せて遠く暗へ消え去つた、又と「竹や竹、オヤ、這麽所に何を仕てゐたの？先刻から呼んでゐたのに聽へないのかへ」「ハイ、只今あの……奥樣を」「何？奥樣、美千子が什麽か仕たのかへ、それだからお前は不理解者だつて云ふのサ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お竹は薫の切なる願も聽かれず、其夜限り暇を與へられ、入替ッて行儀見習として此家の人となつたのは彼の菊江てあるが、それからと云ふ夜は曾てなき程の大きな聲が母子の間に折々交されたが、此頃夫れがバッタリ停むだと思ふと「アノ優しい旦那樣は近來何處へ行つたか、トント姿を見せない」とはお出入の八百嘉が話す所である。

苦なしに描かれて居ると云ふだけて、精神には是と云つて取る處もない、短篇の材料として餘りに大きな材料を取るのは損てある、小說は必ずしも大波瀾や、大葛藤を要しないので、殊に短篇ならば、一寸した處に人情の急處を捉えてほしい、此作者も小說壇では有數者の一人乞ふ自ら努めよ（選者評）

○友の身の上　韓國　手塚靜子

舊校に居た頃には勉强家であつた全級生の松本重子さんが、此新校へ移ッてから教授の時間に窓の外を覗いて深い物思に沈むので、學課はもとより先生の注意さへも耳へ入らぬ事があるので、級では重子さんを疑ひ始めた、こふ云ふ事が毎度あるので、其疑はだん／＼と深くなるばかしてある。今日も亦何日ものやうに教室の窓から覗いて居たのが先生の目に留つて、毎度の事だからとて、遂に教員室まで連れ行かれて調べを受ける事になつたので、自分は重子さんの事が妙に氣になつてならぬので、先生や重子さんの許しを受けて教員室へ這入つた。圓形のテーブルには草色の羅紗地に黒の摸樣のはいつた覆が懸つて居る、其向ふ側には受持の先生が控へていらつしやる、其前に立つて袴の紐を弄つて居られる

のが重子さんである。級中第一の秀才年十八で、色の白い何處となく愛のある乙女である、自分は重子さんとは心までも許し合つた親しい友であるに、まだ重子さんの身の上を知らぬので、たゞ哀れな者とより以上は聞いた事がない。

先生はいろ〳〵と尋ねられた、重子さんは美しい目に涙の露を宿して、其身の上を話された、先生も私しも熱心に聞いて居る。

重子さんは八歳の時に惠み深き母に逝かれ、十三歳になるまでは繼母の手に育つた、其年たよりにしていた父は腦充血で呼べども返らぬ旅路を辿つた、繼母は家の財産を持つたまゝ幼い重子さんを殘して姿を隱した、兄弟とてなき重子さんは云ふも哀れな身となつた其後は一人の叔母の情にて今の女學校まで通ふ様になつたのである、母を失ひ父を失ふた當座は、小供心のあまり悲しい思ひもせなかつたが、成長するに連れて次第〳〵になくなられた兩親の事を偲び出て、慕はしの心は日一日深くなるばかして、つい此間貯めて置いた金で小さながらも石牌を造つて、朝と夕とは必ず其墓に參つて香花手向けるのが一つの樂しみとしていたのである。

重子さんが此新校へ移つて來てからは、朝と夕と戀慕ふて居る兩親の墓が目に着いてならぬ、つい教授の時に想ひ出して教室の窓から、あの墓を見て居る處を、先生に注意されるのです。

と語り終りて過ぎし昔を偲び出てか、玉の如き涙を惜氣もなく落すのである。

墓を指されて其方を振返ると、丁度重子さんの教を受けて居る教室の裏手の小高き岡に、まだ新らしき花崗石の墓、朝の太陽を浴びて光つて居た。



着かへ　（選外）　豊橋　菅沼實子

好奇心に釣られて讀まれる作であるが、墓が何うして其學校に近くあるのか、其由來を一筆書き添へて置いたなら、今一層讀んで得心が行つたらうと思はれる（選者評）

○離れ鳥

津市　松尾華子

「貴女、今度は愈々御永別れよ……」

淑子はしみ〳〵と云つてうなだれた。

幼な友達の今の樣な身になつても姉妹の樣に慈み合ふてゐる綾子は、其靑い顏、骨立つた頰凹つた眸、髮も懶げにこぼれて寢衣姿に半身を起した肩付の細そりと落ちるやうに瘦せて白い玉の樣にふつくらと肥えてゐた手の今は骨立つて、がつくりとうなだれた首筋のあゝ今にも折れそうなと今更の樣に哀れな友の身を眺めてほつと細い溜息とこれがわが學校に才色兼備の橘淑子として名高かつたわが無二の友の姿であらうかと思つたのである。

「いゝえ貴女そんなことがあるもんですか、淑子樣あなたは可けませぬよ、自分から氣を腐らして了ふんですから……」

「いゝえ何と仰しやつて下すつても私はもう決心してゐますの、ねえ、こんなのですもの」

細い弱々しい自分の手を出して見てほつと吐息をついたが、身近の友の丸々と玉延べた樣な柔かな右手を昵と握つて、

「よく肥えてゐらつしやるのね、貴女は幸福よ」、

綾子は何とは知らず耻しげに微笑むだが。

「何にも幸福じやないわ、私家庭なんかてもの最う厭厭し了つたんですもの、夫に愛は少つともありませむわ」

淑子は其可愛らしい面を見つめて淋しく微笑むで。

「まア幸福じやありませむの、夫は立派な方てしやうそれに許嫁……」

「もう充分よ分りましたわ……」

「ホヽヽ怒つたの。而し綾子さん」

「はい」、と紅くなつた首を上げる。

「又愚痴ぽい樣ですが私は貴女の御顏を見る度に思ふんですわ、私はなぜこんなに慘めなんだろうと」

「はアですけれども……」

綾子は思はず答へに苦むだのである。

淑子は此家に士族として嚴粛家として名高い白髯の老父の手に又密の樣な母の愛によつて育てられたが緣あつて去年の秋、當地の師範學校敎頭山本貞雄なる勉强家として名ある人の許へ嫁いだが、何と云ふ友は慘めな身に生れたのであらうと綾子は思つた。獻身的な夫の愛情に醉ふた淑子の生命は直に一ヶ月餘にして斷たれた、夫は不幸遺傳性なる肺炎を病むだので子の愛に引かされた雨親は「貞雄も氣の毒がつてゐるし」と云ふ口實の下に泣いて泣いて夫にすがる愛らしい淑子を强て離緣さして家に連れて來たが淑子は何時しかヒス

テリー性になつて此室にのみ閉ぢ籠つて今は他の病さへ併發したのでかく窶れて了つたので、而も其夫は先夜空しくなつたとのことである。淑子は目を濕ませて

「ねえ綾子さん、私始終そう思つてゐますの、親が私等の中を割いたのは生木を割いた樣なものでしやうそれが眞の「愛」でしやうかと。私は夫と一所に死なして下さる方が嬉しいわ……」

「ですけれども……」

「いゝえそうよ……」

と淑子はそつと手巾で臉を拭つたが遮ぎつて。

「私はもう決心して升のよ、汚れた下界で苦むだ變りに二人は天國で樂しいホームを造らうと思つてゐますのねえ、神樣はきつと幸福にして下さるでしやう」

綾子は神の宣言を聞く樣に思つたので驚いた樣に四邊を見渡した、床に秋草花を飾つた閑靜な離家！庭に葉摺れの音さら／＼と聞える、風が出たのであらう。

綾子は間もなく暇を告げだ。路々俥に搖られ乍ら二人は天國に樂しむことを得るだろうかと考へてゐた。

病床小說は隨分多數に來るので選者も聊か閉口してゐる、殊にそれが不如歸式に出來たものが最も多いので、單調に飽かしめる。此作の如きは其中では、しツかりした書きぶりで、あぶなげなく筆が運ばれてある（選者評）

文藝遊戲　人形の衣服

（十二月二十日締切）

文藝遊戲の第一回は姉妹合せて、それは新年初刊に發表いたしますが第二回は人形の衣服と云ふ題です、何う云ふ事か左の説明を御覽下さい

▲極く分り易い事で、どなたにでも書けます、つまり此處に一つの人形があるとして、それに衣服を着せるには何んなものがよいか、諸嬢のお考へを聞くのです▲ハイカラでも、日本風でも、何でもよろしいが只能く似合ふやうに考へて下さい、勿論子供の人形です▲襟、襦袢、裾など細かに書いて、摸樣や色合も成るべく精細に書いて下さるとよろしいです、▲一つは色彩の配合、美の觀念を養ふ助けにもならうかと思ひます▲發表は二月一日▲懸賞は一等より五等まで手輕で面白いものを差上やうと考へて居ります、何うか奮發して投稿して下さい▲なほ文藝遊戲の第三回は近頃最も奇拔な趣向を凝らして諸嬢の寄稿を仰ぎたいと工夫して居ります、新年の紙上で發表いたしますから御覽下さい

新笑話　編輯局選

天　○十九世紀

福岡　よね子

私の前に大手振つて通ふて居る女學生二人わざと高聲で甲「村田さん今年は何世紀てしたかねえ」乙「まああなた二十世紀てすよ去年が十九世紀てしたから」

地　○小供心

上毛桐生新宿　永竹鶴子

妻君が小供を連れて或家に行きますと、小供は「叔母ちやんの家は雨が降らないかへ」と云ひますと、母はたまり兼て「いやだよ此子は雨の降る家が有物かねへ」小供「だつて母さん僕の家は降るじやないか」

人　○かな

常陸國石岡町守木町今泉方　義子

老人「東京の徳次は中々氣がきつて居るな、漢字が讀めまいと思つて電報を假字で打つて寄した」

秀逸

○上り　香川　高松藤子

小供「お母さん東京は、土地が高いと見えますね。」母「何故。」小供「だつて東京へ行く、汽車は、上り上りつて、いつてゐますよ。」

○おあい憎　出雲　中村ちか子

貴女まあ久し振りに來て下さいましたね折惡じく今日はいつにもない取散らして居ましたね！傍の子供「母ちやんいつも此の通りだよ」

○十六　京都　むらさき

母「なぜおまへはそんなにねんねいだろふねもう來年は十六てすよ」娘「だつてお母さんから見れや子供だは」

○前に乘る　京都　橋本みつゑ

滊車に乘つた事の無い者『もつと前の箱へ乘らう。』『此箱でもいゝぢやないか。』『いや早く到着から。』

○修身　山陽　紫雲子

先生生徒に向つて品行に就て熱心に話してゐると一番隅の生徒しきりと惡さをしてました先生目ざとく見つけて『林樣なにをしてるんです。今のお話何とお思ひです』生徒『早く止せばよいと思ひました』

○謠曲　九段　よし子

娘「御父樣よく「好こそもの丶上手なれ」と申ますが僞てすねー」父「なぜ」娘「だつて御父樣は謠が一番御好てしよう」

○元祿踊り　越後　村山芳枝

娘「お母さん元祿踊りはどんな風に踊るの」母「矢張り四角に踊るのよ」

○時計　麹町　淺井千鳥子

甲「横町に落ちてました時計は、貴女のですか」乙「あの…はい私の落したので」甲「金側ですか銀側ですか」乙「へーまざりて…」

○御飯　上毛　凰磨子

小供「お父さん、御飯食べて直ぐ運動しちやいけないつて、先生がいつたよ、少し休んでからならいゝつて」父「そうさ、飯食つて直ぐにいごくと、飯が皆な足の方へ下つて仕まうからさ」

○盲　因幡　三橋　春代

電信柱に突當つたる盲「こりや人を馬鹿にするない盲だと思つてー」

○朝眠の兄　越中　岡田　梅子

朝眠の兄午前十時に起きて「モー何時頃ダロー」妹「アラ、兄さん、自身て眠て居た時間、知らないの」

○　山口　伊藤　紫董

親爺日なたぼつこをして居ると子供其禿頭に墨をぬる母親が見つけて

母親「又そんな悪戯をする―」

子供「でも禿が光つて眩いもの」

○　本所　小林千代子

交番に鼬鼠を持て行くと巡査怒て曰く「コワ〳〵貴様は太い奴だ」三「ヘイヘイ是からは最ふいたちません」

○ランプ　備後　さなへ

お花「竹や、ランプつてなに？」

竹「火を點すものでございますよ」

お花「うそよ、兄さんが英語だと仰つたは」

○判任官の奥さん　神戸　花蝶生

貴孃なぜ辭職なんか成さるの、もうじき判任官には成れますよ其れから辭職成さい、そうしたら判任官の奥様よ。

○オフトン　武藏　山口　邦子

今年六才の妹に向ひお客様がいらしつたら早くザブトンをおすゝめと敎へました、

或日妹をつれ友の家を訪づれた處フトンの出てゐを見て女中に向ひ妹は大聲に「おはやくオフトン」

○　名古屋　小山かく子

眞暗な二階に手探りで上つて行く盲の按摩さんに向つて『あなた暗くても分りますか』

○好き嫌い　肥前　孤秀女

爺曰く「俺孃様の様な若けエ美しい方みるのが何よりか好きだ」

孃様曰く「あたい、爺やの様な皺クチャのチョン髷爺見るのがなによりか嫌よ」

○早耳の女中　三浦　時子

束髮の令嬢「松や御隣の小間物屋で白の一輪のかんざし一つかつてきておくれ」松「おや孃様そんな安いのがございますか」

○汽車の遅刻　下總　染谷　枝葉

遲刻登校生徒「今日は汽車が遲れましたので…」

先生「これから氣をつけなさい」

○身代　兵庫　秋山靜子

今年六ッになつた信ちやん「お母ちやん宅の身代皆お祖父ちやんが苦勞して作へたんだつてネほんと、そして何をくろうするの？」

○ハガキ　大阪市　櫻木美智子

田舍のお婆さん、一日郵局局へ行ッて、婆「葉書おくれなアれ一枚何ぼだッか」受「一錢五厘です」婆「そんなら三枚買ひまッさかい一錢宛に減けとくなアれ、

編輯局選

はがき文

特別第一賞

○我家の背戸

静岡　貞水女

私の家の裏には大きな柿の木が三本と、密柑の木が三本あります、柿は大天龍、畫柿、澁柿で、密柑は唐密柑、本密柑、酢密柑であります、すぐ傍の山には栗の木があつて仲秋には葉褐色の胸を開く、それは〳〵樂しい。

味ひの神は此背戸に幸せん。

特別第二賞

○臺所の朝

京城旭町二丁目　奥田惠以子

艶々しい竈に煌々しいお釜拭き馴れた棚に磨きゝつた銅輪入りの飯櫃塵一點もなき内井戸の週圍東窓より差込む朝日は今お掃除の漸く終つた臺所を照して一層の美を添へた。

女性の發見したる美。

特別第三賞

○木犀の花

鳥取市東町　山根綾江

はげしく降つてゐた雨がやんだので、小庭に出て見ると、それはそれは庭一面に、木犀の黄色の花が水に浮んでゐる。あのよい香が、此の水がひたら地から香るであらうか。

空からも。

天

○池水

仙台市北目丁三十三番地鈴木方　たへ子

妾は何か面白くないことがあると、すぐ半町ばかり離れたお寺の池へ參ります、そして廣くて奇麗な水の面をジッと眺めて居ますと、今までのことは皆忘れて了つて、まるで神樣になつたやうな心持になります。

文に清淨の氣あり。

地 ○石

若狹　長谷川英尾

私ね暇さへあると濱を散歩するのよ、そして、いつも、お土産に、石を拾つて歸るの、平つたい石、穴のあいた石、四角な石、圓い石、あゝこの石と、この石で、燈ろう、造つて見ようなんとも思ふ。

玉津島の石は安產のお守りになるとやら。

人 ○妾の村

越後國中頸城郡水上村　堀川弘子

妾の村は極々山間の僅十戸足らずで、芳紀の處女は妾と四人毎日〳〵こぞつて田甫暮し、學校も尋常のみで高等科と云ふものもなし、只々毎月一册づゝの女子文壇あるのみ。

十戸の村にも女子文壇あり。

秀逸

○不經濟

埼玉　百子

お祖さんの袖は一尺三寸、お母さんの袖は一尺五寸、私の袖は一尺七寸、といふやうに、だん〳〵袖丈けを長くしては、他の事が經濟でもやつぱり不經濟。

時代の華美と袖の長さ。

お化粧（選外）和歌山　津田梅子



○晩餐

羽前　白菊子

父様の御作りなされた新米に私の拾つて來た栗を入れた栗飯、汁は兄様のお取り遊ばしたきのこ汁、それは母様の御料理なので皆がうまいうまいと食ました。

田園料理。

○夏休み

上毛　羽島綾子

お母様は「隙があつたら少し絲繰でも御習ひな」と仰しやるし兄様は「私が居る中だけても英語を敎へさせて下さい」とお云いなさいますの。露深い草葉の陰に永はに眠つて居つしやる御父様は何も言つて下さらないでせうか。

無言の敎訓。

○夢

東京　京の女

博物館の風俗人形の內大名の姫君實に好いと羨望に堪へなかつたら其晩私もしかけをきて御琴を調べて姫と

おつきとて御夜を散歩した。

千代田城の大奥。

○大掃除　大坂市　大坂ひろ子

今朝は遲いからと大急ぎて歩行てたらまあ大變大掃除の爲通行止、お通んなさいて言て異て這入たは宜かつたが道一杯疊やら簞笥やら其中を拔けつ潜りつ漸く行着いたのが定刻に五分前、然も着物も袴も塵まぶれて。

すゝはきや走つて通る京の町。

○餅搗き　京都　橋本みつ

一人の男が杵の隙を窺ふて、餅になりかけたのを拳て捏廻しては、ヒヨイ、ヒヨイと退く。その拍子に一人の男は大上段にふりかぶつた杵を親の仇とでもいつた樣に滿身の力を込めて打下して居る。弟の騷つたら！

餅搗や犬の見上ぐる杵のさき。

○蛇　山口　川浪顯宗

學校の歸るさお別れして、田甫が近いと急いて橫へまげましたら、まあ、蛇が寢て居るてはありませんか、喫驚しましたよ、其のはづみに下駄の尾が切てスミレのインキ壺がこわれて、それは〳〵紫の袴も無茶になりました、其の時橫道は踏むてないと感じました。

白蛇、紫蛇となる。

○五分間の統計　阿波　内田茂子

妾朝起きて、窓に倚り道行人を望めて居たら、五分間に、學生が三人と、畑に行く爺一人、村役場へ通ふ書記一人、町へ花賣に赴く乙女一人、行商人二人、學校の先生一人と、牛引く童と、合計人九人と牛一匹通つた。

銀座街頭ならば幾百倍。

○純白の百合花　愛知　すみれ子

昨日學校の歸り路、辻地藏の前で身なり賤しき花賣の少女に會つた、憐れに思ふて一本を買つて机の水入に挿して置いた蕾の百合が、今朝一點の傷もなく奇麗に咲いた、しかも純白なのが。あら美しい事。

花賣は百合の精。

○かたさせすそさせ　南品川　萬千田

まあいゝ事と、妹の聲に聞耳立つれば、灯なき次の臺所のあたり、虫の音ほそうあはれなり、針の運び忙しき母上の、かたさせすそさせが一生懸命ないてゐますよ、との仰せに、思はず雜誌を閉ぢぬ。

夜寒の賦。

○續々虫の社會　常陸　義子

米突虫は諂諛家の如く飛び來りて叩頭し、以我蜂を習字敎師とせば髭虫は紳士なり、蟬は經讀む僧にして蜩は其日暮の貧民なり、蠶を絲取女とせば尺蠖は

呉服屋なり、足蚊は盗人の如く臭放虫は下宿屋の書生

虫も大抵は諧謔にとりこにされました。

○軍艦の名　　佐世保　藤浪子

悲惨な歴史をもつたのは軍艦三笠、旅順の壮絶な夜襲を偲ばせるのは朝汐、霞、快絶！敵丁督を捕虜としたのは漣、あゝそうして千古の恨みを語るのは懐かしい義兄様と共に沈んだ初瀬。吉野。

流石は佐世保のお方。

○世界各國婦人の好み　　亞桂

英國婦人は、氣品高き紳士を好み、米國人は、金持をよろこぶ、獨逸人は軍人をもてはやし、伊太利人はこれに反して詩人的理想のある者を好む、然らば、戰捷國たる日本婦人は如何。

既に課題にて聞けり。

○芋畠　　松江市　寺本芳野

或る朝私は裏の畑へお芋堀りに出ました、所が茎ばかりで肝心なお芋は一つも有りませんので、私は大變失望しました、そして脇を見ると、「米價騰貴に付き子は皆宅で養ふ」と書いて有りました。

いたづらか、盗人か。

○月いろ〳〵　　秋田　大越みさを

美人の眉の様なは三日の月、草刈る童の鎌の様なは六日の月、乙女の櫛の様なは五日の月、塒出た蝙蝠でも射さらに弓張つてるのは八日の月、そして圓いのが鎮守のお宮の神鏡に似て居る。

単に眉、櫛、鎌、鏡、弓と云はず、更に形容を類叙してよし。

○栗打　　徳島　山口ながれ

八十歳の祖母様と二人て、種を惜まなかつた罰で、三度迄まざいた栗が早黄金色に熟し、今日は日曜一人で引受けて栗打、祖母様のあら妙な栗打人、竿の上る毎、空を眺むると、御笑顔で仰せられました。

打つて餅にする。

○時計の話　　臺北　春雨子

草刈をして居りました土人、丁度午後四時を打つた時御孃さん時計、話しありますと云ひますから何かと思つたら、時計が打つたと云ふ事でした、餘りのおかしさにおもはずふきだして御母さんからしかられました

セコンドの響はさゝやき。

○郵便屋さん　　川越　山田松子

郵便屋さんの中でも、戀しい、故郷の母様のお手紙を持つて來て下さる方と、なつかしい親友勝子さんの御手紙を持つてきて下さる方と、待ちに待つた、女子文壇を持つて來て下さる方が、一番よい郵便屋さん。

私の方ては諧謔の原稿を持つて來るのが、よい郵便屋さん。

○葡萄　堺市　竹里文子

毎朝裏庭へ出て能く實つた美くしい葡萄を見ると、いつも斯う思ふのです、あの葡萄の汁で白絹を染めて、神様のやうな優しい詩人に、聖い愛の詩を書いて欲しいと。

面倒ですナ。

○百面相　高崎　眞佐子女史

お父さんのそろ／＼髪を生すお顔、お母さんの綿造で急しいお顔、兄さんの自轉車で歸て來たお顔、下女の朝掃除した時の紅葉した顔、私はお正月の近いので小使が澤山頂けるので嬉い顔。

下女の表情は胸の血汐のくるめく如し。

○私の空想　麹町　淺井千鳥子

海軍大佐の父様、交際家の母様、博士の伯父様、學士の兄様、文學好きの姉様、陸軍中尉の甥、海軍軍人希望の弟とを持つて、薔薇や、菫や、百合の花園で樂しく暮して見たい。

猶ほ理想として抜けたる人あり。

○沼波先生　信濃　山浦楓月子

本誌の沼波先生は：丈少し高き方色少し黒き方近眼鏡で八字ひげを生やし愛嬌なく寡言で言語明瞭煙草と酒を好まれ年齢は三十歳前後で奥さん無くそして社交術に富んだ方だと思ひます。

あたるも八卦、あたらぬも八卦。

○霜の朝　[illegible]子

季候でもなく大霜の降た朝、戸を開るが早く、隣近處は窃盗の取沙汰＝サア大變＝明日の仕入金を盗られた呉服屋、昨日の賣溜を盗まれた乾物屋、お客の時計を盗まれた旅人宿、借た證文を盗られたのが私の家

必ず興あり。

○走馬燈　横濱市　佐藤芳子

公園の方を見ると空は一滞にオレンジ色に染つて倶樂部の白い屋根がきらきらと忽ち其前を電車が横切た直乳屋の車が行く其後を波止場通ひが二三人通る又電車乳屋と同じ様に通る様は丁度大きな走馬燈の様である

横濱は三十年前の一孤村。

○つまらん者　名古屋　小山かく子

音樂會の演奏者位つまらん者はないの。なぜッの君、十日も十五日も苦勞心配したお稽古を五分か十分の間に歌ふのだに、聽衆は皆ポカンとした顔付きて、ちやかして聽いてるぢやありませんか……。

謹聽。

○母の愛　長野縣　山田くに子

私の入賞した女子文壇を、たしかに抱てねたはずてあ

るのに、今朝さがしても影がない。誰の惡戯かと腹立たしく、急ぎ母樣にたづねると、「美代さんの大切な御本が床の中に有たのでそつと本箱へ入ておきました」とあゝ、やッと安心。

「女」の字「子」の字「文」の字「理」の字が夢の中に手をつないで踊る。

○今年は夏　水戸　山田千代子

今年は避暑に行くのを止して朝貌を百鉢計り造りました。そして毎朝誰より早く起きては奇麗に開いた花を日のあたらない葡萄棚の下へ運んで、ベンチに腰をかけながら新聞を讀みながら皆の起きるのを待つて居ます。

百花爛漫。

○個條　神奈川　中山かづ子

私は自分を始め、妹等の心がけをよくしたいと思ひ、色々と箇條を立て、それにそむいた者は赤い點を、つける事と、きめました。

其個條が承りたい。

○吐息　淺草　小野寺　露花女

商人は不景氣の吐息、農夫は天候不順の吐息、漁夫は不漁の吐息、學生は落第の吐息、紳士の吐くのは氣焔、辯護士は敗訴の吐息、文士は沒書の吐息、青春男女は失戀の吐息、サテ私の吐くのは青息ばかり。

黒畑は都會の吐息。



有明濱（選外）濱松　麗家良子

○初柹　神田區　紫香女史

今日柹を買ふ。甘きも澁きも、むきて見ぬ中が花なるべし。「澁柹や年々食つて見る心」の意地きたなさも、趣多くて、此の初柹に思ひ合されぬ。

澁かろか知られど……。

○御手紙　神田　入代美代子

御父樣はいつも身軀を大切に勉强せよ沈默は多辯にまさると御母樣は風を引かぬ樣氣を付けよと、兄樣はいつも少しばかりとてお金と郵便切手が入れてあるどれを見ても淚の出ないものはない。

故鄕有母秋風淚。

○公園　京橋　今泉磯千鳥

洋風にして淸淨なる日比谷公園を學生紳士淑女の遊步塲とせば、和風にして廣大なる上野公園は敎育家の縱覽所なるべく、混雜にして有名なる淺草公園は軍人小兒の遊覽所にして、寺院を以て名高き芝公園は僧侶の集會所なるべし。

○贈物　堺市　濱江子

郵便！騎けて見ると在米の父よりの小包。母の前で開いて見ると姉弟等への贈り物妾へは美しい英書。アラ妾にはまだ讀めないのに早く勉强して父の贈り物に報ひましよう。

○妾の宿

本郷　久子

野分の風に散る木の葉は窓に訪れ、下行く小川の水の音は岡の松風と和し自然の美しき音樂を奏て妾に聞かしてくれます。妾はどんな繁華な處にある家よりも此處が一番好きてす。

○御奥樣

小田原　富　久子

此間殿樣の御茶碗を臺所のふみさんがこはした斗りだのに、今又私が奥樣の御大切のお湯呑をつい手をすべらしてこなみぢんへツト驚いてる恐恐る御前に出て御詫び仕りますと「アヽそうかへ大分連發だれ」とお笑ひ遊ばした。

○私の同胞

長岡市　土田りた子

私は兄弟が四人ありました、けれどもかなしい事には、一番と二番の姉には、少しも顔形も、みない内に、死に別れ、そして九才の時に、父に別れ、又、三番目の姉にも別れました、そして今では、母と兄と私とてす。

○私の樂しみ

播磨　高見琴子

克く働き、克く勤めてそして寢るのが一番の樂しみて有ります。

○心持のよい時

神戸　たみ子

湯上りと、朝早く起きて深呼吸をした時と、すが〻しい音樂を聞いた時と先生にほめられた時と、よい景色を見た時。

○德義

奈良　白藤女

手紙は遠い距離の人との談話てある、手紙に返事をしない人は話し掛けられて挨拶をしない人てある言葉を掛けられて返事せずに濟むてあらうかと」或る書て見てから妾は何な事情が有つても必ず返事は致します。

○栗二升宛

備後市　岡露菫

今朝風雨をおかして拾つて來た栗を充分撰り別けて見ましたら一番良い所が四升五合もありましたので妾は大悅て直に蒸栗にして東京の姉君と中學の弟とへ二升づゝ郵送しました。

○熟柿と烏

武藏　山口邦子

やれ垣の家の軒端に、色づいた柿を見あても烏が一羽鎭守の森から飛んてきて、熟柿のなつてる小枝にとまると熟柿は「遠方御苦勞」といはぬばかりに地におちてしまつた、烏は失望らしく夕日に向つて二聲鳴た。

○豐年の秋

備中　大橋知惠子

尻からげや向鉢卷の意勢よさ相な人々滿面笑を浮べて、今年は豐年だ米の增收が二割、私方にも一割八分、娘の學資が取れた、お正月は安氣に出來るなぞ豐年と增收との聲て滿々してるので今秋に限てシブイ顏してる人は一人も見えない實に豐年。

○自轉車競爭

能登　森田みつ子

今度北國新聞社の催して九十何哩といふ長い間を自轉車競爭をやるといふ話だがそれが爲に選手遙が躰を痛めればよいがと私は心配して居ります。

○嬉しい事

下關市　杉山愛子

嬉しいつて此の位嬉しい事はありませんてした其れは妾が門先に出て居りました時に誌友の山本花子様がいらしつて初めて御ものを申ました時これほど嬉しい事は御座いませんてした。

○羨しき事

下總　谷間　白百合子

私の見るにつけ聞くにつけ羨しきは、御兩親の健在せるお方、和睦せる家庭、讀書の暇を多く有せると、せち辛き浮世を外に屋菫にあこがるゝ令孃方。

○流れ行く水に

京都　堤登久子

妾は今宅より近き鴨山の橋の上に、イみて、浪花津の姉君戀しく偲びつつ、下の流を眺めて有りしにサツト吹き來る風に、手に持ちし野菊の一花ばつと、散りて水の上に、流て末は淀川となる水よ心あらば此の花戀しき君のみ傍まて乘せ行き、切なき此思を語れ。

○兄樣の御手紙

雲州　澄子

西都に御遊學中の兄樣よりの御手紙に、追々冷氣加はり秋氣颯々露散りモクセイの香ゆかしき時は天が吾等に與へたる勉學の時だよ、讀書の時

だよ……。

○雨　鳥取市　藤井　あやめ子

妾は此の二里が山野をものともせて、愛らしき學童の笑顔見つ、教壇に昇る女教員なり、汝、妾が心を憐れと思はゞ、二里が道を足運ぶ間にても、一滴の雫を空しく落さで今朝も早く學童の笑顔見せよ。

○月　遠江　たゞの

月々、私しは月を愛します、見よ一天曇りなくして下界を輝す平和なる面かげ、人は光りに浴してそゞろあるきに快哉と叫び、草木は惠みの露をあびて一日の疲勞を休めんとす、ア丶清くして氣高きは月日なるよ、

○錦にもまさる手織縞　越前　郁子

五圓六圓とお金を出してかつた晴衣よりも祖母樣が、孫の守りかた手に織られし手織縞の有りがたさ。その縞柄のいかにも、當世風にせばやとの御心儘しあり〳〵とよまれ、オリーブ色區々に。

○妾の弟　岡山　松子

可愛い弟の武坊、漸く寢入た樣だから、そつと行て見ますと、梅ケ谷の雛形の樣な半身を夜着から乘り出てまあ、何の夢を見て居るてせう林檎の樣な其頰々小さき笑みを浮べ乍らすや〳〵と眠て居りました。

○寢床の作文　山口縣　伊藤紫堇子

諸嬢の文章や詩歌を作らるゝに机に向つてなさるさうですが私は寢床でします、目を瞑つて晝間見た事聞いた事を靜かに考へると、心が定つてよい文章や歌が出來ます、と云ふ此の文も亦寢床の作て……。

○我が家の秋　尾張　森　郁子

竹垣に夕顔が一つ淋しげに咲いて、夕日が力なく光を放つて居ります。垣の向ふは直ぐ大江川の清流て、對岸の芒の村には遠砧の音がして、雁が三つ四つ啾々と鳴き過ぎて川下の楢林へ消へてしまいました。

○山家の冬の夜　相模　井上たけ子

冬の夜のやう〳〵更けゆくまゝに霜より白き月は冴へ渡りて破れたる軒を照らし、吹きすさぶ木枯の風は身にしみて折々窓を打つ木の葉の音凄く獨り小暗き燈火のもとに女子文壇を再讀して花の都の姉を思ふ、あゝ夜は長し。

○自慢はせぬもの　下谷　伊庭いそ子

私は至つて丈夫の質て是迄病と云ふ事は知ませんてした、過る日友の病氣を見まひに參りましたら、私の丈夫なのを、大そう羨らやましがられ私も大得意て無病息才だなんて自慢致しましたら其翌日から枕も上らぬ苦るしさ。

○小　僧　陸奥　山田てる子

今、夕日は向ふの家の白壁に美しくうつゝて居る、其の家の角をヒョイと出て來た、大きな風呂敷包を脊負た十四五の小僧、眠そうに歩いてゐたが、急に足を早め、元氣よくラッパ節を歌つて行つてしまつた。

○秋の日　秋田縣　武田はる子

今年三ッなる秀ちやん晝寢をして居ると蠅が一羽とび來たつて寢顔についた、すると秀ちやんが、だるそうに目を半分程開いたが又閉ぢてしまうた何んな夢路を遣ふて居るだらうか。

○姉　妹　秋田すみれ

私は姉妹四人て姉さんは女醫、次ぎの姉さんは產婆私と妹とは看護婦。

○わたしの理想　上毛　眞砂壽子

わたくしの希望は川添の廣い野に小さき奇麗な家を建て前の畑には色々の草花を植ゑ、後の園には雛をたくさん飼ひて和歌を好む高潔の精神をもてる人と二人ぎりて暮したいのです。

○火　事　秋田縣　華橋女史

警鐘に驚かされて、行き見れば、遊女屋の三四軒焔に呑まれて、家の頹るゝ音、遁げ行く人の樣、火勢は、赤き舌に、嘗め廻り恐ろしくも悽深し聞けば四年に二度の難に遇ひし由……ア丶不幸の人々かな。

○日　記　成田町　武田たき子

晴天、五月の節句朝草刈り休み、午前お母さんと民さんの家を訪ふ、午後民ちんと時ちんに綾ちん來る、歌留多をして遊ぶ、夜お父樣とお母樣と妹と妾團欒して茶を喫み、双六してから寢る。

○本年の月見　翀戸　梅子

親しき友三人今宵の月を能く見んと、場所の相談會は、開きぬ、一人は須磨か舞子が浜か、もう獨りは諏訪山か、海岸か、妾は家にて……日暮れども十五夜の月は雨雲のため、かげだに無くあはれ。

○必ず通る人　　函館　山本たけ子

毎朝六時頃きつと通る人は、湯の川の學校に通ふ勉強そうな生徒さん、車で店に行く澤田のお爺さん、手拭の姉さんかぶりにして水汲みに行くお隣りの新嫁さん此三人よ。

○笑　　松山　孤蝶女

今朝兄樣が着物を逆さまに着られたとて妹は笑ひ、學校で山田さんの袂から、蜜柑が轉げ出たので皆が笑ひ、夕餉のとき、弟が忙しく大口にお飯を食べて噎たのを兄樣がお笑ひになつた。

○父の自慢話　　羽後　櫻巷女史

今年の作は上作だ。僅か六ヶ月許りで是丈の收益があるのは何も及ぶ所でない。何だ三千圓、三千圓を月々に宛てゝ見ろ、貳百五拾圓、月給取にしたら先づ知事公が格だらう。

○見入る乙女　　愛知縣　牛田清子

播州はづれ、さゝろ峠の老松によつて、みだれ髮を海の方へ吹かせながら見入る乙女、「虹の輪、虹の輪、妾が戀しい人を乘せて淡路へ下る金帆小舟は今、其下をくゞつて行くの」

○月謝取主義　　房　枝

私立學校は突角もうけ主義が多い明日からミシン使用法を敎へ升月謝は入らないお機械を持參せん方は使用料七十五錢修身だと思つてきけば女子に一つの技藝は入用だとて隨意科のすゝめ月謝は前金拂一科五十錢。

○多くかゝつてるもの　　秋田縣　松田せい子

停車場待合處の紙札と木札、倫敦市や東京市の電線、人の住まぬ家の蜘蛛の巢、飯食ひ仕事にと雜誌の原稿書にかゝつてる人、高襟學生の學資金、貴顯紳士の交際費、それから青年男女の戀愛煩悶病に。

○汽　車　　山形市　寒紅寒女

カラン〳〵、早人が乘込んだ頃汽車は一聲ヒウ、と動き出したので乘後れの田舍婆は一散にかけ込み、聲を限りに叫んだアー汽車樣ドーカ酒代出すから待てドーカ、汽車は遠慮なく煙を殘して、立ち去つた。

○失　望　　宇都宮　芳野靜子

背戸の柿の木に、今年初めて實がついたので、お月樣へ供へ物にと、朝晩の丹精にて、實も赤くなり、十五夜も明日と迫つた今夜、はからずも、一ツ殘さず盜まれた。あゝお月樣より私の失望如何ばかり。

○行路難　　麹町　初　霜

何のものかは、至るところに青山あり、と出掛けたのはまだ昨日のやうに思ひますが、胸の痛いほど持つてきたお金は胸のいたむほどなくなつてしまふのですそして金一枚づゝ人の情もへつてゆきます、あゝ。

○美しい　　山口縣　山中けい子

青葉に宿る朝の白露、山路の白百合、遠望の櫻花、遠山の紅葉、菜の花に蝶の舞、下髮に桃色リボン、松にかゝりし月、波に碎くる十五夜の月、雪の手に紅玉の指輪、そして毎號かはる女子文壇の表紙。

○親の効能　　上毛　永竹鶴子

お隣の菊ちやんは小供の頃は大變親に可愛がられたから美しく思つたがお嫁に行つたのが今度で三度目だつて又心棒が出來ないで昨夜歸つて來たつて妾なぞ小さい時から嚴しく育てられたお影で今は氣樂です。

○今　朝　　山梨　伊谷てう

清らかな、秋の水に、牛身を摩擦して、それから裏のそば畑へ出ました。此所で深呼吸をすること數回、精神の快かなることは、何とも云へませんれ。

○かなしかつたこと　　兵庫　柳田白百合子

東京から歸神の途汽車中でなれぬ一人旅の心細さに急病に苦しめられた時都の兄樣から悲敷御消息に接した時御飯をたく時幾ら背おつてもまきの燃へなかつた時そして結婚した妹と新橋で別れた時。

○遠足運動　　岩代　武川たけ子

桔梗ちやんは、脇にスケツチブツクを、萱ちやんは、紐で信玄袋を肩にかけ、萩ちやんと尾花ちやんは、白足袋に草履、女郎花さんは靴、菊さん

と妾は草蛙。

○弟の寫眞　　福岡　よれ子

今日部屋を掃除して居ると、ふと古い書物の中から弟の十一二年前の寫眞が出た、まあこれが毎日私をいぢむるあの憎らしい信ちやんだらうか。

○好きな美術　　香川縣　益女

燒けて出て來てお色の白い大腹抱へたほていさん、山水明媚な、京都て生れた雛人形、絹地に刺繍て蝶の舞、お床に掛けた鯉の瀧登り、又一つには、女子文壇の懸賞圖畫。

○涙　　京都　花埜女

夜てあつた、ふと障子の中棧のガラスに涙の眼を認めた、世のすべてを呪うた時てさへ涙は陰鬱な筈の私の眼を美しく尊く輝かすのてあつた、あゝ、涙なきものゝ悲哀！それは如何に心寂しいものてあらう。

○朝の社會　　新潟市　岩瀬波子

太陽が出て此世に、美くしい活動の征矢を射ると、平和の夢を破つて速に店の戶明ける街や、驅せ廻る犬、曉を讃美する鷄、山も川も野も森も朝の靄然たる中に十二時間は社會と戰ふを覺悟して居る樣に見えた。

○我の殘念　　福井縣　黑川好久

高等小學二年の時、學の歸路、松平別莊の橫通て女の英國人と出遇ふた時に其人が何やら英語て質問れた我は唯冷汗が流るゝ許り默然佇んて居つた思へば小學何年と質問れたので、其時の殘念さは今に忘れられん。

○魔言　　青山露花女子

詩をよむ兒等の筆に入れば可笑しや彼等も又迷ひぬ詩篇三百疾くに古りて歌ふを聞けば皆戀と言の善哉人心早く腐れて窓のわかき子肉に餓ゑつ習しいつはりの聲をあげこ見えもせぬ空に靈を喚ぶ。



ふき掃除（選外）和歌山　鹽路ともへ

○花　　備後　さな　へ

朝顏はお祖父さん。菊はお父さん。ほーせんくわや、桔梗や、小さい草花は弟。

○小蝶のゆくへ　　陸前　濟子

きのふ畑へ行つたら深い小路の傍に、奇麗な朝顏が咲いてゐて、友なる小蝶が、度々接吻してゐた、かへりに小蝶の留守を幸ひ花をとつて來たが、けふ畑へ行つた時はもう小蝶はゐなかつた、どこへ行つたらう。

○姉の顏　　下總　川奈部たか子

故鄕から小包がとゞいたので、なんだろーとおやしみながら急いてあけて見れば、目鼻のついた柿や大きな栗ごろ〳〵ところがりだした。

○アイヌの子　　天鹽　天の舍

我はアイヌの子なり。されども日本の國民なり。歷史を肩にかけて、幅を利かさんとする意氣地はなきも、熊をひしぐ二本の腕は身に具はれり。

○妾が理想　　秋田　黑丸T、K、子

十五夜に冴え出づるお月樣を四つ集めてお友達女ピンポンをやりたいのと、富士山に登つて世界女王となり、そして、暑い夏の日に、太平洋程の團扇て煽がれ、冬は地球地の暖爐を頂上に据え、世界人民に敬れたきのみ。

○勉强　　滋賀　なかれ川

今朝おとつ樣が一番汽車て上京なさるので四時半に御出立なさいました未だ夜は明けないしお母樣は復おより遊ばしたて私は久し振に机前に座て洋燈に火を付けて國語讀本をよみました。

○結婚後　　紀伊　文子

妾のお友達の芳子樣は優しかつた兄樣がお嫁樣を貰つて以後酷くなつたとこぼして入らつしやるし、道子樣は酷かつた兄樣がお嫁樣を貰つてか

ら優しくなつたと喜んで入らつしやる。

○菊の花　伊藤あさ子

この春、お父樣の植ゑておかれた菊、毎日〳〵丹精をこめた甲斐あつて、今朝は嬉しや、白いのと赤いのとが、二つ咲つていつにない氣高い息を吹いてゐます。

○菊　愛知　紫露女

野山の菊はさつぱりとして質朴で田舍人の如く、花壇の菊は濃艶で都人の樣である、そして鉢植の菊は大事な函入のお孃樣。

○歲の暮　南多摩　乙幡もん子

何んとなく人心忙はしく話をしつゝ走る樣に思はる、彼方には鮭を擔ひし小僧あり、此方には風呂敷包を提げし人あり、或は煤拂の家あり、餅搗の家ありて世間頗る雜踏なり。

○私の一日　三河　長坂よし子

午前六時起床、家内六人打揃ひ、朝飯を食べて御隣のきく子さんと、裁縫の稽古に行きます、そして勉強約六時間、午後の三時歸宅、それから女子文壇を讀み午後六時家内一同打揃ひ、夕飯をすまして、後樂しき夢路に入るのです。

○親の恩　遠山柳子

未だよたれが出るのそれは胃が弱いんですよ能く物をかんで御上り厠に近い室は如何しても臭いから呼吸を淺くし肺がわるくなるので此方に入らつしやいつて色々丈夫な私にいつて下さる親つて何んといゝものでしやう。

○友思ふ夜　赤坂貮代子

着物縫上げてほつと一息物干に出づればいゝ月智飯山のあたりはぼんやりとして折〳〵こほろぎがなくあゝ今頃君は虫取りかそれとも初茸狩のおつかれにおやすみかと物思ふ折から冷風が身にしみ渡つた。

○きらいな人　長崎市　岩崎しづゑ

知らぬ事を知つたふりする人、つげぐちをする人、家の自慢をする人、先生にへつらいする人、さしてる人、不品行な人、虛榮心に富んだ人が一番きらい。

○貴重なる金錢　廣島縣　進藤吟月

一個月の學資金八圓以上、即ち約一日三拾錢にして、優に普通勞働者の日給に越ゆ、慈悲深き父母が、此の高價なる日給を、與へらるゝ余が父母に對する返禮は、學期學年末に於ける成績表たゞ一通。

○口癖　京都　千田星璐女

ナルホド〳〵と仰しやる父さんの癖、ホントーニは母さんのアラマーは妹のツマリと言ふは兄さんの母に無心を言ふのは弟のオヤマーは松やのアラヨクツテは姉さんの癖。妾の癖はれ羞かしいわオホヽヽヽ。

○學友　橫濱市　折部色子

安子樣は北海道で實業家の夫人に、順子樣は大阪で美しい奥樣に、松子樣は東京でハイカラなワイフに、數枝樣は某女學校の教師に、貞子樣は慈深いお母樣になられた、才學兼備で美人な時子樣と妾は當地の一俗吏。

○羨ましき境涯　靜岡縣　岡村双鵠

鍬を肩にして背に月を負うて、ひな調節いと面白ふ歌ひ、己が影を踏みつゝ歸へり來る、賤が乙女の心は優く月の如く、一點の曇りも無かるべし。思へば彼れの境涯ぞ羨ましき。

○惜しい事　德島　笹川益子

一と足違で乘り遲れた汽車、今までどぶへすてた金、夢に拾つた財布、墨をこぼした新坐敷、癲病すぢにある美人、姉が妹の容色ならば、恣をあければ月ばかり。

○飛んだ事　上總　芳蘭

お祖母樣の大事に〳〵して居らしつた、眼鏡を過つて踏みこわした時、遠足に、御辨當を持たずに行つた時、停車場へ鞄を忘れて、汽車へ乘つた時、寸法を間違へて衣物を裁つた時なぞ。

○嬉しい電話　博多　しらゆり子

ケタヽマしい電鈴の響き、アタフタ出て見ると仲好の靜さん「雪枝さん今月の女子文壇御覽なすつて?、オヤまだ?、早く見て御覽貴女のが特別二賞で妾のが三賞よ」餘りの嬉しさにさようならも云はないで話を切つた。

二大附錄

新年號の豫告（四十年一月一日發行 第三卷第壹號）

聲と姿……岡田三郎助先生

岡田先生が特に本誌の爲に揮毫されたる苦心の近作、表情の美、色彩の巧、相俟つて新年の藝術壇に雄視せむ（石版極彩色十數度刷、大阪上等用紙印刷）

明治文壇 出世作一覽

之れ本誌記者が細査の上に成れるもの、明治の文士は如何なる作を出して世に名を成せしか、此表を見れば一目瞭然、永遠に座右に具へて可なり

體裁の美觀

表紙は例の山中古洞先生が高尙艶麗なる筆に成り金刷の極彩色、繪葉書も閨秀畫家の手に依つて花鳥の圖案、水彩畫は三宅克己先生の妙腕に俟ち、表紙見返しの繪手本も益す懇篤に描かれ、口繪寫眞版は殊に材料を精選すべし

内容の盛觀

卷頭の本欄に執筆さるゝ諸先生は大塚楠緒子、與謝野晶子、羽仁もと子、小山内八千代子の女流名家、本誌の本領たる諸孃の寄稿は全紙に滿載し、銀側時計以下の重賞を懸けて募りたる新作の詩文、花の如く雲の如し、加へて課題の珍、文藝遊戲の企ては天下に獨歩す

誌友倶楽部

○各地の俗謡（課題）

○　陸中　蟲森女史

麥搗いた、田植後の夜若い女は替り〳〵巡つて麥搗きをします、三人搗てそのうたは、「麥を搗くならお紀塚山までひびく様に――臼の下がいたまばいため―身を入れてヤアー」、トントントン……

田植うたの一つ、ソーリヤァ植ゑれば〳〵ヤァイ腱はァーやめ候まァづ、腰をやすめろーン」皆さん、妙なうた子ー、お面白いのを聞かして頂戴な

○　神戸　あき月孃

「わしとお前と中さえよけりや、外にお連はいりませぬやつちよろまかせのよいとまかせー」「飾磨女はごんぼににしん、朝から晩まで日があたる、やつちよろまかせの……」が近隣會社の工女歌、「寒いつめたい極寒の冬を浴衣一つて布さらす……」は馬子歌、「あの子よい子じやぼたもち顔や、きなこ、つけたらなほよかろ」は、子守歌、「内のお父さんは芋が好き、小つば、かたげて芋ほりに」、

○　靜岡　貞水子

（茶摘歌）お茶を摘むなら根葉からお摘み上のよいとこ誰も摘む

（茶揉歌）お茶がよれんてお茶師がよれろ揉ませたくない我夫に。

（田植歌）赤い襷を掛たはよいが坪へ這入るのおかしさよ。

（臼挽歌）重い唐臼鐵てはないが嫌だ百性の嫁ごには。

（子守歌）坊はよい子よれんれしな、れん〳〵ころりとしなされば乳も飯も皆くれる、れん〳〵せうやれ庄屋さま。

○　德島　小川なみ子

阿波の盆踊歌

阿波の盆踊歌は俗に『ヨシコの節』といつて、古くから傳つて居まするのが左の三つ四つてす、併しまだありますかも知りませんが……。

『歌へ〳〵とせめつけられて、歌はお倹の傳兵衛さん』。

『花は色〳〵五色に咲けど、君にみかへる花はない』。

『さあサ皆さんお歌ひなされ、歌て御器量は下らせぬ』。

これは重もに市の盆踊歌ですが、郷に入れば『踊の輪』てすから歌も淨瑠璃くづしてす。

『さゝ山通れば筵ばかり、猪豆くれてホーイ、ホイ〳〵』

これは踊の合拍子てす。

○　下總　兼坂秀嶺女

田植歌

向ふ小山で雉子がなく、雉子はなぜなく友を呼ぶホイ〳〵冲の田中て歌の聲、きけば昔の妻の聲（囃し）ホイ〳〵よいな植終祝ひましよふ、内ぢや鯉鮒えの祝ひホイ〳〵。

盆踊歌

踊り始めて踊らぬ奴は、庭の狹いのに邪魔のかよ、（囃し）盆山蹴飛ばせ青空つんぬけ。

○　宇都宮　芳花

○田植歌

日暮小松原ショナ〳〵行けば松の露やら我涙やら。

○はやり唄

ドーセやるなら大きなことおやり富士山崩して麥をまけパカパ。

この「パカパ節」は當地の煙草製造所の工女が唄ふのでございます、まだ〳〵面白いのが澤山はあります。

○　奥州　しらゆき

妾は奥州の山中に住んて居るものてすが當地に行はる子守唄を御知らせしませう。

もりは樂たようてつらいもの一にいじめられ二ににらめられ、三にしやべられ、四に叱かられ、五にごぎ箸まて洗はせられ、六にろくだもの着せかぶせない、七にしめしまて洗はせて、入にはだかれ、九にくどかれ、十には親許に返される。

盆踊唄

この盆踊唄はさま〳〵ありますが一番をかしいのを御知らせしませう、男女打まぢり輪になり交々唄ひます。

なにやどうやら、なにやなされて、なにどうやら。

これをいろいろの節をつけて唄ひます、都の方々にはなんのことやらお分りになりませんてせう。

○手まり歌(紀伊國)　神田 蓮月女史

大黒様と云ふ人は　一に俵ぶーまえてー
二でにっこり笑ふてー　三て盃手に受けてー
四っ世の中よいよーにー五っいつもの如くにー
六っ無病の息災にー　七っ何事無いよーにー
入っ屋敷を廣めてー　九っ御倉の立て並べー
十てと丶んと納まつたー

○　秋田　松田せい子

次の謠はわが角館川町地方て嫁入道具を持つて行く雲助が俗に永持謠といつて歌ふて行く又神社に梵天といふのを獻納する時謠ふのです 仲々勇ましく唄えますよそーて法螺貝を吹いて。

朝のナー出掛にヨハーエ東な見れば黄金ナー交りのーヨハア霧が降るナーエ。

土堤のナー白鶴ヨハー朝日てとけるアネチャナー旗山ヨハー錦てとけるナーエ ジョーイヤサ〱。

○　大阪　岩崎すみれ

をさなごをだきゆすぶりてうたう歌てす

ひとつひよどり　ひの木の枝だに　ひよどり一羽さいくりよと　かんまへた
てんてんつるてん　てんつるてん　つんつるてんつんつんつるつん
一本さしや附人さんよ二本さしやてんがくさんよ 三本さしやさむらいさんよ 四本ばしらは關取さんよ。

子守歌

いたか見てきたか　なんこのとなしよないばちぼたんのさきわける。

○　あやめ

めでたよし

「扨も美事なお太子櫻えは 吉田の常蓮寺、枝は釜崎葉は朝浦、花は船津の町に咲く」

之は飛驒國吉城郡阿曾布村大字吉田と云ふ里に常蓮寺と呼ぶ寺があります、往古から聖德太子の御木像を安置してありまして又庭前に有名なゐ櫻の巨木が御座いますそれに昔國守金森在京様の御自筆て聖德太子御影櫻の高札をあげました、此等の故實を賞して謠ひ傳ふるのださうてす。

これは當國一般に目出度き席上にては必ず謠ふ事になつてをります。

○　丹後　城下　百合子

二度と行くまい丹後の宮津縞の財布が空となる。

丹後立て丶は但馬がたゝぬ兩方立つれば身がたたぬ。

岡人竹野は夏好い處冬は四海の波がうつ。

山と山との咲てさへも住めば都て花が咲く。

○　本郷山　姫

鬮選街道に白菊植てハツトセイ、何をきくきくアリヤ便りきくハツトセイ。

鬮選出るときや大てんぶりよハツトセイ、稲社の宮からアリヤ胸かんじよハツトセイ。

船は稲荷丸船頭衆は狐ハツトセイ、中のお客はアリヤ皆たぬきハツトセイ。

沖に三十日南に廿日思ふ鬮籠に只三日。

○　佐渡　をばな女史

土手の蛙の鳴く聲きけば過ぎし昔を思ひ出す。

可愛男は百だち沖に烏賊を漁るやら眠るやら。

これの出丁場に三艘小松鮨が黄金の 裏をかける。

佐渡のみ時のある御所櫻枝は越後に花が咲く。

佐渡へ佐渡へと草木も靡く佐渡は居好いか住み好いか。

これは妾の地方や直江津の地方で歌づてる海士の歌てございます。

○　下野　鈴木雪子

雨は降れ〱千百日も、わしの心の晴れるまで。

行こか板橋踊ろか土橋、こゝが思案の涙橋。

蝶々蜻蛉の片翼あれば、飛むで行きます様のそば。

山下山前木の葉が落ちる五十部は都てまつ許り。

山の中ては三軒屋ても住めば都て花が散る。

可愛ひ男は來る身(くるみ)の花よ妾しやちよいと出て隔ひの花。

これは當地の機械工場て盛に唄ふ機織り唄てす、調は、變化に乏しく、都々一に似て居ります。

○　秋田　イロハ、ニホヘト

東北の俗謠を二三左に

○姉ちやこちや向け甘いものカアセエル、栗の皮ムエテ中なカアセエル○姉こ何處へ行くカコペコメガエテ、向ふの山へベキヤコ取に。(以上二ツは當地マナリ入れ、「カコペコ」とは草花の入物、「ベキヤコ」とは野に咲く花)

○　あきた　十三子

『人のあたまを目方にかけて、重みあれ共目はたれない』とうたつて、秋田を越えて隣國あたりまて參ります一人の、目のたれない小男は居ります、生國は秋田縣南○○町てあります。

○　下關市　杉山愛子

「中の中の小佃さんなして 脊がかこんだ親の日

に蝦を食て其れて腰がかごんだ一さら二さら三さら四さら五さら六さら七さら八さら九さら十さらとさんの上にやいとをすへてあつやかなしやかなぼとけ」是れは尋常二年以下位の子供が手をひいて中に一人を目つむりてかこませ皆て其のまわりを歌てまわり「其れて腰がかこんだ」て皆がかごむのですると中の者が立て皆の頭を一さら二さらと讃てゝ「かなぼとけ」て最終の一人が次の中の人になるのです。

○子守うた　函館　山本たけ子

おれんれなされよおころりと、造化のめぐみて安々とお生れなされたお坊ちやん、六のお年の其時も、讀書算術くさん〳〵と、お覺えなされて孝行を、お忘れなさるな朝夕にお國の誠をつくされよ。

○手毬歌　小倉　近子女史

やぶの中の、ちようちよぎす、何をなくか、子がないか、親がないか、たつた、一人の坊さんを、靈からすられて、京七日かと思へは七々日。

○　越後　すみれ

すゞ虫よ、悄くなく音をとめてくれ、さゝのさ、わたしもなき度なる、あの子思ふと」これはかあい一人むすめが秋の虫なく頃世を去つたので毎年秋になると思ひ出してなき度なるが虫よお前はわたしの思ひの種であると歌つた歌です。

○　岡山　永原多計子

手毬歌、一イ二ッ三イ四オ五ッ六ゥ七ナ八ア九十ッ、、とゝは、一擬つ利かゝはかんなべ、うちの丁稚は酒けのみ、酒の肴にするめ買ふて、棚に置いたら猫に取られて、猫なないつけたら、石にけつばなづいてすうとん〳〵。

○　土佐　外山十八公

左川逆して水迄逆し人の心は猶逆し。御月様さへ黒罷次第私しや二人の親次第。御醫者藥禮迄山際踊取にや往れずさき次第。親の異見と茄子の花は千に一つも仇はない。庄屋内儀の紅絹裏小袖原は百姓の血の涙。

○　上海　樋口島子

妾は當地に罷出ましてからは故郷の俗歌などすつかり忘れたも同然です何故かと申しますと歌ふ友がありませんから、處が妾一ッ面白い支那の歌を覺へました、左に御覧に入れます皆様御笑ひ下さいよ

シン。ショウ。モートー。
チヤ、チヤドイアヒーヤ
チヤ。チヤ。ドイアリヤンコン。コン。
チーコロンドンジヤン。
アイヨ。アイヨ。アーイヨ
チンスーリヤンコンコン

新課題

日記の初めに

▲日記の初めに何か書いて置くのは心得のある事です▲諸孃の日記には何をお書きてすか▲委細は前々號を御らん下さい▲投稿の締切は堅く十二月五日、新年發表

○我が疑問（一月五日締切）

▲人世は凡て疑問です、諸孃の見る處聞く處にもさぞ疑問は多からうと思ひます、註に其れを伺ひたいのです▲只、疑問と云つても疑團がなか〳〵澤いです、えらい人になると哲學上に疑問があるとか、宇宙に疑問があるとか、疑問の程度も高くなりますが、記者が諸孃に伺ひたいのは其れ程高い疑問てなくとも諸孃が朝夕座臥の間に起る疑問を伺へば宜しいのです▲例へば『源氏物語』と云ふ書物は何が書いてあるか分らぬが聞きたいとか、ある書物にこれ〳〵の文句があつたが解しないとか、極めて簡單なことでも宜しく、今少しく複雜して男女の交際は何うしていゝとか、宗教は何を信じていゝとか云ふやうな人生の疑問でもよろしい▲例は一々擧げませんが、文學、美術、家庭、衛生、社會、學藝、技藝、又は自己の一身上の事、精神上の不思議等あらゆる疑問をお書き下さい▲課題の事ですから一々お答へ申すわけには參りませんけれど、全體に於て諸孃の疑問を承はつて置きますと他日改めてそれ〳〵お答へする機會もあらうかと存じます▲投書規則は凡て每號の課題の通り、長さは七八行のこと。

○諸孃と記者

○記者さんお寒くもお變りありませんか妾下手てお耻しいけれど一生懸命投書して上手になりたいと思つて居りますのどうぞよろしくお引立

て下さい(芳枝)(記者曰、いくらなとお上手になつて下さい)〇記者さん私つまらぬものですけれど當地の風景寫眞をお送りしたいんですが、だして下さいますてしようか、そして若し二錢切手を封入してあげましたから返して下さいますか御手數ですが一寸御答へを(飛騨あやめ)(記者曰、出します、お返しもします、寫眞の裏か別に小さな紙へでも乞返送と書いて下さい)〇記者樣に一寸申上げます私は今年の四月はづかしながら優等の列にも加へられて卒業しました(高等小學)すぐ高等の學校へ入學するのてしたけれども都合が惡くて目的をはたさず目下家に居て文壇は毎月買つて見て居ますそして居る内母は八月十九日に此世を去りました父は當村の小學校に奉職して居ます私の兄弟は五人ありまして私は一番の姉てす外にたれも居ないので私は一番困つて居ます今から私も諦つて投書します(失名)(記者曰、お氣の毒な御境遇ですが、成るべく省貧に御兄弟を發育して おあげなさい)〇記者御一同樣を始め誌友の皆樣御かわりも御座いませんか御寒くなりましたのれどうぞ御身御大切になされて下さい赤心こめて申上ます(長野縣上田町二、二、五、入田村あい)(記者曰、ありがたう御座います、幸ひに何の變りもなく本年も送られるやうてす)〇記者樣はがき文に投書いたしますのはどう云ふ宛名て出したらよいのてすどうぞ無學な者てすからくわしくお教へて下さい(古都紅葉生)(記者曰、本社へ宛てゝお出し下さればよろしい、紙のはしへハガキ文と書いて下さい)〇記者さま私は瑞音先生と醉名先生のお寫眞を拜見したうございますどうぞ本誌上て敬慕して居る二先生の肖像を掲げてお示し下さいまし(紅薔薇)(記者曰、追つて出すことにいたしませう)〇初學者に分り易い英文典、英作文の參考書を教へて下さい(かへで)(記者曰、神田乃武の英文典、花輪虎太郎の英作文教科書一ノ卷など)〇記者先生私は女子文壇一號から愛讀いたして居ります以後投稿しやうと思ひます先生何分よろしく御願ひ致します(遠州川崎町小泉誘子)(記者曰、初號よりの愛讀者にして今初めて投書されるとは、心掛のよろしいことてす)〇記者樣私等は姉妹てす毎日〳〵程遠からざる學校へ通學しています餘暇さへあれば女子文壇を愛讀していたのですが此度奮發して恥しながら投書します利子は姉麻子は妹てす今後よろしく(記者曰、記者からも今後よろしく)〇記者樣あの懸賞圖畫はどの位の大さに書いたらよろしいので御座いますか御面倒てすがどうぞお教へ下さい(野菊子)(記者曰、二寸に一寸)〇記者樣お變りなくつて今は丁度紅葉がよいのねお暇の節に高尾山へゐらつしやい御案内いたします(八王子井澤菊江子)(記者曰、未だ誰の川へも參りません、聊か忙しくて)〇記者樣私は松風寒き湘南の濱に獨淋して暮す賤しい者て御座いますお恥しながら文學などのたしなみは少しも、それをも顧り見ず諧謔方にまねまして小説外一二種投書致しましたが規定に外れては居りませんか伺ひます、それから私九月投書はしましたが惡しいかな沒書もとよりつたなき文て御座いますから致し方御座いませんが書き方はあれてよろしう御座いますか何卒御知らせ下さいませ(湘南大磯の里をみなへし子)(記者曰、今度は出るてせう、落膽せずにお勵み下さい)〇記者さんにお伺申升私も時々投書致て居升就ては拙き者故に本名を公にさるゝも恥しく目立ぬ花の名を貸りて折節誌上の隅に出るのて有ますが此程或友人より雅號のみにては男と疑を受ける恐があるとの注告が參りました、如何でせう雅號のみにては名のみの女子と御覽遊すてせうか(無名嬢)(記者曰、左樣な事は御掛念に及びません實際御婦人ていらつしやれば其れてやましい處はないじやありませんか)〇記者樣、お地に新派和歌を研究して居る會はありませんか、ありますなら委しく御教へ下さい(秋田縣角間川町組丸松琴子)(記者曰、「明星」を發行して居る東京新詩社、其他いくらもあるてせう)〇一寸記者閣下に御願い申ます、貴誌は常に御懇なる評を下さいますので誠に嬉しく感謝を致してをりますのてす、然るにたゞ繪のみはいつも評が有りませんから遺憾に存じて居ります、成ろう事なら來年から評を御願ひ出來ますまいか幾多當選繪の内何處が長所て當選したのか吾々淺學者には解ら無いことがまゝ御座います(京都郭公)(記者曰、一つ選者とも相談いたしてみませう)〇記者樣には其後はおかはりもありませんか當地は十一月三日に初霜が降りましたお地は如何ですか先づは一寸御伺お見舞迄(膽振國有珠郡伊達村矢内菊江)(記者曰、只今は甚だ暖かてす、十一月十五日午前一時)〇御伺ひ申上候誌友倶樂部への投書は他の投書と共に封じてもよろしきや次の誌上にて御知らせ下され度願上候(兵庫縣西ノ宮町森井せい子)(記者曰、よろしく候)

○繪葉書交換

○誌友の諸姉上樣方妾は陸軍戰役紀念はがき六枚と紀念スタンプ付を十七枚を持つております から都合廿二名にかぎり差上ます、申込下さい速い方より上げます（大阪東區内平野町二丁目番外壹番清水碧波方問部紫星）○妾も第一號からの愛讀者でありますこれから皆樣と御交際ゝ願ひます又繪葉書、雜誌、書籍、寫眞、編物、造花、等の御交換をお願ひ申ます寫眞は三十二枚ありますから何ろべく早く送くつて下さつた方に差上げますスタンプ付きの繪葉書は澤山有ます（大坂府泉北郡伯太村福田清子）○皆さん私にもどうかエハガキの交換や文通を盛んにして下さい（熊本縣八代郡八代町長丁山本はる子）○皆樣肉筆或は圖案の繪葉書交換を願ひます（千葉縣印旛郡成田町川島白明子）○皆樣妾は美人名所の繪葉書多く手元に御座います御入用の方は幾枚でも差上ますから繪葉書て申こみ下さい（東京麹町區上六四十田部井新子）○繪葉書及びお寫眞の交換を願ひます先着十名にみにくき妾の寫眞及金澤兼六公園の繪端書（十二枚）一組御返禮致ます（金澤市石浦町廿二番地富脇禎子）○本誌御愛讀の諸姉樣繪葉書交換又御寫眞や編物下さつた方には當地名所の繪葉書一組に耻しながら私の寫眞添へて送ります（筑前國太宰府町藤原房子）○皆さん妾の病氣も全快致しましたから又交際して下さいな上等の繪葉書あみ物いづれも好んで交換致します（下總成田日吉倉内橋爪天波子）○本誌愛讀者諸孃よ私は一小都會にもの學びする本誌愛讀者の一人てすが何卒末長く繪葉書に和歌又は俳句を一首書いて交換して下さい（豐後大分郡大分町三三八番地花井琴子）○誌友の御姉樣方、妾とも美しい繪葉書の交換を願ひます、成る可く詩歌俳句などを書き添へて千、どしどし御惠み下さい、キットすぐ御返事いたします）兵庫縣武庫郡四宮町字池田竹内節方武内包子）○諸姉樣方美しき繪葉書の御交換をお願いたします美しいのを下さつた方へは秀才文壇に立派な繪葉書を添て返禮いたします（神戸市下山中通七丁目二三六、廣澤花子）○御姉上樣妾は初めて御目にかゝります不束者なれども皆樣とおなじうを繪はがき玉章の御交換をば願ます（大阪市北區堂島小橋北詰東へ入瀧野始次内萬子）○誌友諸君繪はがき交換をして下さいな、又琹か編物かをお送りください地方文學雜誌て御禮致しますから（近江高島郡大溝町田中紅雨生）○誌友の御姉上樣何卒繪はがきの御交換を願ます妾は和製舶來をたくさんようゐしてありますから尚ほ先着の御方五名限妾の寫眞を差上ます（金澤市石浦町近田方にて粽ふじ子）○親愛なる諸孃樣繪はがきありがとー猶ひきつゞいて御れがひ申します（滋賀縣滋賀郡膳所町久保藥種店にてやへ子）○諸孃よどうか繪はがきの御交換をれがひます（大津市堺川外科病院内大澤きく子）○誌友の皆樣妾も繪葉書の交換願ます舶來繪葉書にて御申込ひ御方には王子名所飛鳥山公園など御送り申ます（北豐島郡王子村字榎町五四一横山幾江子）○美しきゑはがきや歌を送くつて下さいきつと御禮はいたします（三重縣宇治山田市大字中元町金澤ふさ子）○繪葉書や御玉章の御交際を願ひます必ず〳〵御返事差上ます尚先着者五名までに土浦名所ハガキ三枚上ます（茨城縣新治郡藤澤村大字藤澤須永滿代）○書は大好てありますから繪はがきや御自筆の繪などを御送り下さいませな私もすぐお返事致します（群馬縣山田郡野村二百十一番地中山房子）○湖の繪葉書をお惠み下さい、和洋東西の諸姉樣よ、繪面へ文字は書かずに、彩色のない寫眞版のが欲しいの、紐て下されば尚有難い、お禮は英、佛、獨、米、及び智利の外國切手又は藍草紙て必度差上ます（東京豐多摩郡下戸塚五九四齊藤愛子）○誌友樣よ我は今年やうやう女學校を卒業したばかりの淺學ものて御座りますがなにとぞ繪葉書などの御交際を願ひます（下總印旛郡臼井町立原登樹）○是からが繪葉書の本統の趣味ある時てすわ、お好きな方はどし〳〵送つて下さいお返し致しますから（神田區西紅梅町紅梅舘にて八太ゆかり）○本誌愛讀者たる滿天下の諸孃よ、ドーゾ繪葉書、御手紙の御文通をお願ひ致します（吳市共濟會病院内大藤敏子）○誌友の皆樣よ繪葉書の交換を致して下され、自筆を以て返信致します（加賀國鶴來町波佐谷碧子）○皆樣自筆繪葉書の交換を願ひます私下手てすが全力を盡して書いたのが只今澤山御座いますから何んでも御望みなさつて下さりませ又妾女白菊の歌御もちのかたは下名の所へ御送り下さりませ御禮はきつと致します（本所龜澤町一丁目一七番戸加賀鶴子）○親愛なる諸孃樣御寫眞繪ハガキ編物の交換を願ひます（三重縣鈴鹿郡龜山東町小川ふさへ）○私の處は山の中てすが珍しい土地の繪ハガキ澤山あります寫眞か繪をガキと交換下さい（群馬縣吾妻郡中の條町野田明七方宮上富士）○富士の裾野に朝夕を送る者、

永久に繪ハガキの交換をねがひます(靜岡縣駿東郡須走波邊久子)○誌友の皆樣私くしは非常に不幸な者で且つ至つて淺學者ですがどうぞ哀れと思召して御玉章及び御葉書で交際をねがひ升(下總國印旛郡成田町幡川まつ子)○諸姉上樣妾は誕生日の紀念に繪はがきの御交換が願ひたいのですが、御望みの御方は誕生日を知らして頂戴よ又寫眞玉章の御交換も願ひます(廣島市廣瀨北町武藤樣方享子)○全國の諸孃樣どうぞ繪葉書交換して下さい、御返禮はすぐ致しましから御願てす(陸奥八月拾六日町三五、名久井さえ子)○繪ハガキ交換、信書交換、よろしく(神戸市三ノ宮町二丁目一四、入髙長内藤田マス子)○誌友の皆樣肉筆繪葉書の交換を願ひますすぐと御返事をあげます先着者の美齒の方十名に妾の寫眞をあげます(名古屋市米屋町一七佐野重子)○本誌愛讀諸孃私は未だ至つて未熟な物ですが繪葉書の交換を願ひ合せて御教導を切に希望します(越前吉田郡円山西村開發、野坂まさを)○滿天下の諸孃樣妾房州の山間に住む愚人てすが何卒繪葉書交換なして下さいませ(房州佐久間村奥山高梨順美子)○諸姉樣妾も先月より愛讀者となりましたから宜しく願ひます、就ては五錢以上の繪はがきに和歌又は俳句を認て御送り下さい、先着拾二名に左の雜誌、繪はがき呈す第一着繪はがき「己が罪」第二着繪はがき靖國神社紀念スタンプ附第三着は錢以上の繪はがきに日本海々戰紀念日スタンプ附、第四着より第六着迄は女子文壇、第七着第八着女子文談第九着より第十二着迄て繪はがき(東京市神田區旭町三十二、樋口方穗月女史)○誌友の皆樣のお中て繪葉書交換をして下さる方はありませんか(茨城縣東茨城郡楢村字輿澤村山ゑい子)○京都佐藤鈴翠樣大津太田靜子樣へ過日は好い繪葉書をお送り下さいまして有難たうどうか行く久しく交際を願ます特に大坂の後藤政子樣へ願ます又當欄て繪端書交換などを小請して唯品物を取込む計りて一つも返事を出さないお方があります私しも四ヵ名許り未だ返事の來ないのがあります住所氏名は何れ後便(京都崎藥師寺町四入北田紫翠)○誌友の皆樣したしく御交際下さいまして誠に有り難う存じます、どうぞ皆樣相變らず繪葉書の御交換を願ひますよ(備後國府中町橋本榮子)○私ともドウか繪葉書の交換を願ひますお返事は屹度いたしますから(京都市寺町今出川柳風呂町眞溪房子)○美はしき繪葉書の交換を望む(伊勢宇治山田浦口町濱出きみ子)○淡卒業以來、和歌を學び、遊樂としては繪はがきを求め居ります片田舍の娘であります、だから滿天下の諸孃よ、和歌(新派に限る)一首を麗しき繪はがきに染めて、交換を願ひ升(秋田縣平鹿郡角間川町、黒丸富太郎方、苅萱とみ子)○繪はがきの交換希望します御返事は必らず急いて差上ますからどーぞ(長崎市麴屋町四一番地原田樣方鶴田扇歌)

○諸孃の交際

○記者樣諸姉樣に御交際下さる樣御紹介下さい誌友の皆樣妾はこひしい父母に逝かれなつかしい兄弟もありません其上今は病氣て學校さへ休學して居るのですもの涙ある姉樣方はどうぞ御交際なすつて下さいまし又十五才以下の皆樣何卒御寫眞をお惠み下さい破れても必ず御禮は致します(福岡縣山門郡柳河町美須町足利春枝)○私共も愛讀者となりました以後御心安く御交際を願ひます(宮城縣立高等女學校二年甲組撫才三少女)○愛讀の皆さん寫眞玉章或は繪葉書などにて永へに御交際を願升(千葉縣山武郡正氣村家濱土井眞佐)○親愛なる誌友諸姉樣以後は宜敷御交際をねがひますそしてあの一時的じやなくて永久的にね……然し男子のお方は御ことわり申ますさやうなら(大阪市南區難波新川三丁目河原瀧子)○妾は不幸にして幼き折父にみまかられかよわき母上の膝元に養はれようく高等小學を了へて今は家にて母の手傳をするのみて暇の時にはこの文壇を繙きましてはお友だちと思つて居る樣な有樣て御座ります何卒皆さんからも御文通下さいなお願申ます(横濱松影町三ノ一二五森川方森川すゞ子)○誌友諸姉樣妾は紀州紀之川の中流に住む不束者てす以後は宜しく御交通を願ひます(和歌山縣那賀郡麻生津村茶屋町畑中よしの)○お慕わしき諸姉樣方よ、私も女子文壇愛讀の一人てございますが、小學校卒業のみて上の學びに通ふ事をゆるされませず只文壇を師として學んてをります、そして致都合て此度上京致しまして左記の所に居りますからどうぞ妹として御交際あらん事をおねがひ申上ます、お手紙下さいませ、拙なけれどすぐ御返事致します(麴町區下六番町五拾一番地船津㬢子)○皆樣私は誠にふつゝか者ですおどうか玉章繪はがきの交換を御願ひ申ますそして永遠に御交際をね御返事は必ず〳〵差し上げますよ(神戸市中山手通り二丁目五十六番地小園繁江)○諸姉上樣私は左の處に參りました何

卒何卒相かわらず御交際を御れがひ申上ます(我郷區根津須賀町五番地田中方清月短夜子)○記者樣私は女子文壇の愛讀者てございますから記者樣を初めとし諸孃樣方御交際をねがゐます(神戸市花隈町九十番屋敷河原花子)○皆樣お寒く成つてネ、當地は「初雪」は拾一月二日に降つてよ寒くて私なんか、ちゞこまつてるのよ、ても美しう御座いますわ、見に入らつしやいな、それかち私皆樣にお願ひあるのよ、何卒繪葉書の交換は勿論其他何か面白い又は哀れな曲の『唱歌』を送つて頂だいな伏してお願ひ申上げてよ、之れから冬になりますと何にも樂しみがないのですもの、只女子文壇とオルガンだけよ(北海道龜田郡七飯村字鳴川松非長子)○私此度の一月休みに何處かへ寫眞を取りに出掛け樣と思ふのですが皆樣の內てよい景色の處が御座いましたなら御知らせ下さいませそして末長く御交際を願ひます(埼玉縣兒玉郡東兒玉村大字根木平野三重子)○親愛なる諸孃方樣妾は昨年五月まて女學校に在學して居りましたが不幸にして父に死に別れ今は山里に埋れつゝある身、御手紙又は繪端書の御交際をお願ひ致します(高知縣土佐郡秦村字泰泉寺樺美愛方樣山智惠子)○こがらしの追々吹來りそゞろに故郷を思ふ切なる心の私に名古屋附近の御方と御交誼願度く存じます(京橋區瀧山町十一横山なみ子)○本誌愛讀の諸姉樣私は田舍に住む一少女てすが今回皆樣の御仲間入りを許されましたから何卒末永く御交際下さいませ尙御玉章肉筆畫等御惠み給はり度併せて御願ひ申します(群馬縣佐波郡玉村町六丁目渡邊みき子)○血あり淚あるやさしき方々は此のひとり住居の姿をおなぐさめ給へや。遠き方々は美はしの手紙にあれ、繪葉書にあれ、姿にあれ、送り給ひてよ。さらば妾も直ちに送るべければなり(東京神田區三崎町二丁目二番地小濱さま方前田あや子)○妹のかひがひしく培ひてし我庭園の朝顏凡十色程それはそれは美事に咲きましてよ今年は澤山種子を採りましたから御望みの方に分けて上げ升御遠慮なく郵券三錢封入して御申込み遊ばせそして之れを御縁に御交際を……かしこ(美濃國大垣局區內木村花香)○文壇の愛讀者と相成ましたから以後御交際を願ますそれから尾道樋野須賀子樣御住所を御知らせ下さいませ(備後沼山三吉村坂本たれ子)○長門の國弘きく子樣と備中の倉田小ふて子樣とに申ますあの京都の東田操子樣は十月十五日死なれましたよ一寸誌上てお知せ致します(京都豐子)○親愛なる誌友諸姉樣何か妹とも思召して末ながく御交際を願ます夫れから文章や繪葉書の交換もして頂戴(大阪市北區老松町二丁目一三二、日原逸子)○本誌愛讀の諸孃樣私は東京の麹町に居りますのもし地方の姉樣方東京見物に御上京なすつたら是非私宅へいらつしやい御案內致します東京に御出になる方は御遊びに御出て下さい又繪葉書御玉章等も是非〳〵下さいな願上ます(東京市麹町區三番町五十番地山岡ふみ子)○私方昨年上州邊より取寄せて栽培せし梨本年百個程なりました目方は二百目內外有升妾誌友の諸姉樣へ分與致し度と思ひましてお父上に六十個戴ましたの同好の方六十名に贈呈致し升からお寫眞て申込んで下さい(紀伊日高郡藤田村字吉田阪本六右衛門方春江宛)○始めて御目にかゝりまして妾は近江琵琶湖畔に坐を保つて居ります淺學不才な者てすが本誌愛讀の一人てすから宜敷く御交際願ひますわ諸貴孃樣尙繪葉書や玉章の交換と御貴孃樣の寫眞送つて下さつた方には妾の寫眞に美麗なる近江八景繪葉書を添へて御返禮致します(滋賀縣甲賀郡柏木村酒人藤野靜子)○山浦德子樣へ二ノ拾三號にて久々ぶりに御目もじ仕り御なさけ深きひじつきの御言の葉たまはり信山曲川のほとりなる誌友諸姉と共に妾誠にありがとー存じます今後益々美はしき御言の葉と相變ずの御交際を願ます(信濃小縣郡東鹽田村



此肖像は本誌二巻十號に痛はしき遺言と題して其永眠を報じたろ本誌誌友、山城國乙訓郡乙訓村字井ノ內林はろ子孃てす、乙孃は其臨終にも交際せろ諸孃の事を心に掛け「死してゆく身はいかにせむ梓弓ひきかへすべきすべもなくして」と一首の辭世を殘されました、誠に哀痛の情に堪へません、茲に其芳姿を揭け諸孃と共に聊か悲嘆の意を表します。

村山文子）〇私は周防の片田舍に住む淺學短才の身なれど女子文壇の愛讀の一人として何卒以後行く末長く御見捨なく御交際下されたく御返事きつと致します（山口縣熊毛郡高水村今市山部寄宿舍内藤井芳子）〇上野の宮上富子様先日に失禮致しました何卒お許し下さいまし實際私はすぐ御近所なのよ是非お遊びに居らしつて頂戴な寫眞をお目にかけますから（群馬縣吾妻郡中之條町ときわ子）〇私は實に文壇が好きてすから投書しようと思ひますが外の文壇は皆亂尙過ぎまして私如きが投書しても沒書てすから此度妹の取つて居る貴文壇に投書致しますから何卒ご宜敷く御願ひ致します又諸姉上様にも宜敷く交際を願ひます（福岡縣企救郡柳ヶ浦村字九里北村本榮方村本梅露）〇誌友のお姉様私者高等小學校を中途に退學しました不幸者てす此れから後文壇と樂む心算りてすから何卒れんごろにお教導ありたし（埼玉縣入間郡越生町大字上野吉田とみ）〇滿天下の諸孃よ私も本誌愛讀の一人となりました宜しく御交際を乞ふ（金澤市日本赤十字社石川支部内吉木喜美子）〇私は本年四月本鄕女子美術學校を卒業致しまして只今は實家に居りますが淋しくて仕方ありませんからどうぞ皆様と御交際を願ひ且つ繪はがき寫眞の交換も御願ひ致します（奈良縣磯城郡多村千代小島始女子）〇妾は北陸の片田舍に住む無教育の者てありますが秀才博識なる滿天下の諸孃史の君何卒繪端書御玉章を送り下さい妾も必ず拙い筆もて御返事をいたします（越中出町大字神島村渦淺齋美子）〇愛讀の御方より書籍栞御望下すつた方は二百內餘名須子御望は百餘名の多數てしたから皆様の御心を滿足せしめる事が出來ませんて本意なく存ます、先着三村花子様に差上ました。女夫波上卷石井すみれ様に下卷三田芳子様無花果を大田みつよ様心と心市川とし子様因果を前田峯子様うた、寢を松永茂子様に其他吉井玉翠様を始め轟森子様外四十名に雜誌小說差上げ、絹糸栞卅五名先着や切手封入の方に順次差上ました、外に新聞も差上げ私の寫眞七名にまて差上ました、內男子の方も大分ありましたが初に斷つて居りませんてしたから上等繪葉書の方丈相當御禮致ました、三月末より他出致居まして七月に御返事差上た御方もあります多數の事とて唯の端書の方またもれた方は少なくありますまいが惡からず皆様此上ともよろしく（但馬生野岩崎榮子）〇滿天下の諸孃様妾は高等小學校卒業以來私立裁縫學校へ通て居ります不束者てすが何卒御見捨なく永久に御交際被下一時的の交際いやてすから宜しく御文通を願ひます（京都府相樂郡祝園村字祝園一九小林藤太郎様方小林靜子）〇群馬縣鈴木様奈良縣脇田登美様宇都宮市大關咨様長岡市河內米様神戸市高木せつ様三重縣增森玉様小倉市林千加様大坂市淺田玉様金澤市澤村美代様名古屋市河合菜様和歌山市小川芳様滋賀縣松宮浪様福井市武見すゑ様松江市白石次様仙臺市菱沼しげ様横濱市加藤みゑ様以上の人誠に申兼ますが御地學校繪葉書交換願升よ（武州川越江戶町五九八佐久間白薔）〇靜岡縣諸孃様に御話しいたしますから御笑ひ遊ばしてはいやですよ愚なる私れ－此の文壇愛讀者の皆様と市に住する人は市の愛讀者村に住む愛讀者は村と申すよふに一つの會を開きて月に一度づゝ會を開き和歌俳句を作り益ある話しをなし基金を一錢でも二錢會の度に出して其の金は氣の毒な人なぞにやりたひと思ひますが皆様はいかゞですか（靜岡市靜岡宿新道羽根安子）〇妾は卒業以來獨身にて、又女子文壇を友となし寂しく生活して居る者てあります、誌友の君よ、同情を給はるサンクスの友よイエス、キリストに誓つて接吻の交際を給はらん事を、尙レターを初め上等繪はがき、寫眞の交換を願升返信は決して遲滯しません（秋田縣平鹿郡角間川町黑丸とみ子）〇皆様誠にうるはしき繪葉書を澤山いたゞきまして有難とう御座いました。尙此後も相變らず御交際下さいませ繪葉書交換もとより編ものの交換もに願ひます新聞の交換も（神戸加納町四丁目二十一番堀方伴とし子）〇親愛なる諸孃様今度れ當地の誌友たちと申合せて寫眞繪葉書栞編物の陳列會を開きたいと考へますので皆様にも吾々の心を汲みせられて何なりとも御送り下さいな聊か優者には賞品を差上たい心組てすから御名前をもれぬ様御願ひ申します（奈良縣山邊郡朝和村長柄西岸寺蘿誌友倶樂部）〇此度愛讀者の一人となりました親しく御交際を願ひます（鹿兒島市藥師町三十一番戶上村幾子）〇妾は埼玉の一少女てすが繪ヘガキ御寫眞の交換の仲間に入れて下さい（埼玉縣久木町オオクマダイスケ方水野光子）〇愛讀の皆様の中てお手紙の交際して下さる方と篤實におつきあひ致したう存じます（陸中盛岡市本町田澤タカ子）〇私も記者さんの御紹介を以て末永く御交際をいたしたい（鹿兒島縣薩摩郡高城村湯田野下ふて子）〇都合あつて交際を

一時中止致します（羽後臨田久子）○■南の片田舍に住む秋には繪ハがキや[illegible]の交換御交際をねがひます（大津市御出町大塚茂三郎内亞子）○記者様始め姉様方私も愛讀者の一人で御座いますて今日がはじめてヾす恐れから時々投稿いたしますて何卒御引立下さるよう願ひます（大阪市西區江河境川町八十六番地北村斧夫内野崎應須子）○皆様此頃の寒さは又かくべつなのね！お變りもなくて私も相變らず北海の空に寒さをしのいて居ります、皆様玉章や繪葉書で御交際下さいな留萌の相原すみ様小樽の岩谷絲様札幌の吉川すみれ様小川初子様益々文壇の爲めにお奮ひ下さい私も御同様及ばずながら又北海の雪深き中より拙作でも出しましよ！左様なら（北海道札幌郡江南小學校内米長滑子）○諸姉様よ妾は不束者でありますが女子文壇を讀むの他は何のたのしみもなく誠に淋しいのよ何うぞね、これから永く御交際下さいましな、そして繪はがきを差上ますから葉を頂戴な（日本橋區北緑町高梨文次郎方川名ふく子）○將後永久に且親密に御交際下さる方はどうかよろしく、そして神戸の高木勢津子様、私も御全様非常に音樂が好きて多大の趣味をもつて居りますが御交際下さい（大坂市北區上福島中一丁目五七一なる信子）○親愛なる誌友の姉様方誠に不束者ですけれど御手紙の御交際を御願ひ申ます（松江市北堀町坂田いち子）○皆様私しも女子文壇に愛讀者の一人ですのそをして私は父母や姉妹と遠く／＼離れて獨り旅の空に居ますどうぞ御文通を願ひ升それから皆様不如歸の歌がありなされば「諳」共に御教下さひませんか必らず御禮は致し升（福岡縣鞍手郡下境二七一七岡田露子）

○寫眞編物造花交換

○私の寫眞今二十枚ありますからどーぞ寫眞の御交換をして下さい（靜岡縣小笠郡相草村杉山芳太郎様方山本靜子）○繪葉書の交換ら願ます寫眞の交換も願ます、造花の交換も願ます其他種々なろ品物の交換も願ます（大阪市東區南農人町二丁目番外三十三番屋敷杉本はる子）○諸姉様妾編物始めますが之と云ふ雛形ありません何とぞ御持ちなれば御めぐみ下さる御禮には繪ハガキ一組差上升又繪ハがキ交際をも願ます（靜岡縣沼津綾樂病院内吉澤すみれ）○誌友の皆々様妾も愛讀者の一人ですエハガキ交換なすつて下さい又御寫眞も御送り下さいきつと返事致しますから（兵庫縣飾磨郡廣村ノ内屋畑村田村たか子）○編製の栞の交換を願ふ、返禮は即日致します（羽後國角閑川町三五夜會にて、黑丸とみ子）○皆様妾にもしなりや造花の交換を願ひます妾は寫眞を添へて御送り申します（新潟市古町通二番町浦澤やい子）○姉上様栞、編ものゝ御交換を願ひます繪ハガキはスタンプ付のものなら（大坂市南區上本町二丁目五六印藤政子）○諸嬢様吾が姉君の形見として何卒寫眞一枚御惠み下さいませんか御返禮には男鹿半島名所繪はがき一組差上ます（秋田縣南秋田郡男鹿中村中岡口武田はる）

○圖書換讀

○ふみかきふり上下勤學と處世婦女手藝法、小公子、帝國文學臨時增刊文藝倶樂部不用になつてをりますから皆様の内で伯爵夫人前編、忘れがたみ瓦人の自白緣不緣才媛詞藻と御交換を願ひます（埼玉縣北葛飾郡粟橋町柳沼支店内高橋せい子）○最近大家著小說其他何に本にても御不用の御方は御送りを乞ふ其替り最も公平な抽籤法て一等博文館圖書切手（三圓）二等日本繪葉書會圖書切手（壹圓）又先着者十名に限り二十錢以上の舶來繪葉書を送呈す抽籤の結果は當欄にて讀き物は成可く全部御送を乞ふ抽籤番號は一冊に一枚宛差上候（陸奧國上北郡三本木町十丁目前田花月）○皆様の内で新約物語、玉盃青春、花の詩等御送り下されし方々には相當の謝禮を致します（近江國甲賀郡田川村白水亭内にて井上重子）○皆様私の手許に不用の雜誌が澤山御座いますから交換して頂戴なそしてどうか、にせ紫の後編、新空氣、青春（夏の卷）緣不緣、影法師、月に立つ影、女學生等御送り下さい蛇度御禮はしますから（能登輪島鳳至橫町牧野しか子）○皆様御ぎげんよういらつしやいますか御知らせ下さいな、次に妾は大變音樂が好きてれいつも面白い唱歌を欲しいと思つてゐます皆さん妾の願をお聞き入れてどうぞ唱歌の交換をして下さいな妾もきつと差上げます（靜岡縣磐田郡岩田村匂坂中高柳しん子）○皆様御願てすから左の寄物不用の方は私に何かと御交換して下さいな、亂髮、小扇、毒草、戀衣、舞姬、銀鈴、小詩國、凌霄花、萩の家歌集、テニソンの詩、シルレル物語、伶人、明星、（日本赤十字社和歌山支部病院内大野幸子）○皆様のうちに不如歸の歌御もちの方は下名へ御送り下さいな御禮は屹度致します（埼玉縣北埼玉郡北河原村小林國子）○雜誌及び詩集の交換を望む、雜誌は明星文庫、新聲、新潮、早稻田文學、白百合、女學界の七種に限る、詩集は泣菫、有明、鐵幹、晶子、醉茗、花外、夜雨、白星、孤蝶、林外、御

風、泡鳴、薇園、竹柏園、柴舟、など共に新古を問はず。又望みの交換書なき場合は親り下されば尤もよろし（上總山武郡千代田村林楓江）○敬愛する諸孃樣方私は湖畔の濱邊に磯打つ波を友として猶淋しく暮す者て御座います何卒御交際下さいまし皆樣の内にて「翌背」の御不用（あまり古からず）お持ちの方はなる可く早く繪葉書にてお知らせ下さゐかならず御禮は致します（相模國大磯町大内道枝子）○諸姉樣の内で琴女白萩の歌お知りの方は何卒御敎へ下さいませんか、又十三歳以下のお方が二十歳以上のお方で本紙を永く愛讀なさるお方と永久の文通を望みます（本郷區駒込千駄木町二二五加藤方佐藤山姫）○本誌増刊「をみなへし月」御不用の御方は下名迄御一報下さいませんか御惠下さるならば繪はがきに御送料そへて御願ひ致します（三重縣津市玉置町六番戸金子方糸遊子）○諸友諸姉樣の中て小說戀衣、女夫波、小猫、不如歸、小督族、濱子、魔風戀風、朝晴の中て何れか交換して下さる方ありませんか妾文藝俱樂部、文藝界、女學世界等澤山有りますから相當に幾册づゝも差上ます換へて下さる方は下名へ（常陸國高濱町東大橋丸一、酒樂つれ子）○文壇誌友の諸孃樣方以後御交際を願ひます文通などして下さいなそれから皆さんの中でヴイオリンの樂譜お存じの方ありますか有つたら敎へて下さいもし本てもあつたらお貸しなさつては下さいませんか（茨城縣新治郡高濱町東大橋酒樂つれ子方妹しずえ）○皆樣の内離小島と槃鬱の夢須磨の曲陸奥の花といふ唱歌御もちの方は御送り下さい御禮には五首までの人にさぬきの院といふ唱歌か御のぞみならば栞かいづれなりと差上げます但男子の方はおことわり稚號の方もいけません（東京本郷女子美術學校石野靜子）○九月、私に女子文壇御送り下された諸姉樣の中で書籍と押花て御禮申上た方はやう御座いますが繪葉書てのみ御禮申上て置いた方は至急御知らせを願ます（長野縣東筑摩郡入山邊村桐原緻子）○皆樣淺學の妾とも繪葉書の御交換を願ひますあはせて御願が有りますが四十年一月一日より地方新聞の交換を願ひ度存じますがいかゞですか（靜岡市靜岡宿新道羽根安子）○神戸の高木勢津子樣あなたも音樂をおすきの由でございますが私も下手ですが一番のたのしみといたしてなりますからどうか樂譜を交換して下さいお願ひ申上げます（香川縣香川郡宮脇村一二二、岡田まさ）○英文の日本案内を數册持つて居ます上等の繪ヘカキと交換して下さい（神戸下山手通七丁目廣澤たけ子）○妾は不如歸の歌、金色夜叉の歌、女夫波の歌、新曲浦島、銀鈴、佳句類選、和歌作法指南、俳句萬代集、俳句作法、作文辭書、美文韻文辭書、女學生訓、此外諸雜誌五十餘册ありますが、さつま琵琶歌、作文講話、美文資料のものサンドウ運動法、軍歌、唱歌を集めし本又は諸文學雜誌と交換を願ひます、（新潟市古町通り二番町浦澤やい子）○櫻井鷗村譯の少看護婦御所持の方御ざいましたなら相當價て御ゆづりを願ひます（弘前市本町橫島方村林やす）○地方新聞紙をお送り下さいましたお孃さんには早速御返禮を致して置ましたもし不着の方は御一報下さい猶又今後送て頂戴（滋賀縣八日市町中野小島郎内武村野音）

○剽竊詩文の注意

▲第十四號の分。　▲陸前佐々木巴泉。短篇小說天賞「ゆく雲」は三十六年三月の「ゆく雲」（鈴木狹花氏作）の第五以下の剽盜▲近江、宇野民子。新體詩天賞「遊蝶花」は詩集「花がたみ」二四頁山田林泉君の作を剽盜せしもの▲福岡、天津乙女。新體詩三三頁「花賣女」は兒玉花外氏の「ゆく雲」七三頁より竊めり▲佐渡、谷川桂月。和歌秀逸「朝絲藤の花……」は「少年界」五ノ七一等賞國田俊致君の作を剽竊せり▲成田、櫻川ちぐさ。新笑話天賞「寫眞」は「兒童新聞」「少年界」「萬朝報」等に殆んど同一のもの出たり何れかの燒直し當選無効とす。

▲第十三號の分。　▲兵庫。賤夫。論文「活動力」は「處世大觀」より剽竊の疑あり▲福岡。波月。新笑話「子供」は「中學文林」一號千葉森ぞきん氏作を剽竊。

▲第十二號の分。　▲豐前、花溪女史。圖畫天賞「白雨」は本年六月の「中學生」六號口繪の半分を剽竊せり。

○例に依り右剽竊詩文を綿密に注意されたる諸孃の姓名を左に列記して感謝の意を表す。

○下野、花守○つた○京都、宮內淳子○近江、辰井○若狹、津田落葉子○愛讀生○一田舍者○越後、愛讀子○大阪、愛讀女○越後、田村米子○肥前、和子○栃木、染谷德子○福岡縣、坂田登代子○常陸、橋本春江。

motherhood. An unlimited assortment of beautiful sayings concerning mothers might be gathered from the literature of all lands and tongues. Here are a few taken from a certain magazine:—

したる美德の格言類聚は無數にして，世界各國の文學或は言語よりして，收抽するを得べし，茲に某雜誌より拔萃したる數句あり。

A mother is the holiest thing alive. *Samuel T. Coleridge.*

母は生ある者の中にて最も神聖なる者也。 文豪コロレヂ.

A mother's prayers, silent and gentle can never miss the road to the throne of God.

Henry W. Beecher.

無聲にして，溫和なる母の祈は神前に達せざる事なし。

宗教家ビイチアール.

A simple kiss from my mother made me a painter.

Benjamin West.

母よりの接吻は我を畫工とせり。

美術家ウエスト.

All I am my mother made me.

John Q. Adams.

我の凡ては母の造りし處なり。

米國大頭領アダムス.

All that is purest and best in man is but the echo of a mother's benediction. *F. W. Morton.*

吾人の至淸至善は即ち母の祝禱の反響なり。

政事家モルトン.

All I am or can be I owe to my angel mother.

Abraham Lincoln.

我の我たり且又我成し能ふ凡ては我之を母より受けたり。

米國大頭領リンローン.

Heaven is at the feet of mothers.

Persian.

天は母の足下にあり。

ポルジヤ人の格言.

A wife, a mother: two magical words comprising the sweetest source of a man's felicity.

L. A. Martin.

妻，母，此有力なる二語は人生幸福の最美の源を意味す。

宗敎家マーチン.

I am indebted to my father for living, but to my mother for living well.

Alexander the Great.

我は渡世の恩を父より受く，然れども正しく渡世せんの恩は之を母に受けたり。

アレキザンター大王.

A. Don't they celebrate the New Year?

B. Yes, but less than Christmas.

A. What do they specially do on Christmas?

B. They go to church and send presents to their friends, and have big feasts at home.

A. Do Children take any part on the day?

B. It is especially the day for them. They sing and recite appropriate verses at church, and they believe that if they have been good during the year, Santa Claus will bring them presents.

A. I read something about him in the National First Reader. He is an imaginary being, isn't he?

B. Yes, he is. I shall tell you about him when you come to see me at home. Won't you come to my Sunday School Christmas to-morrow at 3 P. M.?

A. I shall be delight to come.

甲. 正月は祝はないのですか？

乙. 祝ひますが，クリスマス程ではありません。

甲. 何を格別に致しますか。

乙. 教會に參り，それから御互に進物を交換し又家々で御馳走があります。

甲. 其日は子供にも何かある日ですか。

乙. 殆んど格別子供の日です．彼等は歌ふたり，適當な句を暗誦したり，また年中好い子供であれば，サンタ，クロースが贈物をして呉れると思ふて居ります。

甲. 私はナショナル第一リーダで，サンタ，クロースの事を讀みましたが，一躰想像の人物でしよう？

乙. 然うです，私の宅へ御出で下さいました時又緩々御咄しいたしましよう。明日午後三時からあります，私の日曜學校のクリスマスに御出でなさいませんか。

甲. 喜こんで參ります。

Mother.

Every thoughtful man who writes or speaks, at some time or other pays his tribute to

母

思慮あるの士は，彼の言葉或は筆に於て，必らず其母に對して謝意を表するの時あり。母に關

Else our lives are incomplete,
  Standing in these walls of Time,
Broken stairways where the feet
  Stumble as they seek to climb.

さなくば人生　半途の家
時の圍中に　聳ゆるのみ,
崩れし梯子　踏みそこね
昇る間際に　地に落ちん。

Build to-day, then, strong and sure,
  With a firm and ample base;
And ascending and secure
  Shall to-morrow find its place.

堅固の住居　今日建てよ,
強くゆるがぬ　基礎をすゑ,
いよ〻高きに　昇りつ〻
明日の業にも　礎えなまし

Thus alone can we attain
  To those turrets, where the eye
Sees the world as one vast plain,
  And one boundless reach of sky.

(Longfellow.)

斯てこそのみ　達し得ん
櫓より見る　寧や如何に,
極しも知らぬ　大原野
天涯渺茫　又渺茫。

Christmas.

A. Will you please tell me what is meant by Christmas?

B. Certainly. It is the greatest nacional holiday in Christendom.

A. What time of the year is it?

B. It is the 25th of December.

A. How do they keep the day?

B. It is impossible to tell you in a few words. It is as great a festival to them as the New Year is to us.

クリスマス

甲. 何ぞクリスマスとは何の意味か教へて下さい。

乙. エーエー. 其は基督教國に於ては最大の祭日です.

甲. 何日に當りますか?

乙. 十二月の廿五日で御座います。

甲. 如何に當日を守りますか。

乙. 一寸ではお談し申上兼ねますが, マー正月が我々に取ては大切な祝日の樣にクリスマスが彼等には大祭日です。

女子文壇第二巻

英　文

津田梅子閲　河井道子述

The Builders.

All are architects of Fate,
Working in these walls of Time;
Some with massive deeds and great,
Some with ornaments of rhyme.

Nothing useless is, or low;
Each thing in its place is best;
And what seems but idle show
Strengthens and supports the rest.

For the structure that we raise,
Time is with materials filled;
Our to-days and yesterdays
Are the blocks with which we build.

Let us do our work as well,
Both the unseen and the seen;
Make the house where Gods may dwell,
Beautiful, entire and clean.

建築者

皆命のせし　建築者
時の檣内に　働きつ
彼は手柄の　柱たて
此方は詩歌もて　飾るなり。

無益拙劣　一もなし
皆其地位に　適ふけば，
不用と見ゆる　細工すら
缺けなば家は　ゆるぐべし。

我等の建つる　家の爲
時は材料　採集し
我等の今日や　明日は
積み重ぬべき　石，煉瓦。

然れば勇みて　働かん
見ゆる見えざる　わかちせて，
神住み給ふ　殿(ミヤ)建てん
壯麗，無缺　清淨に。

新年以後の大懸賞品豫告は前號にあり

募集課目

選評大家（文學士巖波壞音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、鹽谷小波先生、山中古洞先生）

○論文 ○抒情文 ○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内） ○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行内） ○新躰詩（半紙十句以内）

○和歌（半紙一首） ○新歌謠（上全） ○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新俳句（半紙一句）

○新笑話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事

但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

（三十九年十二月迄）

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）

一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）

一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○他人の作物を剽竊したる當選文は勿論無效たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（同封）取纒郵送するときは開封にして華劃せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ　總て郵送無料なり】

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書、寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百頁）	前金拾錢
八册（半年分增刊共）	前金七拾六錢
十二册（一年分增刊除く）	前金壹圓八錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵稅無料

定期增刊　二月十五日　五月十五日　八月十五日　十一月十五日　發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます（郵券代用は壹割增）

廣告料　改正

特等	一頁三十圓	半頁……	一行
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行…
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰　半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年十一月廿八日印刷
明治三十九年十二月一日發行

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許轉載

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

（坪内製本）

第貳巻第十六號
（卅九年の最終刊）

女子文壇

明治三十九年十二月一日發行
（毎月一回一日發行）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇最廉無比
郵税壹錢 中受けず

（東京秀英舍印刷）